

913.52-125-32



1200500757485

1.25
32

色大鑑

鶴全集

一篇



始



Q13.52

I.25

32

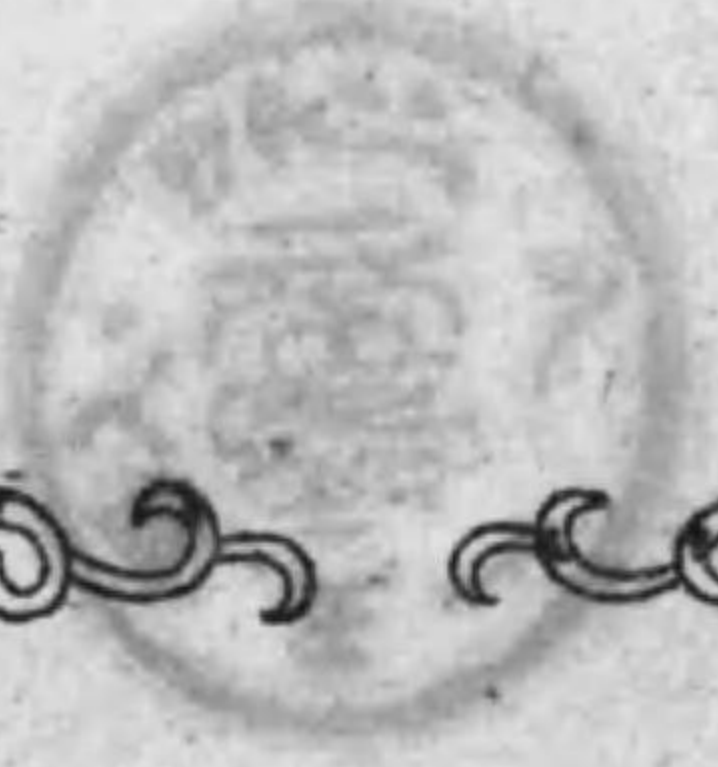
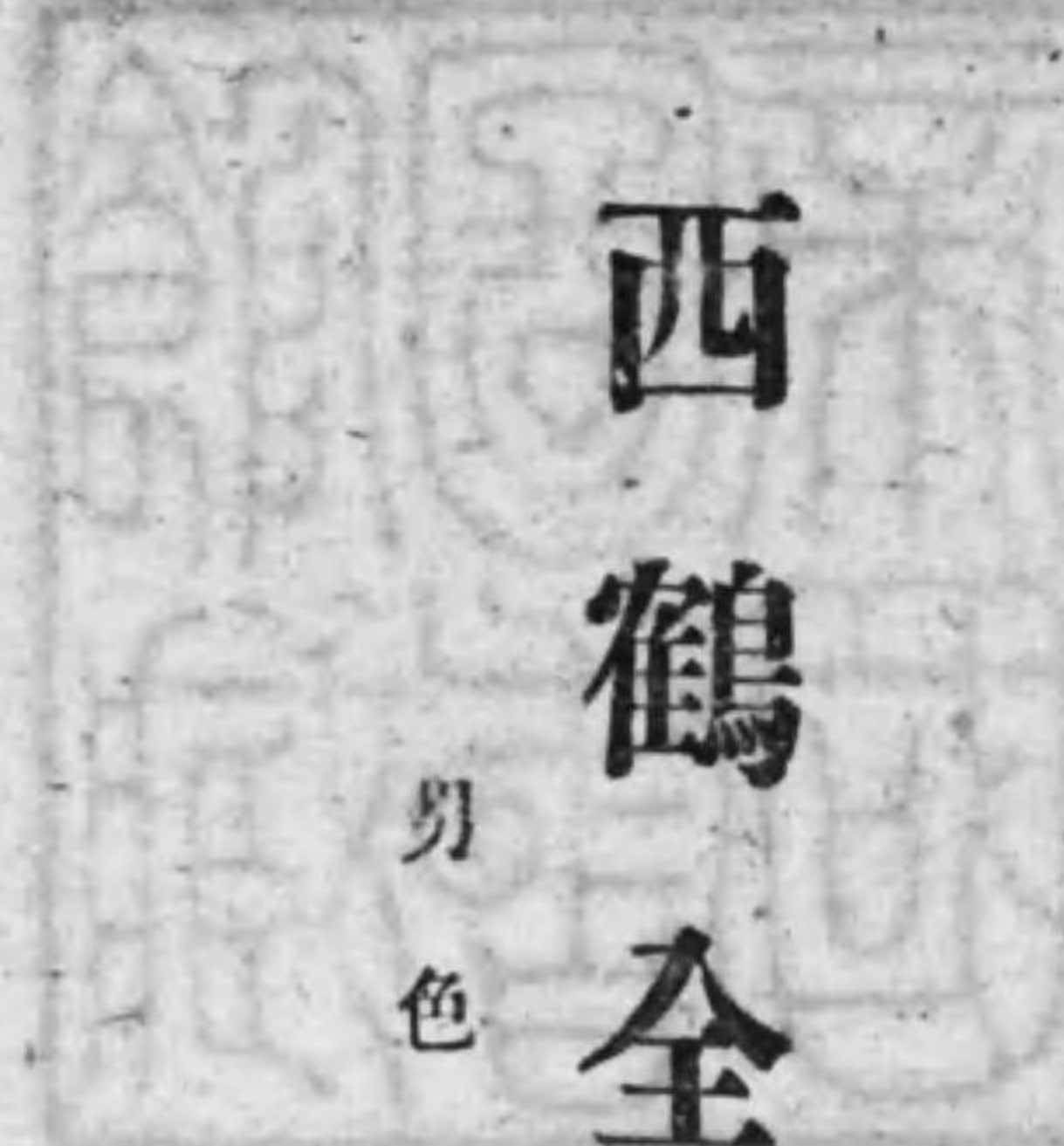
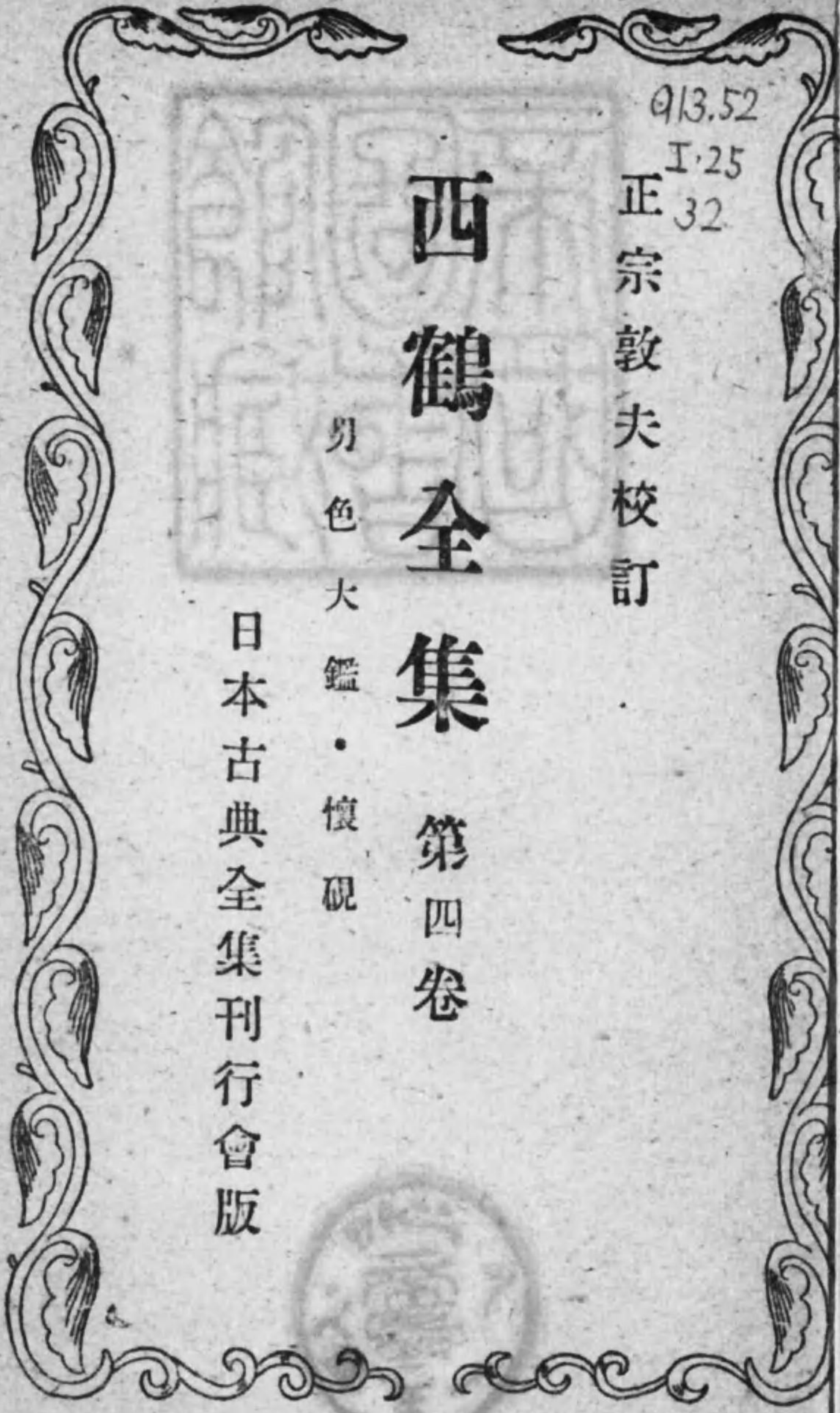
正宗敦夫校訂

西鶴全集

第四卷

男色大鑑・懷硯

日本古典全集刊行會版



男色大鑑解題

男色大鑑は一名を「本朝若風俗」と云ふ。巻数は奥書に有る通り八巻に成つてゐるが、二巻と七巻とが分たれて十冊に成つてゐる本も有りとのことである。水谷氏は

版行 貞享四(丁卯)年正月吉日

挿繪 吉田半兵衛

製本 竪八寸六分 横六寸一分

本文 梓竪六寸七分 横五寸四分

行数 十二行

と説明してゐられる。此書は西鶴作として別に誰も異論は無いやうである。名の示すが如き著述であるが、大鑑と名づけた程有つて世界中での男色の事を書いた本のうちでは屈指の大著であるとの事である。

我が國でもかなり古くからかゝる事も文獻の上に現れてゐる。室町時代頃からはよほど流行したものと見える。徳川の初期より元禄時代にかけては益々盛んになつた。此書は其隆盛期の産物である。

982
231

此書は前四卷に武士の念友關係を書き、後半四卷に衆道、野郎にかゝる情事を書いた短篇集である。當時の人情風俗を知るには又なき好資料である。

此書は唐土の故事を引き其の文句をさながら書き付けたる處がかなり多く目立つ。艶隠者と似通つた筆つきがある。注意すべき點であらう。

此書の原本は今の中々見る事が出来ない。本會では幸に大坂の諸先輩の盡力で渡邊霞亭氏の本を以て校合することが出来た。寫眞も此の本から撮影した。然るに氏は此書の出版に先だつて故人と成られた。今はまのあたり其御厚意を謝する事を得ぬのは残念至極である。嗚呼

夕殘の友解題

是れは西鶴遺著の内の一冊で最も後に出版せられたものである。元禄十二年と云へば西鶴没後六年である。

此書は多く俳諧者流の逸話めけるものを書き集めたものである。「置土産」や「織留」などと共に遺著で

男色大鑑

月夜紀思服尔眩々天地
なむの耐ひるもの物あまの
乃か一毛羽神とあは。國常
とありま。を飛より三代
空より水く。飛道の根え
天神の代りて。陰陽
く男女の神とぞ。流のま
祭れむ。流のま。流のま。

日本紀、愚眼に眺ければ、天地はじめてなれる時、一つの物
なれり、形、葦芽の如し、是則神となる、國常立尊とまをす、
それより三代は陽の道ひとりなして衆道の根元を顯
はせり、天神四代よりして陰陽みだりに交はりて男女
の神いでき給ひ、なんぞ下髪のみかし、當流の投島田、梅
花の油くさき浮世風に撫へる柳の腰、紅の湯具、あたら
眼を汚しぬ、是等は美兒人のなき國の事、欠、隠居の親仁
の翫びのたぐひなるべし、血氣壯の時、詞を交はすべき
ものにもあらず、總て若道の有難き門に入る事おそし、

貞享四年龍集丁卯阪日

永 鶴

壽 松

男色大鑑

本朝若風俗 第一卷

目 録

一 色は二つの物あらそひ

神代のはじめは衆道の事

日本に隠れもなき女嫌ひの事

卷明根元記口談の事

二 此道にいろはにはへと

若道の手本書く事

都の花より里の前髪の事

情懸し法師は行方しれぬ事

三 壙の中は松極柳は腰付

男色大鑑 卷一

思入は見舞帳に知る事

病中の願書八幡に籠める事

惜きは角入れずに元服の事

四

玉章は鱸魚に通はず

大社は若道も結ぶの神の事

三年の通ひ密聞人泪の事

恨は死にざまに雷置の事

五

墨繪につらき劍菱の紋

黒焼は命を取る薬の事

女筆も手筋知る事

鰐川は矢さきに枕む事

女川と川のわかれ

天照神代のくらの渡橋のつらきとめは尻川とてさうぢ
 のおしをてお尻ふりさるる日のふ唇れををを
 まらぬおれ虫ともしおの死とわらうとやゆふ日と
 蛸蛤國ともそのまゝも老れゆふふ小橋田作
 大それたれら世ふ森さおのちを揚ぐ仲人目
 鼻もお鼻入るお首の二親のやふとされお男色か
 とおなるとしてわさびさうふふふの人のい物なるお
 とらうとされおめおれおさう。倭漢ふと親友の
 乙女のふふふお命とまらせ。お社を落すか
 とけく。武事とて年小松と定りてふふとわら
 代おしびり男侍の人の中におふとせよわ

色は二つの物あらそひ

天照神代のはじめ、浮橋の河原にすめる尻引といへる鳥の教へて、衆道にもとづき、日千磨尊を愛したまへり。萬の虫までも若契の形をあらはすがゆゑに日本を蜻蛉國ともいへり。素戔嗚尊老の事欠に稲田姫に處れ、これより世に姦しき赤子の聲、取提婆、仲人目鼻も出来、嫁入長持、葛籠二親の厄介となれる。男色ほど美なる翫びは無きに、今時の人この妙なるところを知らず。されば若道の深き事倭漢に其類友あり、衛の靈公は彌子瑕に命をまかせ、高祖は籍孺に心を盡し、武帝は李延年に枕を定めたまふとなり。我朝にもむかし男伊勢が弟の大門の中將と五歳に餘りての念友、此年月の内に花を見ぬ春、秋の月を忘れ、わりなき情には雪を被き、嵐を袂にいれ、氷の橋を渡り、とがめる犬の焼飯を興へ、穴門の巖きに合鉢を拵へ、闇にも星の林を怨み、螢の光をも憎み、下部の涼み拵たる腰掛とやいふものに足は蚊の血に染めなし、是にもあかず曙の悲み、前髪の風にかはらぎ、ばら／＼鶴の別まにふらぬ雨かとの泪、すぐに硯に灑ぎ筆に思ひを運び、通事集と名付て此事一卷に残せしに、いかに之は見捨て、なんぞや、女の事を物語につくり、うひかうむりせしも奈良の都にいかずの、念者を見限り、若紫の帽子、是ぞ野郎の元祖なるべし。なほ後つき藤橘の祭を假める装ひ、垂柳の風を含



めるに等し、毛織西施も羞ぢぬべし、なほ男盛になりて、業平も根本美少人を好けるに、浮世に陰陽の神などいふ事、草葉の蔭にて、さぞ口惜かるべし。又吉田の兼好法師、清少納言が甥の清若丸に千度の通はせ文は、人も見ゆるし、一度の艶状頼まれて書きし浮名の、末の世迄もやむ事なし。人皆恐るべきは此道なり。我生を享けて其時今の智慧のあらば、女の乳は飲まじ、摺粉あま物にて人間育ちたる例數多なり、黄角は男世帯にして住所を武藏の江府に極めて、淺草の片陰に借地をして、世の愁喜、人の治亂をも構はず、不斷は門を鎖ちて、朝飯まへに若道根元記の口談、見聞覺知の四つの二年まで諸國を尋ね、一切衆道の難有難有らざ野集め、男女のわかちを沙汰する、十一二の娘はや前後を見ると、同じ年頃の少人齒孫いて居ると、女郎に振られての床と、時のある歌舞伎子としめやかに語ると、氣のかたわづらふ女房扱ふて居ると、切々無心いはるゝ若衆持て居ると、子ども買ふて遊ぶ座敷へ水神囃の落ると、傾城と染まぬ内に死で下されいと剃刀を出す、博奕二負けての翌日十五ぐるひすると、下り口の買置して飛子を咄すと、入聲して宵から寢て次第に瘦ると、主の子を念比して晝ばかり顔見ると、六十あまりの後家かくれなるの脚布して小判よみて居ると、角前髪の木綿帯してむかしの誓紙を見てゐると、鳥原通ひすぎて家賃の流るゝと、道頓堀ぐるひ過て御城米借りて切の近づく、百物語に若衆の化物いづると、さつた女房のねだりに戻ると、

樂屋がへりの漏笠覗くと、道中にて禿にお位を問ふと、高野坊主の小姓になると、隠居の手懸者になると、籠拂の神子男ばかりの内を心懸くると、伽羅の油を賣る子が中間部屋をいやがると、齒黒付る女の口もとゝ、若衆の鬘ぬく手もとゝ、知らぬ揚屋の門で雨やどりをすると、子供宿から闇に提灯かさぬと、風呂屋者と知音すると、三十日切の若衆忍ぶと、遊女をうけ出すと、野郎に家買ふてやると、よし原の太鼓に羽織かすと、川原の金剛にこまがね預けて置くと、新明へ登前に行きて娼婦と念比になると、芝居の顔見せ前に子供の情深うなると、茶屋女の菓子喰ふと、香具の若衆の秤目せゝると、川御座に太夫子の後髪見ゆると、花見がへりの女中乗物に鹿子の襪先見ゆると、上下を着たる少人の小者に書物をもたせて行くと、ゆたかなる腰元の婢女に時代時繪の文箱持たせて行くと、大名御物の大書院に座したと、築地女郎のしどけなき立姿と、脇ふさぎたる若衆に狀をつけて笑はるゝと、大振袖の女に思懸られ、尻目で見らるゝとは、いづれか二つ取には、其女美人にして心立よくて、その若衆なるほど、否風にして鼻そげにても、一つ口にて女道衆道を申す事のもつたいなし。惣して女の心さしを喻へていはば、花は咲きながら藤蔓のねぢれたるがごとし。若衆は針ありながら初梅にひとしく、えならぬ白濁し。爰を以ておもひわくれば、女を捨て男に傾くべし。此道の淺からぬ所を普く弘法大師のひろめたまはぬは、人種を惜みて末世の衆道を見通したまへり。是さかんの時は命を捨つべ

し、なんぞ好色一代男とて多くの金鏡諸の女に費しぬ、只遊興は男色ぞかし、さまざまの姿をうつし、此大鑑に書きもらさじと、難波淺江の藻鹽草、片葉の蘆のかた身に、これみな聞流しの世や。

此道にいろはにほへと

角屋敷ばかり六ヶ所、大名借の手形迄脇替の弟に譲り、都は地車の響、天秤の音さへ物のかしましかに、朝夕黒木賣も女の膝に聞あき、賀茂の山陰に北を見おろし、綾帽の村立東に洞の葛紅葉、西に自然と岩組あつてまかせ水の清く、南は松高く夜は葉越の月さぞと思はれ、爰に見立て軒は笹葺を結び、心に懸る雲もなけれど、折ふしの時雨にぬれの道は忘れてわすれず、今でも美少人は訪へかし、我枕淋しきは兼て合點の身にも寢覺の千鳥物かなしく、川音の耳にせはしく、老の浪立影は耻かしと詠れし、石川丈山入道の住るも此奥よりの水流なり。岩根滑かに野飼の牛の残せし萬の草迄も枯果て、雪におのづと道絶て豆腐醬油にも事をかくのみ、組戸さし籠、川原の顔見せ芝居も今時なん入替はる、若衆方を、思ひやるばかりに其程を過ぎ、なほ多めきて人の足音も早く、山草被きし者の膝、餅突書出し、今の徳は其を知らずに萬事は闇の夜も明け、春知らせ鳥の轉りに南枝始めて障子を開き、霞の中に匂ひの油、自鬢になでつけの男つき誰にか見すべし。春深く山浅く無用の櫻咲て、人の鯉子後家



らしき素まじりに、清水仁和寺の花は見足すや、此片陰に来て青林を酒に浸し、それさへ悪きに色ある女を願もらひにおこす、無とてやらす、其後箸借にくる、面は見て返事もせず、やうやう西日になつて樽は口せず轉し、水風呂の湯もすて、久三も取りまはし賢く仕舞へば、女は噪しく櫛足袋をぬぎて袂に入れ、銀の筭を楊枝にさしかへ、櫛も鼻紙袋にをさめ、紅の脚布を内懐にまくりあげ、上着の衣裏をかなしみ首筋を取りのけ、木の枝に掛け置し木地笠をとりくんに、いそぐや暮の面影、今朝とは見苦しく、町の女房のよろしからぬ事ばかり目にかゝりぬ。歸るさに生垣より覗き看懸を見て、出家でもないが見ぬ良しをると聲高に叱る、その理なり。それがし女好まば月鉦の町に歴々の入縁あれどもかつて取合はず、そのみならず、修學寺の御幸に御所乗物に、つきんくの紫に四紋の後帯玉むすびの黒髪の見ゆるもうたてく、北の方の窓塗塞きて日影草のあるに甲斐なき身も、歌と讀とあつて里ちかき童子經ををしへ、手習屋の一道と名に呼れて年月を送りぬ。折ふしは彌生の四日の空、隴げなる暮方より、夜習の心懸は明日のさらへ書を互に耻ぬ。文字を落せば鯨ざしの敷を當られ、又は机を負はせ、門前をまはらす事もをかし。その日の當番は下賀茂の地侍篠岡大吉九歳、小野新之助同年なりしが、此兩人皆より先に來るに道橋のたよはく、暮に渡るも浮雲と大吉からげして、新之助を負て川を越し、いたはる風情、殊に寛の流も手桶に運びて、茶の間に燒付、落葉の煙を厭はず、塵

敷掃までも獨働き、相番の人には萬をゆるす、新之助は懐中鏡見て前髪のおくれなで付、身を嗜む様子こざかしくおもはれ、空寢入をして見るに、大吉が手をしめて日外の所は今に痛ますかといふ。是程の事はと肩をぬげば、草紙巻、封じ小刀にて若道の念約の印、紫立て少しおもはれたるを思へば、我ゆゑの御身の疵と、泪四の袖をひたし悔むを見て、大唐の薨の莊公は御年もまだしき時、子都を愛し給ひて玉の袂より御手を取かはし、細行の道車を留めたまふ粧ひもかくやと思ひ斗る、魏の哀王は龍陽君を念友に定まりて後女亂をさまり、國中衆道に諒あるを知るとかや。我此道を深好するによつて自然と若年に辨へて、淺からぬ心ざし末迄見届けるに、連理面々鳥のかたらひおろかに頭をならべ、暫時も離るゝ事なし。なほ熾になる時は二人が美形にひかれて俗男女にかぎらず、千愁百病となつて戀れ死其數しらず、その比鹿が谷の奥に念佛の行者住たまへり、八十餘歳を保ち、今となつてかの兩若の衆盛を見て、後世を取外し前生を忘れたまふとや有人の語りければ、いづれに御心の有もしらずとて、兩人共に彼草庵に尋ね入るに、案のごとく花も紅葉も捨たまはず、春秋よりの思ひを霽させ給へり。残る言葉もあれば重ねて音信けるに、はや御出家はまします、世を思ひ葉の二またの竹に昨日の日付にて書おかれしは、旅衣涙にそむる二心、おもひ切よの竹の葉隠れ、此老僧は何をか耻たまへり。過にしや眞雅僧正の事も、思ひ出るときはの山の岩つゝじ、いはばこそあれ戀しき

物と、その竹を横笛二管に細工のあものにおこさせ、寒夜の友吹すれば天人も雲より覗き、無官の太夫も現はれ、今の世の庄兵衛など息の出所を感じる、さればはかなきは人の身、詩人は枕夢夕日と作れり、歌人は假のやどりの曙ともよめり。あゝ現か、聊か、新之助せめて霜ならば晝消ゆべきに夜の明るをも待たず、七の鐘の鳴時目覺して目を瞑ぎ、十四歳にして末子に此川水を残して深く嘆かすは大吉なり、今は聞人もなしと笛竹を打碎き、これも烟となし、其身は常精進となつて岩倉山にとり籠り、手づから剃刀にて惜や黒髪を。

垣の中は松楓柳は腰付

世界一切の男美人なり、女に美人稀なりと安部が晴明が傳へし仔細は、女の面は白粉に埋むのみ、唇に紅花、齒を染なし、頰を作り、眉の置墨自然の形にはあらず、ひとつは衣裳、好に人を誑かす事ぞかし。絹帷子の袖涼しき風の森近き里に身を隠し、生國の大隅にも長浪人は住らし、榮花はむかしになりぬ、橋十左衛門とて武道すぐれての男、古主にも惜みたまへども家老職の者との口論、是非な城下は闇に立退き、時節の朝日を待ちぬ。女は山城の國栗栖の小野の奥そだちなりしが、年久しく一條村雲の御所に宮づかひして、親里の碓の音も今は玉琴に聞替、同じ油火も松明進むると云ひなし、

賤の家の穢味増進も酒麴と言葉を改め、物毎やさしくよきを見習ひ、風儀もそれにつれて都良になりぬ。十左衛門世にある時此御所に筋目あつて、此の女廿二の冬はじめの冢の日乞請け、夫妻にして此中に一子常ならぬ生れつき、母自慢もまことにうるはしく、名をさへ玉之助とて今は十五歳になりぬ、面向不背の髪 knot、龍宮よりの見入もあるべし、此美形の田舎には惜しやと見る人の申せし。今の東武に身躰望みを懸け、家久しき若黨金澤角兵衛積年五十に餘れば、物のさばき儘なるもの付けて、旅はじめの曙急ぎ、名残の姿を見送り、かまへて武士の心懸は命を惜む事なかれと、この一言より外はなし。母親は角兵衛が近くによりてしばらく叫び、別れさまに中にも其事をよと仰られける、つきつぎの者ども何の事かと思ふに、玉之助角兵衛を招き、只今母人申されしは、我に執心の人頼むとも文などの媒つかふまつるなど仰せけるか、誰人にも焦れての狀賜はるを、蟬りて届けずば汝戀しらずなり、我たま〜人界に生をうけて、然も又世に悪まれぬ程の形にしてその情しらぬも口惜し。大唐の幽信が楊州にて無情少年と宗珍に作られしも、強顔心からなりと語りたまへば、角兵衛も分別して、いづれお袋様のやうに御氣づかひあそばしては、浮世に若道は絶え申すべしと大笑ひして行くに、夏海の靜に望津よりあがりて、須磨の關といふも戀せばつらかるべし。相坂の關と聞くも忍ぶ身ならばと思ひやられ、勸修寺のあたりより北を見渡し、母の古里もあの山陰ぞかし。今は所縁の人もなく



間はず打過ぎ、梅の木の家屋とて和申散の翼あり、汗をしのぐ冷水嬉しく、江戸より御迎の男爰に出合ひて御奉公のあらましを申せば、心よくて水無月はじめつかたに着きて間もなく、御目見濟て會津に御供申してくだりぬ、心ざし人に越え、おのづと御前よろしく、國中にありし少人の花はみな入日の朝良となりぬ。或暮風絶えて鞠垣の柳も動かず、岩倉主水、山田勝七、横井隼人、玉之助いづれも色ある蹴出し、御前の御機嫌此時とまるべき所、玉之助手前にて落る事度々なり。日比は家中一番の上手、飛鳥井の家にも生るべき人と沙汰いたせしにと見るうちに、俄に眼ざし替り、身にふるひ、手足青ざめて、装束ぬぎもあへず杵首絶て、はや息の通ひもなかり。おのゝ驚き、水急ぎ薬を興へ、正氣の時屋敷に送りて、色々醫術を盡したまへとも更に甲斐なく、次第に浮世の事極りぬ。此一人のなげきに世間の鳴をやめける。爰に笹村千左衛門と申して御領境の御番所預りて、御城下の人は見知らぬ程の末の役人なりしが、玉之助をあこがれ明暮思ふに便なく、いづそは書通に心を御知らせ申すべしと思ひ込し内にかゝる仕合、御命に障る事あらば中々世には住まじく思ひ定め、玉之助支關迄諸人の見舞と同じう帳に付きて歸り、又晝機嫌を窺がひ、夜に入て御氣色を尋ね、日に三度づ、半年あまり勤めけるに、あやふき露命免かれ、塵汚を濯ぎ肌をあらため、御前の御禮をはじめて仕舞、年寄中残らずまはりて私宅にかへり、角兵衛に見舞帳を取よせ内見するに、笹村千左衛門と申す書付、病

氣そもくより此方毎日く三度づゝの見舞、是はいかなる御人ぞと尋ねたまへども誰が存知たる者もなし。御家に筋目もあつて御入候やうに、いづれも存候は、御氣分の御事しみくくと榜子を尋ね、よきと申せば喜び、あしきと語れば忽ちに眼色かはり、常の人とは各別のなげき相見え申すのよし御物語り申せば、いまだ近付にさへならぬ先に頼母しき御方と計云やみて、千左衛門屋敷ははるかなる所尋ね、此程の御禮に御門前迄と申入ればかけ出で、是は有難き仕合、かゝる野末までの御初足、またもや袖風の尾花もさわがしき此夕、只歸宅と申せば、世の稻妻の暮またず消る身のかさねては待たれじ、すこし御咄申事心にやる瀬もなし、先それへと書院に通じ、二人より外には松ちかき端居して、我等が胸の中あくる所は爰なり、此程の御心づかひ思ひ合すに、近比卒爾ながら數ならねども我に若も御執心あらば、けふより身をまかせん爲に忍びて是にと語る。千左衛門赤面の泪折ふしの紅葉に時雨争そひ、後は下心のあらはれ、稟角言葉では申しがたし、正八幡の内殿に所存を込置の由申せば、すぐに參詣して神主右京に仔細を聞けば、御病のためとて日參願狀の箱納め置れけると申す。それをと開き見るに貞宗の守脇指に、一通筆を盡し玉之助身の上を禱る、さては不定の命此願力にて免れける、いよく見捨てたくと念友するに、はやもれ聞えて、御仕置の役人改めて兩方一度に閉門ははじめより死身に定めければ更に敷かず、かゝる時の便とて狀文の通ひも、片陰に忍び道を付て年月あまりかくありしが、今は世に飽果て申せば三月九日に切腹仰せ付られ候はゞ有難かるべしとの、訴狀さしあげ、其日を待けるに、横目まゐつて御意申渡して何の事もなく元服を仰せ付られ、千左衛門も別の事なく御ゆるされける。此上はと互に申合せて、二十五歳になる迄は向後音信不通とかため、只見合せても詞も懸けず、此御恩を忘れず御奉公を勤めけるとなり。

玉章は鱧に通はす

年々花は替はらず、歳々人同じ姿にあらざといへり。殊更若道の盛り、脇塞げば雨ふり、角入るれば風立ち、元服すれば落花よりは強顔、是を思ふ時は情といふ事夢に譬へて見る間もなし。爰に八雲立國の守に仕へし増田氏の二男甚之助とて美少自然の形、文武の諸藝十一歳の春はすぐれて世の人心を懸ざるはなし、日本國中に又あらざと大社に神の集つて是沙汰なり。この念縁を同じ家中に結び給へり。森脇權九郎今年廿八歳にして何事をも人に越え、頼母敷侍なり、甚之助十三の秋より憧れ、草履取の傳五郎に親しみ、玉章書て送るに世間を認めば、松江の鱧の口に入て供部屋迄遣はしけるに、其明る朝御髪をからずき仕る、御懐へ落し懸しに、鏡に常住の御良映れば御機嫌今申さではと、權九郎思ひ死の有様憐れに不便に言葉に數を盡して申せば、其文は開けて見もやらす、硯せはしく筆を

取り、兼ての御風情いま傳五郎が申すと思ひ合せて最愛さ嬉しきかぎりなし、けうより世の訛を構はず御因を申すべしと、右の状も其儘封じ込め、纏の内も懸路はやるせなきに此事しらせてよと仰せけるは、婀娜御心人と水纏捨て立出で、權九郎許に行きてあらましを語れば、かたじけないとは大かたなる事ぞと、道ぬ先より泪に袂を浸し、十四歳の夏の夜人に待るゝ鳥も情懸け初て、餘所に洩聞えてはと潜に戯れ、十五十六の秋迄は月より外には人もしらざりしに、戀は一河の流、末の奉公人に半澤伊兵衛と申者、甚之介を思ひ初め、若黨新左衛門を無理頼みに數通の文、取上げざれば伊兵衛今はやめがたく、我物の數ならねば菟角の御報もなし、先契の方御しらせ有べし、さもなくば見合次第に御恨み申すべしと一命捨て申せば、今迄は包めども心得の爲にもと思ひ權九郎に語れば、下々なればと侮る事なかれ、世には命といふ物ありてこそ互に樂みもあれ、其心のやすまる返事分別して見給へと申せば、碁之介忽ちに血眼となつて、深く契約の上はたとへば殿様の御意にも従ひ申すべきや、思ひ極め此男を討て捨てんと思ひしが、先伊兵衛を武運にまかせ、首尾能しまひかへる太刀にて安穩には置まじき物をと、常の機嫌に宿にかへり、内々の御恨今宵浮世の闇を晴させ申すべし、天神の松原に出合たまへと果し状を認め、新左衛門に申付早速伊兵衛方へ遣はし、三月廿六日の晝に下り、今日お限りの入途の鐘、無常は兼ての事なれば、更夢に驚かず、いつよりは心よく二親にも姿を見請せ

親類は残らず親みの方迄も筆を残し、是が恨の書納と權九郎方への一通、胸にある事ひとつ／＼ことわりせめてぞ聞えける。實に初めより身は我身ならずと申せし事は、御方とかくある中を人知らは見ゆるまじと不斷存する折ふし、かゝる仕合難義とは思はず、今晚山寺にて討果すなり、年月の御よしみ思召さば、一所に御身を給給ひても惜かるまじき御事ぞかし、相馴て以來の恨今申さでは末の世の障と思へば有増書残す、

一 貴様御屋敷迄は透なる所を通ひ申候は、三年の中に三百二十七度、一夜も難に遭ざる事なし、横目夜廻りを忍び、妻を替へて小者の風情に丸袖を醫し、杖拂燈を提て行時もあり、又は法師の様にもなり、人こそ知らねかく迄心を端し、過し年の霜月廿日の夜思ひ煩ひしに、宥は母人枕に離れざりしに命は朝を待たず、逢はで果なばと悲しく、更行月を恨み、亂姿にて笹戸の陰に忍びしに我足音としらせられ、そのまゝ影なく御物語もやみぬ、去神は心強し、此時のお客うけたまはりたし、

一 此春花軍の狩野の采女が書きし扇の裏に、恨み詫び干さぬ袖だにの歌をしどけなく筆染しに、戀は此風に夏を凌がんと仰せて喜ばしたまふ間もなく、此筆者代待と落書をあそばし、下人吉介に取させらるゝのみ、又餌差十兵衛方より御求めあそばされし雲雀、御秘藏ながら所望せしに賜はら

ず、北村庄八郎へ贈られし事、御家中一番の御若衆様なれば今に浦山し、

一 當四月十一日に奥小姓残らず馬上仰せ付けられしに、節原太郎左衛門拙者の袴を扣へ後に土付申候と掃ひたまはりしに、御方は跡に立給ひながら御教もなきのみ、小澤九郎次郎殿と目ませして御笑ひ、年比の情にはさは有まじ、

一 五月十八日の夜半過遠小笠原半彌殿にて咄し申候を御腹立、其晩も御断り申通り、謠稽古に小垣孫三郎殿松原友彌殿同道にて参り、此外に相客はなし、半彌殿は未だ御若年の事、孫三郎殿は私と同年、友彌御存知の通りのもの、毎夜の参會も是は苦しかる間敷を今に御縁察あればし、折ふしの御當言心懸りにて、日本の諸神口惜さ此時に到りても忘れ難し、

一 念契の此かたあかぬ曙の別れに、我屋敷近く迄御送りあそばしてもの事を、村瀬惣太夫殿門前より御歸り、采女殿前の橋まで、年重ねし内に二度ならでは御身送りもあらず、おぼしめし入の御方様ならば虎狼の野邊迄もと思召さるべし、彼是御恨みあれとも、是程悪からぬ事は大方ならぬ因果かと思ひ、泪より外はなし、只今迄のよしみに一遍の御回向に預るべし、夢と思へば現に世のはかなき事を身に比へての可笑さ。

○花盛思はぬ風に朝良の夕影またぬ露の落かた

と斗り書付け、申残したき事のみなれども、今日をかぎりの暮も近付ば名残も是まで寛文七年三月廿六日と留て、森脇權九郎方へ今宵四ツの鐘の鳴時分持て参れと傳五郎に申付けて、入相の太鼓うち出すと駆出る、甚之介装束は浮世の着納としてはなやかに、肌には白き袷に、上は淺黄紫の腰巻りに五色糸縷を縫はせ、銀杏の丸の定紋しほらし。大振袖の裏にこき入し紅葉ほのかに、鼠色の八重帯、肥前の忠吉二尺三寸同作壹尺八寸の差添、小刀抜捨て目釘をあらため、城下より壹里離れし天神の松原に行きて、大木の楠を後に葛かづらに形をかくせし岩に腰を懸け相待つ暮に、はや入良も見えぬ時大息つきて權九郎かけ付、甚之介かと言葉をかくる。腰抜に近付は持たぬといふ。森脇泪を流し、此節申分には及ばず、後の世の深り川にて心懸を語らむ、と申せば無用の助太刀頼まじと論ずる内に、半澤伊兵衛家中荒者を十六人かたらひ来る。四人一度に抜合はせ、命の神所を爰に極めて入亂れ切立つ、甚之介が手に懸けて二人、權九郎が太刀下に四人研ぎ、十六人の内即座に六人手負七人、残る者行方しらず、身方にも小者吉助當座に相果て、權九郎も目の上の淺手、又甚之介も右の肩先に二寸許のかすり、首尾残る所もなく、此近在に永遠寺と申すあり、忍びて門に入り住僧を頼み、兩人切腹の跡を御出家の御役にと申せば押留め、是程迄にあそばし、逆もの事に喧嘩の次第を老中大横目衆まで申上げて諸人の中で腹きり給ひ、世に名を残し申されよと詞を盡し、それより番所に急ぎ右の段々申せば、御食



露の後目付衆を遣はされ、切腹相待つべしとの仰せ渡され、其夜に城本へ引取り、諸親類に御預けあそばし、疵養生仕れのよし、相手は逃げ申者見合に打捨と仰せ付られ、手負も國中を船留にして穿鑿あつて撃れける。その後母之介事御換相背き申し、千萬不届に思召しつれども、親兵衛忠孝の者、甚之介義も兼て御奉公よく勤め、殊更此度の様子若年には神妙なるはたらき、權九郎儀も甚之介を御免あそばすに付仔細かく御免難有き仰せ渡され、右の如く番組に入て當月十五日より罷出候様にと重ねての御意なり。かの永運寺に行きて其時のはたらきを見るに、刀に切込七十三所、鞘にも切着十八所、着類は只くれなるに染なし、左の袖下も切落され、かゝる激しき場にして其身は深手もおはず、又例もなき若武、いづれも袂を泪になさぬはなし。此寺にて伊兵衛一身の死人を念ごろに吊ひしは、黠しほらしきころざしとぞ沙汰せり、かやうの美少末の世語にも、せめてはこの御遺書なりとも黒焼にして、心の定まらぬ當代の若衆どもに吞せし、若道の名香と記して何者か中門に張おく

○森脇に十双倍の御心中伽羅にも増田甚之介殿
 と書付て諸人の言の葉にかゝりぬ、よき事を見習ひ國中の武士たる人の子はさもあるべし、種なやむ町人の忤子、龍骨車にたよる里童子、鹽焼濱の黒太郎迄も形こそ其所作に賤しけれ、この道に一命をしまず、念友の長き前髪は縁夫もたぬ女のごとく思はれて時の姿とて戀は關若道は晝になりぬ。

墨繪につらき劍菱の紋

袂箱にたゞみ船を仕込とり組は、三人乗て大河を越に例あり、自然の時は用にも立ぬべし。その外浮
杵棒火矢を申立に御合力分貳百石下しおかる、長の浪人なれば先相勤め、兼ての望は時節と待年もは
や二十七歳になりぬ。さしつぎの妹は丹波の笹山にありしが、夫に離れて後世を捨て、河内の國道明
寺に十九の夏衣を墨に染しこのかた、身の取り置きもなかりしに、過つる五月比音信の文書かき
て、名物の花粉などを送る心ざしは萬里に届きて、今麗島の水に浮て折節の暑さを凌ぎ、汗は泪に替
り、むかしを想ふ振袖の面影、地紅の帷子を好て着た物をとなげきぬ。其次の妹は十四歳になりて、
いまだ定まる縁もなく、老母と一所に引越して知らぬ國里の住居も、武士の身ほど定めがたきはなし。
若年にて父に後れしに鳥村大右衛門といはるゝも、是皆母人のはたらき仇にも存せず、朝の嵐をいた
はり、夕の御寢間も末の手には懸ず、妹ども是を見習ひ、眞綿引さして御枕など参らせ、丸絆の帯、珠
敷袋をも置所あらため孝を盡せり。人の親はかく有べき事なり。或時大右衛門深澤といふ所に暮を急
ぎて笠見に行に、町はづれなる野邊に一村の薄花菖蒲の茂り、道ばたよりは見渡し近く、小細水の湧
出る埋れ井有あり、其側に大師の作といひ傳へたる石地藏まじくして、人心ざしの日は此所に参詣で

水を手向ぬ。爰通り合す折ふし侍の小者らしき男、新らしき文笥ひとつ懐より取出し、彼石佛の前
に置き、前後を見合覺へて忘れゆく風情、いかさま様子もあるべしと其男を追懸け、あの箱は何とて
態と捨置ぞと尋ねければ、恐れて返事もせず遁て行く。是曲者と捉へて里遠き野寺に引込、色々責て
も仔細をいはず、重ねてのあやまりはかへり見ず、早繩を懸けて、迷惑がる住持に預けて、右の文箱
を取りに歸るに、はや里人不思議の詮議をして其まゝ奉行所にあがりぬ。其夜諸役人集まりて上書は
なくとも開けと是を見るに、御内談申せし毒薬進上申候、早々彼者どもに御あたへ有べし、此狀御内
見あそばして後火中と書留て、奥に丸の中に劍菱の紋どころあり、外に一袋念を入れて見えける。列座
驚き吟味するに、春田丹之介といふ人の定紋なり、竊に呼寄せ様子を聞ども、聊か身に覺えのなき
大事を引請け先門を開ける。大右衛門聞付、彼男を夜更て丹之介門外の駒よせに搦付け、此度の文箱
の仔細は此者存候と張紙してかへる。既に夜明て見るに此男舌喰切空うなれども、其形は隠なく岸岡
龍右衛門下人なり、扱はと御詮ある時、はや龍右衛門屋敷を立退き行方しらず。其後丹之介をめして
思ひ當りたる事も有かと御尋あそばしけるに、何の事も存じ寄ざるよしを申あぐる。此分にしては不
埒におぼしめせども、龍右衛門國遠身に謬りのあればなり、重ねて見合次第に申付べし、丹之介は別
儀なく御奉公を相勤めける。其時過てうらなく語る友の尋ねけるに隠さず申すは、兼て龍右衛門我に

熱心の書通千度なれども、かゝる淺ましき心底見極め、取上げざる遺恨によしなき事をたくみぬ、れども、戀よりの悪事なれば此の上ながら御前世間を裏むと唱せば、婀娜心入感じて自然と沙汰して若道の随一と申すも愚なり。此人七歳の時より形定まつて嫵媚に一笑百媚の風情、見し人男子とは思はず、今十五歳迄念人のなき事はすぐれたる美少是をゆるせり、離家の美花は人も折らずと李太白もつくれり。丹之介此度の難義をのがれし事龍右衛門下人あらはれしゆゑなり、我をかなしみ此者門前につれて書付おかれし御方、色々思案めぐらすれども知れざる事をなげき、諸神を祈る事大かたならず、其秋冬心懸りに暮て明の春、山々の雪の松を見せて日影に水嵩まさりて、常なき瀧を谷合に見て、細川の末に扇網手毎に小鮎汲むも慰みとて行くに、片里近き野邊に色よき娘は母の親の先に立て婢女まじりに、茅華士筆鶏腹橋など都めきたる様子者、しばしは見るに其人も此方に目に際なくありしが、何か騒きて小硯に筆を灑き懷紙に書よし、草の葉末に結び捨て岩の蔭道の奥ふかく入ぬ。其筆の跡ゆかしく立寄て讀に、此野も人のしげく、是より藤見寺の南の山原に御入候、大系もん様と書しは跡より來る人にしらすべき偽ぞかしと、心を付て見る程女筆ながら日外の手を生寫なれば、不思議と詠むる處へ大右衛門來つて、此書付を取て行に言葉懸け、大右衛門殿と申すは御自分にてましますか、拙者は春田丹之介と申者、同じ家中に有ながら、いまだ御近付にもならず、御尋ね申度義は、過し年

の五月は龍右衛門小者を御揃めくだされしは御かた様かと申せば、いかにも不肖、よき折ふし出合申てと委細に語れば、御心底の程さりとばかりはかたじけなし、存せぬ事とて年月打過ぎ、礎石朽木と思召されむも口惜と泪を流す、御しらせ申さぬ我殊には新參者の義なれば遠慮を申し、さては大事の御心を盡させけると、ともに泪深く互に思ひ初め、何の契約もなくおのづと念通の親み、忍び／＼に丹之介屋形の裏なる大河を越て通ひぬ。いつとても不首尾はなかりしに、度重なりである夜隣屋敷の缺作の茶屋に宵より中將基をさして有りしが、酒も數過て跡は謙になりて聲さへ霜がれて、神無月中の四日の空照れば曇りて定めなきは人の身ぞかし、大右衛門忍び妻岸のむら蘆の陰に着物ぬぎ捨て、脇差一腰となつて思ひ川を越す、淺い心にあらねば瀬の早き時には情の浪肩を越し、魂沈む事幾度か、漸石垣に取つき、約束の細引をたよりに是ぞ戀の道しるべにして、切戸に立寄ば手懸り程明け懸け、燈火もほのかに物靜なるは、いつに替りてと少し聞合す時、内より丹之介障子けはしく引あげ、夢にしても今のは悲しやと獨言申て泪そゞろなるに、大右衛門と申せば嬉しやと濡身そのまゝ肌着の下に巻込られ、是に憂事を忘れ、最前の御悔は何と尋ねければ、今宵は待も一入に久しく九つの時計を聞寢入にして間もなく、御身渡らせらるゝ川中に流木御足本に横たへ、此難義にて惜き御命の捨ると、はかなき夢はいつの世に誰見初めてうたてし。海渡る妻鹿のむかしの事までも思ひ出さるゝと又泪に沈む。



然れば久しう逢はぬ時、せめては夢に見る事は程樂みはなしと機嫌なほして、かぎりにあらねば起別れ、また丸裸も戀なればこそ、川浪に面影の見ゆる程は跡を慕ひしが遙になりぬ。隣者共是を見付、大鳥なるぞと弓稽古の若侍おとらじと遠矢を放つ、大右衛門横腹を通されながら我宿にかへり、わざと亂氣の書置して自害残る所もなし。明の日國中に沙汰せり。丹之介かけ付け様子を聞に、母妹の愁歎目も當てられず、命有るゆゑにうき事も見しと、死人に取つき、刀に手を懸けし事、二三度もせしが心をしづめ、其の矢はと取あげ見れば藤井武左衛門としるせり。さては此敵討たではと愁に沈み立歸る。何の事もなく亡骸を頼みし松林寺におくりて土中にして、憐や昨日はむかしと過ぎ行き、それより丹之介毎日墓に参詣て追付御跡より参るべしと、四十九日に當る日を考へ、武左衛門を是非にさそへど隙入よし力なく、五十二日目に同道して松林寺に入て、山河を見めぐりて、大右衛門塚の前にもなれば兩脇に新しき卒都婆二本立ける、一方は藤井武左衛門としるし、一枚は春田丹之介とかき置く、是は合點の参らぬ所と申す、御不思議尤もとはじめを語り、近頃おぼしめしの外の御仕合ながら、討果たしてたまはれと言葉を懸てぬき合ひ、兩人ともに夢まぼろしとなりぬ。住持驚き御斷申て兪議の後三つ塚につき込ける、丹之介が思ひ入又あるべき事にも非ず。

男色大鑑卷之一終

男色大鑑

本朝若風俗 第二卷

目録

一

形見は貳尺三寸

中井勝彌母親書置初て見る事

片岡源助非人の時執心かなへる事

筑後國柳川敵討の事

二

傘持てぬる身

長坂小倫孝行の世わたりの事

櫻茶屋化物うちとむる事

忍び男命にかへる事

男色大鑑 卷二

三

夢路の月代

新の能は晝の錦の事
若衆忍ぶは菊の紋挑燈の事
是非念者のかはりに立る事

四

東の伽羅様

春の野は目違ひの事
申子の種梢より降事
魂は袖に入るしるしの事

五

雪中の郭公

眠坊主も女は嫌ふ事
命を無分別にくるゝ事
身はひとつ若衆は二人の事

形見は貳尺三寸

世に遠州行燈程の事も又出来まじき物ぞかし、又次郎といへる男觀世紙讀をはじめて今重寶となれり。捨り行反古さらへる中に母の手して、勝彌十三歳になる時、此封じ目を切て之を見るべしと上書あり。泪に包み紙をしたし内見するに、父支藩を討ちし竹下新五右衛門吉村安齋と名を替へ、筑後の國柳川の邊に身をかくし、表向は見薬師と見せ懸け、一家中軍學の指南して渡世すと委細に聞出し、女的身ながら本望を遂ぬべしと、思ひ極めし甲斐もなく相果る時の無念さ、哀れ成人の後此所存早くやめさせ、草葉の陰の父母に喜ばされよと書つゞけて、それよりすゑは最後の筆と見えてさだかに讀がたし。我今年十八才になれり、母遺言とは年月むなしう六年過て、今見る事知らねば力及ばず、某御家に住む事、十四の四月十七日、武州上野黒門前に母方の姨を頼みてありしに、殿様御駕籠の窓より、あれけと仰せらるゝ御聲して、御側近き侍をひそかに遣はされ、筋目も有増に御尋あそばされ、其日より召替の御馬にてお上屋敷に入て御前を去らず、朝の雲に飛鳥落てたとへば鳥を鷺といふにも我に諍ふ人なく、夕べには月を妬み、氣にいらぬ人には物をもいはず、是皆お影あだにも存せず、或時は寢姿のしどけなきに外れし枕をあてがはせられ、胸のあきたる所を御下着の白小袖にて塞がせ



られ、自然の嵐もがなとおぼしめさるゝ御心入、現のやうに覺えて冥加おそろしく、夢さめては只二人より外には聞人もなしとて、御家の大事若殿様にも仰せわたされぬ御事共迄仰せきけられ、互にかはらじ松の葉の針にて、我脇良にありとは人の見付ぬ程の瘵子も、御氣にかゝるとて手づからに抜かせられ、彼是有がたき御事計にて晝夜を過しぬ。せめて此御恩に大殿今にも事あらば、天下の御制禁は存知ながら、いさぎよく殉死の心懸、無紋の上下小脇指、書置箱に生ながら魂を入置きしに、世はしれぬ物ぞかし。我姿の花は今を盛とすこしは自慢心の口惜、去月はじめかつたより千川森之丞に御心移り替はりて、何事も偽の時雨ふる初の三日には極めて自害、さはる事ありて是非七日にはと相延し内に此一通を見出し、親の讐を知る事武運はつきず、よしなき殿様に野心を含み生害に及ば、後悔後の世迄の障りともならむ、今思へば身の仕合多し。我森之丞がごとく御寵愛の時、敵討ちたき御訴訟申上ぐるとも輒く御暇は給はるまじ、首尾此時と所存書付をもつて、ある日御機謙を見合せ差上ぐれば、心底至極におぼしめされて御暇乞の御盃給はりし上に、目出度安齋討て歸參すべし、五百石の御黒印頂戴し、御納戸より路金迄賜はりて、寛永九年十月十二日に龍の口より、兼て心ざし深き下人五人召連れ、三田八幡に參詣して思ひ立日を重ね、同十九日に京都につきて三條鯉山の町にするべ者あり、馬より下もあへず編笠深く忍び、大佛の邊に小島山城とて着込の細工人の上手ありける、

望みの帷子ありて行に、耳塚の草枕今朝置霜の後をも厭はず、竹の小笠に風よけて、見た所がかくはなるまじき大男の口をたれて、は一錢おくりやれ申せといふ、良見合せば首を縮め、三輪組て袖をかざす、是疑はれてなほ見返れば古傍輩の片岡源介なり、此有様には何としてかは、世にあさましき風情と様子をきけば先泪ぐみて、我望みあつて俄に御暇を申請し事、越後村上に立越、進退大方濟ける所に、頼にせし片岡外記頼死仕つり、是さへ嘆くに往年の水無月の末より眼を煩ひ、善峯に来て養生すれども抄どらず、下人は渡り者として見限り、人の因果は知れぬものなり、死なれぬ命ひとつながらへ何にかはなるべし、下和が玉に泣き、寢威が角を扣きしと思はれ、身の捨るよりも残る名の惜まれ、一度生國南部に下り、思ふ仔細も有り、まだ廿六にこそ罷なれ、はや御面影も見付る程に明かなり。さて御自分此度の御上京心元なしと申す内に、餅屋煙管屋立出づれば伏見に暮いそぐ旅人馬かた立留まり、程なく見る人山のごとし、とかくは夜に入て語るべし、それ迄は此所に御入あれと泪に別れて後入日待兼ね、勝彌人をも伴ず尋行くに、所をかへて在所をしらず、是は悲しく、川原面の非人に言葉を懸け、若し源介殿かと尋ねければ、いや左様の人はしらず、是は相輪の三吉、目振間の虎藏、貫穴の權といふ者じやと申、管假葺の片庇の内に松火あかして聲をひそめ、引四九高日の祝と物なげる音何事かはしらず、岸づたへ行けば枯葉の柳陰に頭は霜を頂き、もまた極樂へ参りても惜かる



まじき老女の聲して、明日のいとなみ絶れば、誓願寺の門前に見つけし、捨子の肌着を剣に夜半過てゆかんと、世のうき事のみ、川音の静まつて人も寝時を過て、篝火に流れ木を拾ひ集め、石居て土をかけ、茶酒盛をはじめ、二度代を取り會稽の耻をとうたひながら天目をすゞぎ、口拍子の利きて笙の舌には鶺鴒野の産に限りてよし、いづれ名物とて淺澤八橋の杜若は花房むらさき優れて、むかし男の唐衣今の紙衣と大笑ひする人を見れば源介なり。勝彌を見てもさらに耻る氣色はなく、奇特のお尋に預ると申す。勝彌泪をかくし、我此節西國に下る事、父玄蕃敵の住家を聞出し、筑後路までおもひ立ち、身は定がたし、若歸り討に遭ひなば又ある事も絶なむ、互に江戸詰の時それがしに御執心のよし、忝なき數通にあづかり候へ共大殿御座をも汚す身なれば、思ひながら其時過て今又逢ひましたの嬉さ、兼ては是も心懸の一つなり、今宵一夜は残らず語りましてと膝枕をすれば、此時の嬉しさ、衆道の事は外になりて長屋住ひの東の事をおもひ出し、心の塵を拂ひ、十府の背鷹七ふには君の御寝姿を見て夢も結ばず、都の富士に横雲の立白み黒谷の鎧も告げて、高瀬掉す人良も見えてあかね別れとなる時、ちぎれたる蒲簀より仕込杖の刀取出し、是大原の寶盛貳尺三寸、此身に成ても一腰は放さぬ心入頼もし。そも、此刀は先祖信玄公に召仕はれ、信州川中島の一戦に高名いたせし事申傳へて有、是にて本意を遂げたまへと勝彌に渡せば、辭退に及ばすたまはりて、追付安齋うつて對面仕る

べし、それ迄の形見にとて我が指替を残り置。立さまに左の袂から一包金子百兩ありしを、枕近き覺
官目にさゝやきて、各々頼むなり、是を道の費用にして源介殿を國元へ還してたまはれと申置て、十
月廿日の晝舟難波の暮方につきて、同廿一日に早舟をかり切、同廿八日に柳川にあがりてひそかに里
のかり宿、おもひの商人に身を替へ、近國をさがし、其年も暮て春の野は杉菜菔の咲し頃、やう
やう在宅たしかに見届け、三月廿八日の夜討に定め、主従六人心を合せ、かぎりの酒宴過て暮方より
のき道をかながへ、南に谷川を構へ、土橋ひとつの通ひ浪岩を砕きて白龍のごとし、後は高山北の沼
人倫の路絶て難所也、八町こなたの辻堂に忍びぬ。かゝる時源介爰に來つて彼土橋の中程を貳間あま
り切落し、東の岸に繋ぎ捨たる小舟に櫓權を仕懸、勝彌が櫓を待合はすうちに、夜に入り里に歸る
人思ひよらず踏はずして高浪に沈みぬ。又は牛引ながら落て聲をもたてず、哀を見る事四五度なれど
も身をちぢめて隠れぬ。既に寅の上刻と思ふ時忍びがへしを切入り、東西より笹葺の軒に火を懸け中
井支養が敵うち、同名勝彌なるぞ、新五右衛門出合と寢間口まで仕込、聲にも覺悟させてうち取殘所
なし。首入の器兼て拵へ、手に入たる事なり、表門を開き貳町計も過る時一村松明天を光らせ、逃さ
じと聲くぐりに追かくる。是までと心中を極むる時、くらがりより勝彌のき道此方へといふ。聲聞違へて
誰人といふ。源介忘れたか、先是へと船に取のせ川筋にさし出す。追手の者切おとしの難儀數百人、

丹式なく跡に還て評議とりくくなり。船磯傳へにその夜三里半のがれて脇の濱といふ所に曙の前につ
きぬ、姿を見合せ、今ぞ嬉しき涙をおさへ、まことに先夜は一大事の時節、此所に御下向あやふき命
を御たすけ、勝彌が仕合と申。源介打笑つて、愚なる事を申人かな、三條川原にて別れし朝より夕日
を慕ひ、影身に添ひて今日迄旅宿の軒下に屈み、晝は世間を見つくるひ、夜は外の用心をかため、或
時その方久留米の城下迄尋ねまけらせ、濡せぬ山の麓ふる雪、袖を拂ひかねたまひて小者も同じ枕に
前後を忘じ、引入息の頼み少なき時人參口に入て岩もる雫を手にしてはこび、肌を暖め正氣付て、いか
なる御方様ぞ御看病難有きと申されし折は、名乗ふかと思ひしかども、知れぬを幸ひに道行人と申捨
て、村竹の陰にかくれてしばし様子を見るに、下人に力を付、今のは正しく氏神の化身なるべしと其
所を立さり、然も十二月九日の夜の道我先に立て、里ばなれなるすゝしを外して、所々に火を焼て道
しるべせし事思ひたまふかと、過にし十月より今月今までの事どもを語り、京都の別れに残し置た
まひし物をもそのまゝ封じ目を切らず此度返しぬ。此ことはりに責められ船中感涙肝に銘じ、又の世
のためしにもと自然と聲を揃へぬ。とても御事に見送りてたまはれと、今ぞ勇みて歸國の袖、卯の花
の雪見る時富士足柄の關越て、十一日に東武につきて右段々申あぐれば、兩殿御喜びのあまりに源介
を召出だされ、三百石御加増 役なしに仰せ付られ、其上勝彌をたまはり名を源七とあらため、眞實

の兄弟分となりぬ。是前代未聞、少人の鑑、かうなうては。

傘持てもぬるゝ身

浦の初島浪あらく、武庫の山風はげしく夕立雲の立重なり、又知盛も出づべき氣色、程なく降て來て道行人思はぬ難儀となりぬ。爰に明石より尼崎への使者堀越左近といふ人、生田の小野の覆木の陰に雨舎してありしに、かゝる時十二三なる美少人、まだ夏ながら紅葉傘を持て差さで來にけり。左近を見懸、唐笠の御用に立べしと下人にわたしぬ。御志近比かたじけなし、されどもさしあつて不思議あり、それ持ながら其身雨にぬれ給ふはといふに少人泪を流す。なほ仔細有べし語りたまへと聞に、某は長坂主膳が伴子小倫と申者なり、父浪人して甲州を引越し、懸前に立のきしに船中にて病死、是非なく此浦里に煙となし、所の人の情有に甲斐なき濱庇をしつらひ、窓の奥竹世を渡る業とて傘の細工、見なれて母人の手して男のすなる事を、思へば我身ぬるればとて天のとがめも恐ろしくぞんじて差さずといふ。されば賣扇の祖母子は手に日をかざし、箕賣笠でひるのたぐひなるべしと此心入を感じ、母の住る里まで人付て見届け明石に歸り、すぐに登城して御返狀をさしあげ、御機嫌の次手に小倫あらましを御物語申あぐれば、それ伴來れとの仰せ、左近喜悅の向ひに小倫母子共に轎車して來

り、御前に偲ひけるに、わざとならぬ良ばせ遠山に見初る月のごとし、髪は聲なき宿鳥にひとしく、芙蓉の臉じり、鶯舌の聲音、梅すなほなる心ざし次第にあらはれ、出頭日に増し夜の友となりぬ。御次に寢ずの番聞耳立つるは、御職あらけなくなりて、我に命を捨ると仰せらるれども更にかたじけなきとは申さず、御威勢にしたがふ事衆道の誠にはあらず、やつがれも恐らくは心を疎き、誰人にも執心を懸なば身に替て念比して、浮世の思出に念者を持てかわゆかりて見たしと申せば、少し御せきあそばし、座興に取なしたまへど、今申あげし詞日本の神ぞ偽りなしといふ。殿も呆れさせたまひ、此強き心根憎からず思召されて、ある夕暮風待亭に前髪數多召寄せられ、名所酒數重なり御遊興の折から、俄に星の林も影くらく、人丸の社の松噪きて風腫さく雲引はゆる中に、一眼の入道軒端間近く飛來たり、左の手を二丈餘も差延べて一座の鼻を摘む事興覺て、先駈の前後を守護し、常の居間に取急ぎて入らせたまふ、跡地響して山も崩るゝごとし。夜半過て御築山の西なる櫻茶屋の楯戸を破りて、數年か古りし狸の首切放されて今に牙を鳴し、凄じき有様を言上申せば、扱は今宵の震動其わざなるべし、誰か仕留めけるぞと御家中僉議あれども、此手柄申出る人もなくあたら名を埋みぬ。それより七日過ぎての夜丑の刻に、大書院の箱棟に少女の聲して、科なき親を殺せし小倫が身の上追付危かるべしと、三度罵つて失せぬ。さてこそ小倫がはたらきと感じ入ざるはなし。其後御譜請がたの奉行狸

のあらしたる板戸を修理仕るべしと申あぐれば、むかし魏の文侯興に乗じて、我言葉の末何にても遠へる事なかれとうたわりしに、師經と云る者琴にて突仆し驕傲をしづめぬ。交候まことある臣と、琴に崩れたる南壁を修さずおかれけるとなり。今又小倫が武勇を諸人に見せしめんがためなり、其まゝ置べしとかたじけなき御褒美あつて御ふびん彌増になりぬ。時に母衣大將神尾刑部が二男に惣八郎と申せし者、つね々小倫心底を見すまし、文にて嘆き互に心を通はせ、時節を待年も暮て十三日は煤拂ひ、御吉例の衣配の夜、着おろし母の許へ遣はしける葛籠に、小者が才覚にて惣八郎を入て御次の間まで忍ばせ、宵の程より腹痛むのよしにして自由に戸の開閉、車の音もはじめの程はとがめたまひしが後は御軒のみ、戀は今ぞと惣八にま見え、先何がなしにかるたむすびの帯をもとかず、此上に外の事なき情懸けたまひてなほ末々の詞をかため、二世までといふ聲御夢を驚かせける。御枕に近き素鎧の鞘はづし、正しく人音通さじと駈出させたまふ時、小りん御袂に廻り、是は勿體なし、さらに人影は見えもわたらず、我身の苦しさに心の鬼來て囓殺せと申もよしなや、よし何事も御ゆるしあれと騒がず申上るうちに、惣八柏の梢矢切を飛越面影を見付たまひて、色々御穿鑿あそばしけるにいさゝか身に覚えのなきよし、さては過にし狸のなす業かと御心やすまりしに、折ふし御前に金井新平とてかくし横目さし出、只今のあし音、殊にはさばき髪に鉢巻まで見届け候、忍び男には疑ひなしと申、又吟味

の品かはつて是非に申せとあれば、小倫に命をくれしもの、たとへば身を摧かるればとて是を申すべきや、此義兼て御耳に立置しにと更に歎く氣色もなし。それより三日過て極月十五日の朝、兵法稽古座敷に召出され、諸家中の見せしめに御長刀にて御自身、小倫最期と御言葉をかけさせたまへば莞爾と笑ひて、年比の御よしみて御手にかゝる事此上何か世に思ひ殘さじと、立なほる所を左の手を打落したまひて、今の思ひはと仰せける。右の手をさしのべ、是にて念者をさすりければ御憎深かるべしといふ。飛かゝりて切落したまへばくるりと立廻りて、此後つき、また世にも出来まじき若衆。人々見納にといふ聲も次第に弱るを、細首落したまひてそのまゝ御涙に袖は目前の海となつて、座中浪の聲しばし立やむなし。死骸は妙福寺に送りたまへり。哀れ露には消えつ、朝の霜にはかなき朝貝の池といふも此所なり。むかし都のいたづら人須磨に流され、それに懲りず、入道の娘を戀ひて、爰に通ひたまひし時讀たまへり。

秋風に浪や越らん夜もすがら明石の岡の月の朝貝

此歌家道にて詠みたまはゞ人もしるべきに、なんぞや女房事なれば沙汰なしになりぬ。されば小倫を殺してこの念者いまに出ぬはよもや侍にてはあるまじ、野等犬の生替りぞかすと人のそしり草となりぬ。明の春十五日の夜、左義長の場にて惣八新平が諸手を打落し、留めまでさして首尾能立のき、小



・倫が母の行方をも深くかくし、其身は朝良寺に匿込み、塚の前に心底つまびらかに高札に書し、今年二十一期として夢また夢眠れるごとく腹掻切てりせぬ。明れば十六日の朝此有様を見るに、ありありと一菱の内に三引を切ぬ、是こそ小りんが定紋なり。とても戀に染まる身ならばかくこそあるべけれど、七日がうちは國中の山を分けて手向橋かの池を埋みけるとなり。

夢路の月代

南都南大門の暮急ぎて鞍懸より詠めけるに、今春太夫が舞に清五郎が鞍、又右衛門が片撥、いづれか天下藝是は見ずして、興福寺西大寺の棧敷に見若衆の面影に氣をうつし、入日に名残を惜み、あたら夜の錦と獨言、誰聞ともしらすなげく男を見ればまだ三十にはなるまじ、あたまつき後下がり髪先短かく、上下黒き龍門に葉菊の五所紋、糸打の平帯、吉屋粧の大小いかさま衆道のわけらしき風俗なり、其名隠もなき丸尾勘右衛門といふ兵法つかひ、古今類なき少人好、さまざま文書で購すに手なし、夕暮をこがれ、明の日は御社の能始まつて、大藏求馬花月になつての姿、其美しさ、戀といふくせもの諸人心を懸ざるはなし。次の日は空曇りて傘をさそなら春日山さびしく、晝の過より蠅頭の釣針もたせて、岩井川の汀に柳地など手本障なくかく時、郡山の家中に田村三之丞といへる情少人、折ふし此水

上に來て唾を吐けば、川下の水手に掛び、雫もよらさず咽筒を鳴すを見て近う立寄、それにてお手水御遣ひ候事おもひもよらず、無禮なる物をはき候、全く御ゆるし候へと申せば、只今の御唾行水につれて泡の間もなく消る命と惜み、すくひあげて吞つる物をと申。三之丞うち笑ひて、人によるこぼしたまふを仇には聞かずと云捨て、岸根づたひに歸り姿、素面自然の美男にして又いふべからず。秦の始皇帝に巫山の神女、唾を吐懸けしに、其跡痣となつて残り、今又此つばき我口中に消ずあつて甘露不斷の樂みもがなとつぶやき、御跡慕ひ行に西は秋志野や外山に入日、はや人の良も見えずなりにき。比は二月十二日の夜道、宵は月見る心當も違ひて、春も時雨めきたる雲の生駒葛城に立重なり、今にも袖やぬれんと郡山に道急ぎしに、里の水橋あやふく渡りて、萩の燒原に去年の刈蕪足をもちめ行に、角落してけうとき鹿の通ひ路、火ともし狐狼の臥所これには怯じず、浮世の人の驚く煙立て隠坊の住めるひとつ庵を詠め過、大安寺といふ里近くなりて、胸道より挑燈持て取まはしのかしこさうなる小者、頭巾引冠りて先に立行を、店の光もとめて友とせし針立の道仁も思ひよらざる機嫌、餘所の小礫此方の花見の肴となるとき、やく程もなく郡山につきて、なほ屋形町の末、わがすむ門前迄來て内に入を見届け、彼男あとへ還りぬ。それまでは何の心も着かざりしが、三之丞不思議なる事かなと、先二親に目見えして、薪見物いたし、只今罷歸ると申捨て追かけ行に、やう／＼挑燈に近付見るに葉菊



の紋所なり、扱は晝見し侍を思ひ合せ、忍びて送りけるに奈良も近くなりて、おのづから蠟燭たち消
 心は闇となりぬ。かく形を替て見送りとはよもや若衆はしらせたまふまじといふを聞て、其御心入ぞ
 んじたればこそはるく送返すと、手を捉へて緊めたまへば、勘右衛門夢の心地して、しばしは物を
 もえいはず立すくみて、それは本で御座りますか、難有き御心ざし、かはるな、替らじ、忘れな、忘れま
 いといふうちに、西の京の八つの鐘數へてまだ夜深なれば、しめやかに語りて明方にかへらんとはや
 名残を惜む、是にかぎらず先御首尾もいかとなり、我おぼしめさば重ねての御情と、なんの事もなう、
 それより又郡山へ送る道すがらの誓に、人の命はしれぬ物ぞかし、八重櫻までは待たじ、初櫻の咲頃
 いつも見にまかる事あり、彌生ひとへ二日にはかならずの約束深く、別れての朝風着なれざる、構拾
 の袖をもりて、かりそめの鼻聲次第に重りて間もなく、二月廿七日の夜春日野の土となりぬ、三之丞
 は知らず、尋ね来て是を嘆くに限り知られず、せめてはゆかりを聞けども、遠國の人とて誰跡吊ふかた
 もなしとや、其住たまへる所はと聞に、むかし連歌師紹巴の庵の跡とて、南市といふ片陰に槍木の生
 垣物ふりて、下地窓より供部屋を覗けば、まだ七日もたぬに小者集りて、武文四文に讀うつなど、
 扇拍子に聲を惜まず、むかし用明天皇は玉代の姫を戀わびてと語るも有り、又は宇和の郡の魚鏡かを
 り、いかに下々なればとて主の死別をしらざるやと、斷りなしに枝折戸を明けて入に、床のかた脇に土

器に盛りて煙絶えず、萎れぬ椿を立て春雪道泉と改名、ま見えし人は是かと袖良におしあて、しばし枕のあからざりし所に、色よき男うひかうむりして間のなき風俗、白むくに淺黄の上下袂しほれて佛佛に拜して、はるか引さがつて坐して愁に沈む有様を見て、卒爾ながら私はと申果ぬに、三之丞どのにてましますか。勘右衛門息引とるまで御事のみ忘れず、郡山へ送りて送られと斗、つひに其身は野送りのかなしさ。夢ではないか、夢で有かな、夢とはおぼしめさずやと嘆きかけて嘆かせ、諸聲をあげて互に半時あまりの涙、軒もる玉水のごとし、やうく春の日も影絶えて、雨戸をさす火宅の車の音におどろき、かねて浮世とは思ひながら此本意なさ、何長らへ物憂し、四十九日行死出の籠にては追付べしと、心の劔をぬきて、見えわたりたる人に跡頼むといふ。飛びかゝつて自害をとよめ、我こそとくに死ぬべき身なれ、子細は前髪立の時、五とせあまりの念比、なほ年長けても後立には三笠山とも思ひしに、此情なき事左内が心と引くらべて見たまへ、殊に最後の時、世に誰あつて香花手向るかたもなし、我おもはゞ命ながらへの一言背かず、すゑくは出家にもなりぬべき心ざしなり、申ても御方にはかりそめの御言葉をかはしたるべき分なれば、逢はぬむかしと何事も捨てたまへといふ、そなた様こそ年比心も残らぬ枕物語の有盡しての今なり、我は一夜も語らぬ先の物うさ、是までの露命とおもひ切を、左内様々義理をつめて留めければ、三之丞も至極して自害を思留まり、此上は此方に勘

右衛門殿となりかはつて、それがしと戀道の縁なしてたまはれといふ、左内申は、それ迄もなし、向後仇には存せずといふ、其分にては嬉しからず、是非念比といはれて否がならず、申かはして扱夜もすから、左内勘右衛門に馴初めし以前を聞くに、堺昌雲寺の庭を爰に移して蘇鐵植替へらるゝ日、是なる岩に腰懸けながらまかせ水を手に請て、あまりを後に人の有ともしらず撒けば、濡れたい折ふしにかたじけないと、聲低うしていはれし、勘右衛門殿いとをしく、其後いつともなく戯れて世のそしりは大事か、親仁神前の御番をかながへ、遠き高島より忍びて通ひしに、嬉しき事は忘れもやらず、風吹て雪の夜の夜かならず参るのよし、晝より文遣はしければ、我家居近く迎ひに來りたまひ、肩車に乗せて懐より具足着たる金平をたまはりける、道すから切合事して、その夜は勘右衛門殿寢姿を馬にして乗れば、よき御大將と申されしかと語り寢入に、聞人もともに同じ斬をあらそふ、かゝる時勘右衛門現の形を現はし、此度二人が愁歎の中に兄弟分のかたらひ、うれしき事にぞ有ける、三之丞面影十九萬石の下に似たものもなし、されども郡山風にて鬢つき下り過て見苦し、左内何と思ふぞ、少し後をたてんと鏡に向はせ、此くらゐがよいかといひ捨て其のまゝ夢は覺めける、あたりに手盥もなく鞆刀もなく、月代は誠に剃りて残せり、夢はゆめながら是は不思議ぞかし。

東の伽羅様

萩咲し宮城野もむかしにかはり、今は一もとも見えざなりて、世に古歌ばかり残り。野懸振舞の長持は都への取遣し、十二棒の内かと思はる。折ふし青み立たる草生に、たんぼゝ土筆の可笑げなるを、摘む人は加賀笠深く袖下長く、後帯の様子はいづれも念者のありさうに、面影に立留りて見れば、幕の内より老女出て、これお藤様、およしさまと呼聲聞て、扱は人の小娘めと唾吐して行けば、仙臺の城下に入て芭蕉が辻といふ所の町外に、小西の十助といへる藥屋のありける、内への通ひ口の暖簾もれて、一炷のかをり通りがけに聞に、おそらくは此國の守の御物白菊にもおとるまじきすがりなり、留める袖隠しく糊さきに立寄り、留木などを調へたしといふてたよりて、奥深く聞ゆる木をも所望といへば、悴子がたしなみ伽羅なればおもひもよらずと、親仁つれなき返事に、炷かぬさきよりこがれて、柴船のしばし休らふて行、此男は伴の市九郎とて津輕町人、一念に若色浅からぬ好人、此度の江戸心ざしも堺町に近年の出来島、見ぬござらしを焦れて、奴作兵衛が許へしるべの方より狀を付られて、若道狂ひばかりにのぼる。かたへには稀なる風俗なり、此有様を十助が子の十太郎見初て、我かく前髪の盛といふも五とせまでの花にもあらず、ひたひに毛貫のかねに散べきもやがてなり、今まで數百



人の通はせ文つひに披けず、諸人に情しらずと名に立つも、氣に入たる兄分見えわたらぬゆゑぞかし、今の男此心入を不佞と思はば、身にかへての念頃したしと、俄に口走つて亂氣の眼ざし、小脇に手飼の獅を抱き、双物の鞘外して持つれば人あたりへ近着かず、やう／＼乳まのらせたる姥、命を捨て糲りつき、今の旅人をよびもどして御願のまゝになる事と申せば、しばし心のしづまる時、且那山伏善見院の覺傳坊を頼み、檀を飾り鈴のひびき、錫杖の音あらげなく加持する。そもそも此少人の出生は、十介爰に入舞して三十五年、今年六十余まで屋繼のなき事をなげき、鬮鬮が岡の天神に夫婦籠りての申す、ある夜の夢に神前の紅梅の梢より、ひぢりめんのふんどし一筋落かかつて胎内に宿ると見しが、あけの日より青梅を喰ひたがりて月日を重ね、此若衆を産出す。其後名譽は五歳の時習はぬ大文字を齎て寺社の繪馬に懸奉る。是を思ふに和泉屋さよ、筆と同じ。又十三歳の時夏の夜の短物語といふ草紙に、逢て別れを惜む戀無情のさかひを作らるゝ程のころから、身の上を覺えず取亂されしはよく／＼の樹籬と、いとしさもまさりていろ／＼いたはれども、次第弱りの朝脈、夕のかしらせんじも更にきかず、大形はかぎりの浮世と極め、經帷子をぬはせ、早桶をあつらへ、今宵の知死期を待時、にかなき枕を我れとあげて、うれしや彼おもひ人明日の西日の時分かならず爰を通りたまふ、それは非に留めて逢はせよといふ。是も謠言とおもひながら、町の出口琵琶首と申所に人を付て置に、案のこ

とく其人に逢て小西の家に誘ひ、十介ひそかに始終を語れば、市九郎も涙を流し、此上に十太郎自然の事あらば、我各諸共に出家となつて其跡を吊ふべし。先病人に逢ひて今生の暇乞と枕近くよれば、十太郎忽ち姿もとにかへり、市九郎に心底残さず語る。體に宿に、魂は先々に付添ひて、人こそしらね幻のたはふれ、殊更平和泉高館の舊跡一見したまひて、光堂の宿坊に一夜を明したまふ。旅夜着の下にこがれて、物いはぬ契りをこめ、左の袂に伽羅の刺欠を入置しがそれはととへば、いかにも是に在と取出し、不審も今曉て猶不思議なりといへば、疑はせ給はぬ印を見せ申べしと、彼木の欠を取出し、つぎ合すればひとつなり。姓ば同しかをり、扱はと二世の契約深く、十太郎をもらひて乘懸貳足の足音勇みて、五つ橋を踏ならし、津輕に下りけるとなり。

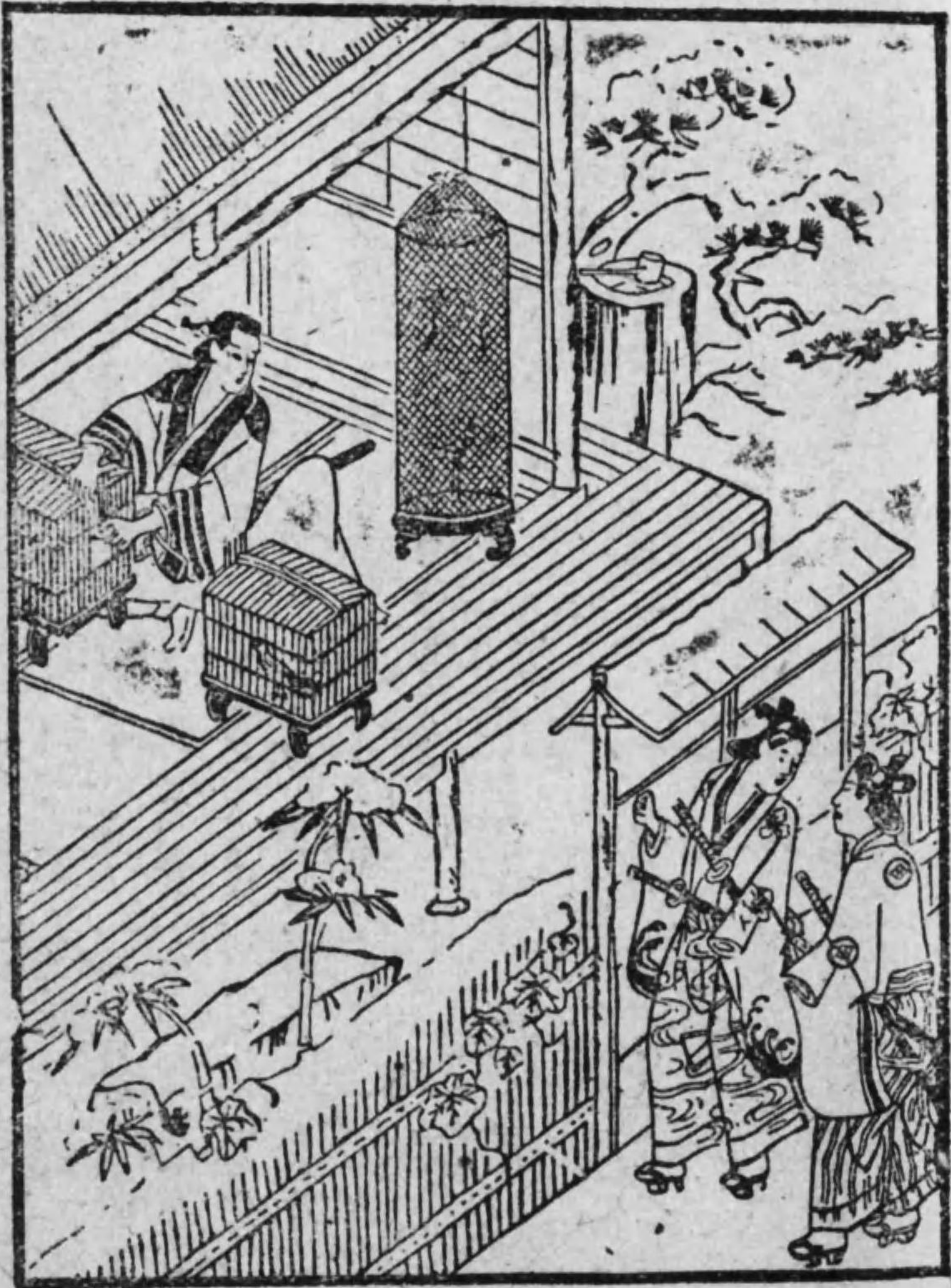
雪中の時鳥

越前の國湯尾峠の茶屋の軒端に、大きな杓子をしるして孫じやくしとて、抱齋輕き守札を出す、又河内の國岸の堂といふ觀音の場に煎豆を埋みて祈る事あり。げにや人の親の痕痕づらをなげかねはなし。されども女の子にはありてもさのみ苦しからず、欲の世の中なれば、それ／＼の敷金にて一人も餘らず、只悲しきは男の子なり。たま／＼人間の形はかはらず、只ばかりのおもひどにて

一生のうち執心の懸手もなく、物參の道づれにさへ嫌はれ、十五にも足らず脇をふさぎ、世に惜む人もなく、常山の花の散がごとし。あらき風をもよけて今時の子を育つるには心を盡くし、大かたなる姿も見よげになれる、櫻田あたりの去大名の若殿、六歳にして、もがさの山は富士の氣色かはつて酒湯の跡一面に、薄むらさきの雲かゝつて雪見し肌を埋むがごとくなりて、一家中なげきの雨待ばかりの夜、ほとゝぎすの羽にて是をなづれば御身やすかるべきと申せば、其鳥の飛のを見よと仰せられける程に、所々に手分してたづねけるに、折ふしの深山木も落葉、池は氷に水鳥のすむより外はなし。ある人、細工を得たるものに、ひよ鳥のおもしろきに、指羽などさせて御目にかげんとするとき、出頭家老の許へ朝夕出入、小田原町の九歳とて着屋の有けるが参り合せて、此取沙汰を聞て、わたくし存知たるかたに幸郭公の候へば、もらひ請て差上ぐべしと申せば、それよと九歳に深く頼み、其身は御前に出、只今まことのほとゝぎすがまゐると申上れば、御機嫌限りなし、近所に有合ふ人も是珍鳥と申、着賣は直に小鳥を好かるゝ平人の宿へ、磨餌の焼籠など運びて、こと次に、近頃御無心ながら時鳥を一羽申請たき願ひあり、私の世忤痘瘡のまじなひに入る事を語れば、我も人も子の不便をしらざらんやと心よく賜はる。かたじけなしと立出しが立歸り、今申せし事は偽りなり、去御大名様へさしあぐるなり、定めて大分の御拜領有べし、半分は進上申べきといふ。聞もあへず取還して觀

色かはり、朱鞘の反かへすを見てやう／＼にげのび、様子を申せば老中いづれも驚く。中にも申上し人さし當つての迷惑、口上よき使番の人橋をかくれども、門を閉てさらに渡りあはず。せんかたもなく時を移すうちに、ほとゝぎす／＼と若殿御待なさるゝ程に、大殿の御耳にも立て、さまざま詮議ある時、物になれたる御局の明石といふ人、色よき京女房を装立て、四五人早乗物にて所を尋ね行に、下谷通りはるかに良角刺原の邊にすこしの藪、門に入れば左の方に草葺の庵あつて、軒に女人堂としやれ板に書付、窓より見こめば高坊主、墨の衣はきずして鶏の毛焼する風情をかし。なほ奥ぶかに又門あつて、新高野山と額をうつて、松の嵐しん／＼と心もすみわたる折から、十四五なる前髪の鬘付、伽羅の油賣ものと見えしが、上氣して額に汗などをかき、後帯をそ／＼に結びながら、物に懲りたる有さまして足早ににげて行。是の旦那はと問へど答へず、門番の入道呼びてあらましをかたり、おくへ案内と頼めど、女はたとへば繪に書ても入べからず、まして見るしき抱へ帯、口紅染齒がつて嫌ひなり、一人あるお袋様の御見舞に御越ましますをも内には入れず、これまで逢ひに出らるゝなり。女の取次申上る迄もなしと斷りをもきゝ入れねば、明石も力およばず、あふたらば天晴言葉で濡らしてと想へども、かゝる女嫌ひも世に又あるものかなと、是非なく屋敷へ歸り、つかれぬうちに、御小姓組に金澤内記、下川團介、十六、十七の器量ものなるが、時鳥につき家老の不首尾を見かね、心

を合せ早馬にてかけ付、其庵二町ばかり此方に下人を残し、只ふたり中門にはしり込み、あらけなくたゞき明けて竹縁にせはしく上りて、島村藤内殿とは御自分の御事にて候か、卒爾ながら御命を兩人の者申請ると申せば、藤内何とも合點はゆかねども、兩を見るに花なり紅葉なり。あゝ一度はちらぬ身か、仔細を聞迄もなし、心やすかれと着籠を三人前取出し、大身鎗の鞘をはづし、今にも追手來るべし、油断と申せど兩人立もなほらず、莞爾と目ませすれば、藤内勇む心をしづめ、是は様子を聞べしといふ。兩人口を揃へ、いさゝか左様の義にはあらず、貴様の御命は我々申請ければ、此家内みな欲しきまゝなりと申。扱は此島の所望と見えたり、最前より一命を進じ置たる上に何が惜かるべしと、二羽のほととぎす兩人に渡せば、早速かたじけなしと五色の房つきの丸籠をさげ、門外に出、下人を招き、大挾箱ひとつ藤内に預けて櫻田に歸り、其首尾残る所なし。其夜また團介、内記、牢人屋敷へ忍び來て、晝の禮義正しくのべて、假初ながら是もちなむべき縁なり、向後此兩人、お氣には入まじけれども色道の念頃あそばしたまはれと申せば、世には此方から心を盡くす事のみ、かへつておのゝ様よりふがひもなき牢人ものを、人と思召され近頃有がたく候。然れどもお二人の内いづれと指圖もならず、殊には御心ざしのほども知れがたし、とかく此義は御ゆるしあれと申。内記、團介、赤面して、深く思ひ入申るしにはと兩人一度に肩をぬげば、左の腕に團介は島村と入彦子、おなじく内記、



藤内と名名字を逢はぬうちより是はと見する。それは女の仕業なり、まことは命をも惜まぬ人をこそ見定めての契約といふ。さては我々一命捨まじきのとや、その挾箱と申もはてず蓋をあくれば、此内に三方二つ、紙巻の小脇指二腰、切腹の用意。是はと藤内おどろき、中に飛入様子をきく、是は最前ほとよぎすをもらひうけずば只還らじ、いさぎよく死出の田長の鳥の事にさへ相果る身に定めしに、ましてや此わけに捨兼ぬべきやと泪を流す。藤内あやまつてかすくの言葉をさげ、此上は何か二心あるべしと、左右の小指を喰切、ふたりに渡し、情となさけを一つに合せ、まためづらしき衆道の取結びぞかし。

男色大鑑第二巻 終

男色大鑑

本朝若風俗

第三卷

目録

一

編笠は重ての恨み

重きが上の入子鍋の事

中堂さわぎの事

一流床髪結の事

二

颯ころする袖の雪

富士は夢の掛繪の事

萎の花は冬咲の事

男色大鑑

卷三

俄幽霊になる事

三

中脇指は思ひの焼残り

つき白は昔の面影の事

死んでも女嫌ひの事

古里の難義濟ます事

四

薬はさかぬ房枕

念比なかにちの中立なかにちの事

春の夜は闇打くらげの事

十六八の花一度いちどに散ちる事

五

色に見籠こもは山吹やまぶきの盛

四年よねの道中みちのちゆうやつれの事

情いのちの命也いのちの事

訴訟せうぎは思おもひを種この事

編笠は重ての恨み

ひのえ午の女はかならず男を喰へると、世に傳へしがそれには限らず。近江の國筑摩の祭を見しに、此里の風流女縁なくて去られ、或は死別れ、又は隠し夫の顯はれ、重夫の數程鍋を覆かせ、所習ひにて御神事を渡す。年長たる女房の姿婀娜、しかも面子の何佞(〇恰カ)なるが、鍋一つをかざして是をさへ恥るも有るに、いまだ臉明の娘齒も染ず眉も有りながら、大鍋七つ重ね頭勝にして雲踏かりしに、後より母の親手を掛て、孫を負て、抱て、獨は手を引て、はや子供も三人迄持と見えて諸人の笑ふも構はずして、二柱の陰、櫛の奥に彼面影見殘し、心々に歸る野の道筋、紫は色薄く菖蒲の澤水清く、岸の晝貝も西日に花の艶を失ひ、人なほ頻に汗を悲み、都の富士といふ時花出の大編笠をかづきつれたるは、觀山の兒若衆是こそ戀の根本中堂の阿闍梨の夜の友蘭丸、其年もまだ十四とは見る人もなし。美形すぐれて一山思ひを懸ざるはなし。同じ院内に掛人井關貞助、是も見法師に交りて立歸る時、我笠を脱ぎて蘭丸の笠の上にかづけしに、嬌嬌なる風情のをかしげになれる、それも興になして行に、跡より指をさして、女のする事を男も念者の數に笠を覆かすと、協つくて笑ふ。蘭丸立留り、我に念友の數ありとや、爰は是非の聞所と申せば、人の口迄もなし、下卑敷御心に尋ね見給へといふ。蘭丸忍

笑て、それがし師坊の弄びとなる事、是は情の道にはあらず、明暮京より通ふ人こそ我に獨の念者、今も忘れぬ物をと泪に沈むは、少しおくれたる様にも見えしが、猶おとなしくも沙汰していづれも外なる事に取なし、楫の音帆の手せはしく堅田の磯を走らかし、諸山の晚鐘告渡る時やうへ御寺に歸つて、過にし口論何の子細もなく濟みぬ。此蘭丸生國は加賀の小松の人、長谷川隼人と申せし方の末子なり、男子ばかり十二人持て世に榮え家めでたく、國橋の渡り初にも擇ばれしに、無常も續く物かな、春より散初めて秋は梢淋しく、その年の霜見月迄に九人愁の煙となりぬ。三男金兵衛に世を譲りしに、間もなく同役に頼れ首尾黙止がたく、同じ極月廿三日の夜助太刀打て、是も見納めの夢とはなりぬ、片親女心のやるせもなく、思ひに出入息も絶て、七日も立ざる中に又歎きぬ、今は身の樂を捨て弓刀の家を逃れむと、一子金太夫に名蕙を残し、弟蘭丸は出家になしてと思ひ定めぬ。一人髪を斷ば九族愛欲の罪を免ると、十二歳の秋當山に登し、父は白山の麓に分入給ひしが、其時の御詞に、墨染の姿にかへて我に一目とくれソ、仰せられける程に、過し年も出家を望みしに、十五の春迄はと情にとめられて情なし、今宵貞助と打呆しなば不孝の第一なれ共、けふの野心の止がたく、人も好に靜りて後、年月の通はせ文共を取集め、今懐かしく重ね見しに同じ筆には非ず、ひとつ文章もかはりぬ。是を思ふに、自書事を得ずして心を人に頼み、度毎の氣づくし一入に懐深くぞ思ふ。我空しうなりなば



跡にて歎きも恨みも限は有まじ、思ひ定めし身の一日過たればとて一念は遂ぐべし。夜も明なば都に
行て可愛男に今一度此姿をも見せ、假なる添臥して細に次第は語らず、浮世の名残にもと人しれぬ
泪のやむ事なし。此山の若衆を柴男のあらけなき手して事缺に撫梳をさすも心に叶はずとて、おの
く雲母越はるかに四里の山道を行て、三條の橋なる床迄髪を結せに出ける。中にも上手とて鬢水の
かはく間もなく白鷺の清入とて、かゝる下職には人皆惜む程の若き者也、一生美道に身をなせば手づ
まも優れて折柳とて一流結出し、髪先二の曲の清なれば、普く此床にたよりて曙より前後を争ふ。關
丸を見ては人の思はくも構はず、手透を待兼し人をさし置、袖も外なるを取出し心静に前髪をつくり
まゐらせける。有時床を立はなれ、山下一里も歩行に、折ふし神送の空恐ろしげに五色の雲さわぎて、
雨はやさしく風はあらけなく、落葉は肩を埋て撫雲の油も乾燥き面影の替るを惜やと綾指の繁き東陰
に袖をかざし、手して押へ、峰の晴間を待託しに、三條より清入御跡を慕ひ來て懷中より櫛道具など
取出し、御ぐしのそゝけ侍るを思はれ是迄と、岩の小細水を掬ひ揚て、元のごとくに兒達を撫付まる
らせけるは心根深くやさしく、關丸を戀忍ぶやといづれも其色は見すかしにける。是より不便と思ひ
初、清入に身をまかせ、行末も久しく頼もしく思ひしに、今日は最後の暇とは夢にも清入は知らね
ばこそ、いつにかかりて機嫌も悪敷、四五日絶し頃信を疑ひ當言のさまなく、無情は思ひながら中宿

に誘ひ行て心よく飲交して、酔の内は枕に枕近く無理の有程聞暮て、別れはいつとても泪ぞかし。律
氣なる寺男召連れて還りさまに竹屋といへる細工人の許に立寄り、しばらく有て出て行を見え隠れに、
心に掛れば彼砥屋に入て機子を尋ねければ、何かはしらず一腰の目釘を打替へ、切刀を付參らせける
と申す。是不思議と間もなく身拵へして其跡を慕ひ行に、西谷の近道茨葛に足を痛ませ、息も絶々
になる時梢も峰も見えなくなりき。やうく元三大師の燈の影に休らひ、越方を思ひ、また關丸
が心根を疑はれ、音日慈鐘和尚の此山の神姿に讀給へり、我ならぬ人にもかくや契るらんと思ふに付て
濡る袖かなとは、美しき前髪に現しまみえ給ふさへ又もや人にと思はれし、ましてや我戀人は唐土の
鄭通、本朝の義治にもおとるまじければ、男色の輩は惱べしと、心づかひのやるせなき所へ、寺中
手炬を揮せ、關丸、貞助を討て立のきしと、早鐘螺の貝を吹立、年月恨の惡僧手分をしてぞ索しけ
る。清入さてはと跡に續きて東に下れば、あらけなき法師の六七人して關丸を捕へて、心任せに自害
もさせず、とても遁れず打首あへる身なれば何か思ひ残すべし。日比は盃なりともとおのく希へど
つれなく、其事もなく過ぬ。折からなれば此若衆目を看にして吞と、坂なる請酒屋をたゞき起し、口
の缺けたる徳利をならし、めげ器を持て人の手より口に移し、時節も有物かな自由なる御情にあづか
ると、袖下より手を入るゝも有り、今迄は人の云事もきかずやと耳引もあり、後帯をほどき又は頭

刻紙を付、いろ／＼に懸けれども左右の腕をひしがれ是非なき憂目を見るに、又法師のおのれが舌先口近く寄する時齒を喰しめ、黄なる涙をながしける。清八懸つけ入道切ちらし、蘭丸をいさめて行方しらずなりぬ。其通りに名ばかり残り。三年も過てある人の語りしは、執行の身にかへ連吹の尺八、菓籠の懐かしや、鎌倉の鶴が岡にして遣ひけるとや。

懸ころする袖の雪

炭竈踏皮屋の秋、鹿の身の毛を立て多山の景色白妙の曙、伊賀の國の守初雪を夢に見しが、誠とは降けるよと仰られし。御前に小扨從組詰めし中に山脇笹之介とて有しが、御納戸に行て探幽筆の富士取出し、大床に掛奉つれば、即座の才覚是ぞ日本一の御機嫌ぞかし。一條の院雪の朝に香爐峰の詠めはとのたまはせければ、清少納言北の軒端の御簾をまきけり。遺愛寺の鐘は枕をそばたて、聞、香爐峰の雪は簾を撥けて見ると、白樂天が詩の心を感せさせ給ふとや。今又雪の夢に不二の繪を合せ侍る事たぐひなし、それより近う召仕はれける。いまだ江戸詰は御ゆるされて、御参勤の跡は心まかせに暮しぬ。ある日追鳥狩に前髪中間四人岡野邊に出て、目標の松を埋み、枯草の道も定りなく、岩根切燕鳥に見懸てかけり回りと興をさましぬ。小宮の森の雀さへなくおの／＼立歸る時、玉笹の陰深く里

人の穂屋造りて、瓜の番せし跡より雉子の飛出れば、鎌木割竹におどろかさせ、いづれも嬉しげに捕へ侍るに、續て又雄の何羽も見えて佳興此時、黠き小者彼草葺に便りて見るに、籠に雉子を入れてえしれぬ男二人身を陰してありしが、御領内は鳥捕事かたき掟を知らずやと吟味にかゝる時、壺人は笠に面を脊てにげ行。今獨を手籠に命も危きに笹之助懸付身に替て、世を渡る種なればゆるし給へと託て、暮近くなりて只とる鳥の仕合と、春待梅を折て雉子を付て、戀も哀も知らぬわたり侍供して歸る。笹之助は足痛むのよしとて跡に下り、彼鳥取に尋ねけるは、いかにしても今日の忍べる有様、おのれ賊を語らずば宿に歸さじとの眼ざしに機を失ひ、私は伴葉右衛門下人なるが且那先に逃侍ると申す。葉右衛門は我も人も存じたる方なり、何とて人には隠れ給ふぞ、是ふしぎとあれば、山脇笹之助とやらんが殺生に出けるが、毎日家中のさわぎに今日は鳥のなき事をしらすで、若衆の足下もいたまし、心よく慰のためとて庭籠鳥を目通りへ放ちけると、ありのまゝに申せば、扱々其若衆の身にしては悦び限有まじ、我も其方にあやかる祝義ぞと、應あはの羽織をぬぎて賜はりければ、是よりは貳升樽もがなと思ふぞをかし。其後は此中間文の便となつて、美道のかたらひ洩からぬ中人も見ゆるし侍る。有時長田山の西念寺の庭に復花咲て、家中春の心になりて見にまかりぬ。美景胡蝶、見る人詩魔に便を付られ、腐復化するを忘れ、樽の出し口を仕掛、少人まじりに呑かはし、半なる折ふし葉右衛門

花に來りしに、幸に留て五十嵐市三郎と申人杯に餘してさせば、世間詞にてかたじけないと溢るゝばかりうけて、酔の中にも君が事のみ、刀脇指は忘れず立歸るに、はや笹之助に誰かは告げし、胸に火燧を仕出し、はげしき風を厭はず、門外に立て葉右衛門待兼、手を取て屋敷に入、露路の猿戸を鏡おろして雨戸も内よりかため、掃庭に葉右衛門獨り立わづらはせ置く、さては首尾心もとなくて、しばしは聲をも立ず様子見合すうちに、降出しより積氣色の雪、はじめの程は袖を拂ひしに、梢老たる桐栢の陰も舍りの便ならねば、次第に絶がたく、肺の臟より常の聲も出ず、やれ今死ぬるはと懺めば、内には小坊主あひ手にして笑ひ聲して、いまだ御付指の温りも醒ざらましと二階座敷より申す。去迎は何の心もなき事なり、是に懲ぬといふ事なし、此後は若衆の趾をも通るまじきと、能てもなほ詞を嫌き、然らば其二腰を此方へ渡し給へと請取、又指さして嘲哂り、着物袴ぬぎ給へと丸裸になして、連の事に解髪にと申す。是も否がならねば頓て形を替れば、梵字書し紙を纏て額に當給へと申。今は息絶々に悲しさ身にふるび出て、まことの幽霊聲になりて、其後は手をあげて和南より外はなし。笹之助小袴をうつて、あゝら有がたの御吊やなど飄出して下を脱げ、葉右衛門聲せはしく躑躅、うき世の眼を驚き、取籠あくる間も眼に頼もなければ、同じ枕に腹掻ききて只今の夢とはなりぬ。是非もなき歌さの中に不眠の寝顔を見れば、床とらせて枕二つ、燒しめたる白小袖、あたりに酒事の器も見え



わたり。此心根の程想はれて諸人横手うたざるはなし。

中脇指は思ひの焼残り

骨桶二つ風呂敷包に取添へ、今やなど無常は辨がたき男の、泪ぐみて高野道を尋ねける。爰に攝泉河州の境に三國の茶屋と云所に休みしに、幸の同行二人語り合て行に、時しも里は夏至に入て、田植歌のをかしげなる、女の菅笠きたる様も好もしくながめやるに、一人の男脇見して通り、何事にもあり女の業を見る事なし。世に若道より外はなきにと云ふ。我もそれよと男泣にして骨の曲物を手に居ゑ、さりとは憂世ながらへて効なき身と、哀に悲しく見えける。いかなる事ぞとあらましを聞に、此人駿河なる府中の町に京物棚を出せし人の一子、萬屋の久四郎とてまた並べて形の似たる者もなき若衆なりしに、情といふ事十三より深く我に身をまかし、明暮水魚のかたらひなすに、定めなや泡と消て百ヶ日も過れば、此骨を奥の院に埋み、御山の土になしてと語る。今一つの骨桶はと尋ねけるに、是も思ひは同じ友とせし人内義向へしに、其夜盃事はじめて松竹の鳥糞出し時、彼娘うつむきて眠れることく息切て空しく成ぬ。其人の骨をも此度ことづかり行といふ。男笑ふて、愚なる人や、女の焼灰なればとて衆道を好ける人の手に持事はと申せば、誤りて彼女の骨は濁江になげ捨しに、澤瀉水露



の葉陰に沈みぬ。かゝる女色嫌ひも有ものかとなほ語り三日市と云ふ所につきぬ。折から彼山の隠元らしき御法師の、知行里の牛飼童子を無理に拵へ、いまだ伴には昔の垢の名残も見え、殿髪かみの赤き巻立まきだてに結せ、無紋の淺黄帷子の丸袖を、脇あけて着するを見て振みじかく、あがり物の大小鈿は大きに柄細く、腰付をかしげなるを愛し給は殊勝に見送る先に、信なる男門おとこかどに白を立て米も大方に白む時、春袴はるばかをなげ捨せはしく身を隠す、其尻付の黒きこそ見苦しけれ。御坊ごぼうはるかに行過て立とまり、めしつれの男に何か細語こゝろごとき給へば、袂箱たもとばこに付し石花干いしはなかんもおろして立戻り、二百つなぎの錢を米春に渡して、あなたには過にし事共忘れ給はぬに、其後は何とて御寺に見えぬぞ、近き内にと申残して別れぬ。跡にて様子きけば、あの御法師様ごぼうさまに年月情としげの身なりしが、かくもなる物かと小襦こじゆを拂ふて袖をひたす。好る道とて是をも笑はずゆくに、禿かぶといふ宿の名もいやに、女人堂にょにんどう迄は折々目をふさぎ越して、花摘はなとりよりおのづから有難く、千本の櫻の奥裏おくうらて佛法僧ぶつぽうそうの聲こゑに、白衣びやくいの姿あらはれ、心を留れば別れたる小人、愁の片手に中脇指ちゆうわきさしを持って腰こしの屈まがり程隔たり、我名を呼ぶにあきれて、夢共現共少時は詠めけるに、二たびまみえ、往昔むかしを歎なげくに盡つきす。我最期わがさいごの時早はや補ほの内へ此一腰このひたを何か惜おぼからじと入られしが、是は冨代ふよひを取遠とへ、去侍さきざむらい方より内證うちしょうにて預り置おしなり、我わがむなしくなりて後、彼方より還せとの催足もよほ、世の難義なんぎに遭あひ給へば古里へ是をと云い聲こゑの跡あとなくて、戀こゝろしさむかし拵への中脇指ちゆうわきさし残りて、是

ぞ現まに誠まことあり。唐土たうどの湘妃玉琴しやうひたま弾かど見し面影おもかげの戀こゝろははれ、夢心むこころになつて國本くにもとにて心ざしたる熊野くまのにも詣らず、古里ふるりに歸れば、首くびヶ日も過行あやまり二親ふたおやのなげきはやまざる中へ、人橋ひとばしを擧あげて腰こしに預けたる脇指わきさしもどせと催足もよほ。金銀きんぎんつみて詫言わごころごとを開入ひらず、ありしまゝに還せとは悲かなさのあまりに、無常野むじやうのに行て埋うみし灰迄はいさがしても其跡あとかたもなく、せんかたなくて夫婦住ふうふぢゆうなれし家いへをすて立たのく折おふし、念友ねんゆうの半助はんすけ高野たかのより下向くだむかしてかの一腰このひたを渡し、久四郎くしじろがありさまを語れば、おのゝき、定めなき世に是ぞ例れいなき人の形見かたみを二度ふた見る事ことぞと語りぬ。

薬はきかぬ房枕

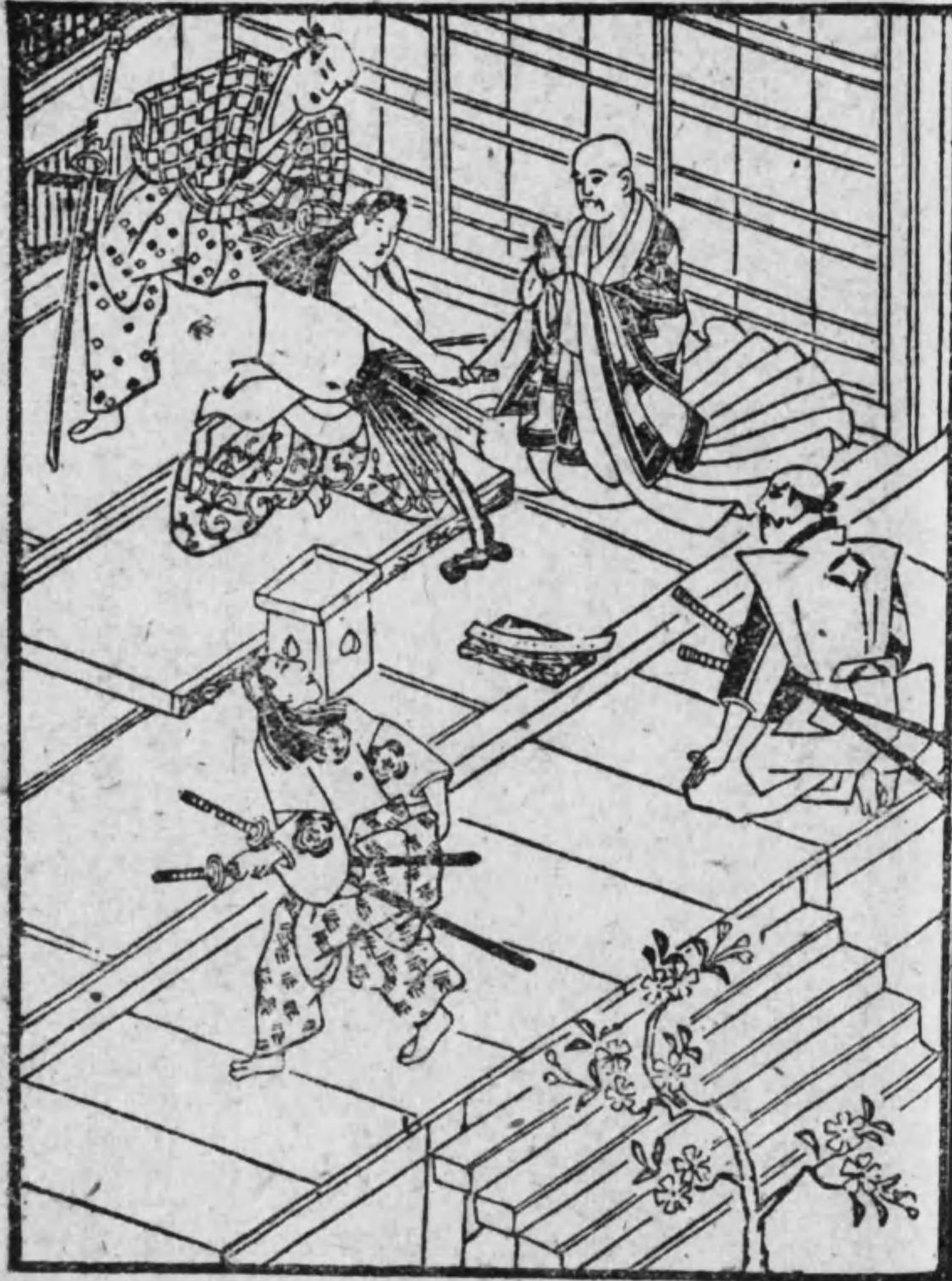
萬花色ばんかしきあるを持もて、自みづか枝えだを亡なふ。爰こゝに何がしの侍従しやくじゆうの御許ごこゝに仕へて、伊丹いたに右京うきやうといへるあり。よろづ花車はなぐるまの道みちにかしこく、形かたちは見るにまばゆき程ほどの美童みどう也。同じ流れに住ける母川ははがわ采女さいによといひて、是も十八じゅうはちになり、人柄ひとがらもすくよかに當流たうりゆうの若わかき者ものなり。ある時とき右京うきやう風情ふうじやう世よに怪あやしく心地こころ惑まどひて、吾われ魂たましひもいたづらに、躑足しゆくそくもたどく敷迄しき面影おもかげとれて、例れいならぬ床とこに晝夜しゆくやの差別さべつもなく、戸とをさしこめて其事こととなく歎なげきぬ。弱行よわゆきを恋こゝろしみ親おやしき人々ひと薬くすりの事ことなど沙汰さたし侍ざむらいるに、折おふし若いわかい聲こゑ誘いざなひまかりて病まひ家を憐あはれし人ひとの中に、戀こゝろるゝ御方ごほうも見えければ、いと亂みだれて此こゝ人ひと、色いろのあらはれ言葉ことばの末すえも人皆ひとみな

それとは聞きぬ。其中に是も采女と彼道を通からず申かはせし志賀左馬助めとがめて、人は歸りし跡に留り、惱める枕に近く小語しは、御身の様いかに共分がたく、心に懸る事もあらば我には隔て給ふまじ、今見えわたり玉ふ人の御中に思し召入れし御方有べし、さのみ執ねき罪深しなど尋ねけるに、それには非ずと云ひ紛らして過ぎぬ。問へども後は物をもいはずして打臥し、現の人となりぬ。時に唇の博士を招き問はせ侍りしに、此惱にて玉の緒の絶なん事は夢々有まじ、是は物怪窮鬼のたぐひ成べし、尊き聖に仰せて祈り加持し給へと申せば、上野の天海大僧正淺草中尊權僧正を頼み、二夜三日の護摩を修し、母はまた其國の大社へ願を懸しに、此験にや少し枕も輕う見えし時左馬助忍來て、我との事を恥させ給ふにや、是非それがし便りして思ひ人の御返を取、首尾は心やすかれなど申せば、今迄のよしみとて嬉敷人の諫と、筆に盡して包込、左馬助に渡しぬ。重ねし袖の間に入て何となく時計の間に出しに、右京なる人花に嘘きおはせしが、左馬助に近より、過しひとへは御前に貞觀政要の興行に暇なく、けふも只今迄は新古今を讀と仰せられて相詰しが、少しの氣晴しに物をもいはぬ櫻を友とせしと仰せけるを幸に、爰にも物いはぬ哀なる事の御入候と、袂に深く包し物を參らせければ、我方へでは有まじきかと笑はせ給ひ、庭木陰の闇き中へ入給ひしは、文見むための心當なるべし。しばし有て我故に惱ましますは見病がたしと、其日返書を給はりて采女に渡せば、嬉しき寢間を離れ、

夜にましむかしの氣力になりぬ。世には又うたてしき事こそあれ、近きころほひに召出されし細野主膳とて、勇を先として朝夕太刀の柄を鳴せば人皆疎み果ける、是も右京を懸て胡心のやるかたなきに、人して云ふべきにもあらず、花なる木の下に立寄り、蟬の耳喧しき迄泣み笑ひみさましく歎きしに、せめては言葉も懸給はねばなほやるせなく思ひ込しに、去ば似と友とする世の習ひ、節木松齋とて茶流の調度を預おかせ給ふ坊主、此懸を請取、命を懸て情の御返事と申せば、右京打笑ひて、法師の氣は羽帯にて塵埃の心懸あるべし、無用の媒なり、此文も壺のつめにもなりぬべきと投遣り給へば、松齋是非なく主膳に勧めて、右京を討て他の國へ今宵中に立退に極めければ、けふの夕部を待て身拵へするを聞て、はや通れぬ所と思ひ定め、此荒まし采女にも知らせずしては後の恨みも深かるべし、いはむも石流武勇の甲斐はなし、我と靜まる心の海、人を抱きて淵に沈む事あらじと思ひ定め、寛永十七年卯月十七日の夜なりけり、折ふし其夜は雨もしきりに物淋しく、直宿人も眠にをかされ、袖を敷寝して前後を辨へず、此時と打向ふ其練えもいはれず、雪妬ましき薄衣を引違へ、きよげに着なし、錦の袴裾高に、常より簾物をかをらせ、太刀引そばめ忍びやかに立向ふにも、是は隠なき匂ひにね覺、驚く人も有けれども尤めずして通し侍る。主膳は廣間を勤めて騰づくし屏風に寄懸り、持てる扇の要はしるをさしうつふいて見る所を、走り懸て聲を掛て打程に、右の肩先より乳の下迄切付ぬ。主膳も

日來の勇にたがはず、左の手にして腰の刀をぬき打に、しばし切結びけれ共深手に痛み、口惜やといふ聲共にたふれしを押伏せ、二刀さし通し、彼法師も一太刀と燈をしめし、すゝろに時を移しけるに、此太刀風に目を覺して宿りの番組奥へ亂れ、御次よりは口にかけて出、是ぞ建久のむかし富士の狩場の周章もかくこそ。數臺に織田の何がし建部四郎急ぎ燈あらはし、右京を取かこめ、御前に出ける。大殿暴かなる御聲にて、いかなる宿意にてもあれかし、上をないがしろにしたる事ははれなし、子細は徳松主殿にあらためさせ給ふに、段々至極の始終を申あぐるに、御預との御意くだし給へば、右京を屋形の間なる所をしつらひ、其夜はさまざまいたはりける。討れし人の親は小笠原の家久數細野民部なりしが我子の討れし所へかけ込、腹切んには如かじといかれる。母の親は去御方の不便がらせ給ひ、常々歌の御會にも召加へられしに、夜すがら跣足にて誑廻り此事を深く歎き、人を殺したる者、故なく助け、世に時めかせむの事はと泪袖に餘れば、見し人哀を催し侍るに、御局宮内の子に、はじめは東福寺の首座たりしがいつの比還俗して、後藤の何がし馬に鞭を進め、しかじかの事申されけるに道理に極り、右京に切腹仰せ付られければ、中立せし松齋も吾と最後に及びける。采女は事のあらむ前日より御暇申請て神奈川の母の許にまかりけるに、左馬助方より文急ぎて始終を書付け、此曙に淺草の慶養寺にて切腹と申遣しけり。返事にいちはやく御通知嬉しさのよし申して、其身は母

に暇も乞ず、早舟を借て御寺に着しかば夜も白々と明ぬ。山門廊下の陰に佇み事の様子を聞に、兎法師の集りてとりくに沙汰しけるは、今こゝへ、容顏なまめかしき若衆の腹をこそ切れ、實に斜にかたはなるだに、人の親の習ひいかと思ふめるに、増て理に過ていみじければ、さこそ二人の歎き給ふらん、哀さなど云を聞にぞいと涙深きに、見物聞傳へて集りければ、身を潜めて待けるに、新しき乗物大勢つきくありて外門に昇据えて、ゆたかに出し氣勢又なくはなやかなり。白う清かなる唐綾の織物にあだなる露草の縫づくし、淺黄上下織目正敷うらゝかに四邊を見渡し給ふに、卒都婆の數の立けるは家々の涙ぞかし。寺中の左の方に咲遅れたるにや有らん、山櫻の残すくなきを詠めて、縦横年花残梢待後春是人心と吟じたるは、采女なる人を聊ちていふなるべし。錦の縁取し疊に座して介錯の吉川勘解由を招き、鬢の美しげなる押切り、疊紙に包て、是なむ都堀川の母の許へ、今はの形見と便りに云送り給はれとさし置所へ、和尚紫衣をまくり手して生者必滅の理をしめし給へば、此世に長生を保つ美人鬢糸をまぬかれず、容色新なる本意達して、自劔の上に伏す事、是成佛と、袂より青地の短尺取出し、心靜に巻かへし、硯を乞て、春は花秋は月にとたはふれて、詠めし事も夢のまた夢と書置て、いなや腹かき切れば介錯して立のけに采女走かゝり、頼と計謀して腹破れば、是も首かけて打ちぬ。今年十六八を一期として寛永の春の末に闇とはなりぬ。年頃召仕はれし家の



予共此哀に思ひあひて差違へるもあり、またもとより切て世を捨て主人の菩提を吊ひけるとなり。今に至る迄淺草の慶養寺に二人の墓を築籠め、辭世の歌を位牌に押て東の空に名を高く残しぬ。志賀左馬助も世にありてせんなしと思ふ程を書殘して、七日に當り空敷成ぬ。色々哀此時見る事ぞかし。

色に見籠は山吹の盛

長屋住居の氣晴しに虎の御門を出て行に、果しもなき野末に澁谷といふ里に、金王櫻も今血氣盛なる若侍田川義左衛門とて、少年のむかしは四國にならびもなき美形なり。名は松山に高し、子細有て浪人の首尾よく、間もなく先知六百石にて濟ぬ。思ひのまゝなる春をうれしく目黒の不動に心ざしけるに、身を清むる浦の下にして風流なる美少玉縁登に淺黄紐の仕出し、裏髪の色深く、薙染の大振袖、ぬき鮫の大小、此取まはしの小細支、左手に山吹の桐花をかざして靜に豊なるを、人間とは思はず。姑射の神人牡丹に化すかとうたがはれ、うか／＼と御跡をしたひ行に、いづれか大名の御慈愛と見えて、横目らしき坊主二人、召連れられし若黨數多、馬も跡に引きつれば大かたならぬ御身ぞと、萬の事を忘れて行に、兩人の法師も酒樓の次第に覺えず小歌出て、程なく小六の宮の邊にて桐紋ある御門に入給ふ。辻番の者に尋ねければ、奥川主馬殿と申て御小姓の由語りける。歸りて其夜も夢に

兩分の前髪見通し、明の日も御門先に立暮し、御奉公も外になれば、俄に惱つくりて御暇申請、龜町貳町めの南横町に棚を借りて身を隙になし、三月廿四日より同同年の十月初つかた迄毎日通へど、二たび御面影を見る事もなく、文して歎く便もなく、明暮戀に責めらるゝ中に、此國の守御暇を下され、神無月廿五日に江戸御發駕に極まりぬ。何國迄もと思ひ立、俄にかり宿仕舞ひ、見えわたりたる諸道具を賣拂ひ、酒屋看屋に濟し、小者にも暇をとらせ、獨身となつて彼御大名の跡しのび行に、其日は金川泊り、あけの日大磯に暮て鴨立澤の邊に戀るゝ美少の駕籠を立させ、濱の方の戸を半明て、心なき身にも哀れはの古歌を吟じておはしけるに、眼を居て見込ば見合せ給ひ、爰を別れて又見る事もなく、ねぬに夢路をたどり宇津の山の切通し、袖摺岩の陰に隠れ、乗物窓を覗て思はずも茫然しに、戀君も心に懸かり初しや、千嬌ある御貞ばせにて桐花も見かへし給へり。なほ彌増に憧れ、日を重ね行に、それより拜顔もせずして、やう／＼作州の津山にて見納め、出雲の國に入て世を渡る業とて扱に肩を痛ませ、其年も暮過ぎ、あくる卯月の始に御參勤、また武州迄の道中御貞見合はす事、桑名の渡し場沙見坂、鈴の森にて三たび見送り、又江戸詰壹年、毎日屋形の外より歎き、姿もをかしくなりて、いかに戀なれば迎武士たる者の身の程をしらず、次第に憔悴と衰へるは又もなき因果なり。明の年又國元に慕ひ行に、見初て三年其身を捨ければ、袖口も裂び、襟から綿をあらはし、脇指ばかりにな

て金谷の宿はづれにて乘懸遙に見入ける。主馬も此男を見定め、扱は我に執心を懸つる事もと、氣に移て自然と哀に思はれ、横目の透もがな、尋ねてせめては言葉をかはして思ひ晴しにと、中山の松陰に待せ給ふに、男は追付がたく、其後は行方もしれず、何心もなき折ふしに此者の事思し出さるゝこを情深し。御入國の十日も過て義左衛門出雲に着しに足を痛ませ、むかしの形はなくて浮世もかざりに近し。露の命戀の種、かくなりても此身を惜み、おのづから袖乞となつて、朝の霜を簑笠に除け、夕の嵐に足を縮め、晝の内は野末に忍び、御夜詰過て御歸り姿見る迄、是を樂に毎夜御門前に通ひぬ。有時主馬若黨の九左衛門を潜に時雨降夜の淋しさを語り、侍の家に生れ我いまだ人を手に懸て切たる事なし、其時に指當りては心元なし、是非今宵の中に心試させよと仰せける。御器量の程常々見立申すにおくれさせ給ふ事には非ず、無道に人を切り天の咎も有べし、時節を御待と申せば、筋なき人を切には非ず、最前向ひ屋敷の大溝を見るに、世にありて甲斐なき非人めに何にても願ひを叶へ、其後に命をくるゝか問へと仰せける。あの身にも惜むは命と申し、それより乞食が枕近く立寄、卒爾ながら無心あり、世間の慕なき事を思ふに、人間の一生は、今降雨の晴間も定めがたし、殊に其方醜き身となり、ながらへて益の有まじ、我らが頼し若且那の望、何にても三十日願ひのまゝに暮させ、其以後刀試になりなば跡吊ひての御事と、有増語り聞かせば此男少も歎かず。迎も春を待ぬ身の寒夜



の難義凌ぐに息も絶々なり。奴は親類の末もなければ重ねて尤むる人もなし。此方願ひの最後と起上るを、屋敷に連てはじめを申あぐれば、先行水をさせ、貸着物に替きせ、中間部屋に入れて、望三日が間獻立をとり数々のもてなし、約束の日切なれば廣庭に夜更て引出し、己命をくれるに偽りはなきか、非人首をさしのべ御手打と申す。袴かいと白洲に飛下、切付られて胸骨も動かず、此脇指双引なり。いづれも是をふしぎの時、下々残らず中門の外に追出し、書院に座して彼男に貞をあげさせ、其方は見覚えたり、以前は侍そと尋ね給へば、町人の筋目を申す。いや／＼隠し給ふな、我に執心淺からぬ思し召入見請たり、今となつて包み給ひ、いつの世に誰にか語り給ふぞ、扱て我見違へかと仰せける時、肌より竹の皮に包込し物を取り出しあぐれば、柿地の錦の守袋をさ／＼けて、恐れながら心底是にと、申しも果ず涙は玉をならべける。紫の緒を解て見給ふに、薄紙七十枚纏て、目黒の原にて初戀より、けふ迄の思ひを筆に盡しける。四五枚讀兼巻かへし、彼男は九左衛門に預置き、其身は曙早く登城して御前に出で、それがし或人に思ひ込られ、念者に持たずしては若道の一分立たず、自由仕つれば御掟を背き、年來の御厚恩を忘れ侍る、兎角は御手打にと申上る。子細申せとの御意の時、右の一卷を大殿半時あまり奥迄人しれず御讀あそばし、先罷歸れ、是より詮議の後申渡すべしと仰せられけるに、私宅に御歸しあそばしては其まゝ不義仕つるなれば、是にて切腹とかさねて御訴訟。しば

らく御思案あつて大横目に仰付られ閉門と申渡され、主馬宿に歸りて其日より浪人の衣類を改め、大小を渡し、命切の戯れ、前代になき衆道ぞかし。身の取置もして死を待つ事、何か思ひ出なるべし。それより廿日目に閉門御ゆるされ、其上丸袖の時服五重、金子三十兩頂戴して思ひの外なる首尾なり。浪人の義明日見立て江戸へ送り申せとの御事、有難さいつの世にかは此御恩は送るべしと、朝をまたず旅の名残十二月廿七日に馬をむけて、見送る者共兵庫より國にかへし、東武には下らず和州葛城の山近く、榎のは井の水有里に隠れ住居して、髪散切に夢元坊と名を替へ、物いはず外に出ず、笹垣の奥深く岩間傳ひの寛の流れ、少時も住まらぬを慰て、聖言の跡を樂み、此心の清く涼しく、今世に美を盡す時花扇さへ持たず。(終)

男色大鑑

本朝若風俗 第四卷

目録

一

情なさけにしづむつ鸚鵡カササギ鱈カササギ

女おんな禰ねの古筆こひつ集あつめし事

りんきの言葉ことばづくしの事

無常むじやうは取とりあげおぼれは祖おや母ははもままならぬ事

二

身みがはりにたまはり立名たちなも丸袖まるそで

加賀笠かががさは月つきも耻はぢ姿すがたの事

寺てらの芭蕉ばしやう葉は戀こひ風かぜの吹ふき事

死しねばなすまぬ世よの中なかの事

男色大鑑 卷四

三

待兼しは三年目の命

無詩のうたがひ晴る事

武士は情と義理とやめぬ事

位牌取かはして身をしる事

四

詠め續し老木の花の頃

年は寄物ながら心は昔の事

生れつきの丸頼も物ずきの事

竹箒に女はちり行櫻見の事

五

色曝ぎは遊び寺の迷惑

現の太刀先いかなる因果といふ事

外託が命乞ふたつ物かけの事

覚えなき美女身捨る心中の事

情に沈む鸚鵡 盃

今の都室町通りに、表口もさのみ横からぬ屋造を、柱は眞檜、椀丸太、松の皮付、檜の八角、又は唐木を用ひ、ひとつ／＼品を替へ色々の様、壁も五色に、格子も世にある程の竹を揃へける、よろづを鳥の勘左衛門と云古筆見と指さしてをしへける。同じ京には住ながら隠もなき此者を知らず、仔細は松原通りを西へ大宮丹波口の方へ日参して、あり難き事爰より外はと、黒谷は淨土宗やら、祇園殿の社は南向やら、玉鉾の道を一筋に女郎狂ひに悩み、世々の遊女の筆跡かたのごとくに集め置しが、我見ぬ世の艶文もあれば疑ひなく正筆を極めたしといひけるにぞ、おの／＼興を覺しぬ。此男其頃は西島第一の大臣新在家の長吉様と名に呼び、花は咲はじめの吉野を手に入させ給ひ、後は櫻の峰つき葛城といへる太夫も中絶て、さる御所方の本態に身をやつし、明暮の詠め月薄く、螢をあだに梢の艶を忘れ、軒ばの雪もいつとなくしらせて巨燧蒲團の下こがれ、晝寢の房枕夜すがらの調諷、此上蘭十六の春の色藤姫とかや、名高き御方の落胤といへり。妓婦さ花の色は移りに、繪に畫し小町も何としてならぶべし。歌道は其家の流れに心深く、玉琴常住のもてあそび、時勢粧をうたはれしは地下人の辱動かし、投節伊勢かはり等とは格別にして、音曲さへかく豊におもしろければ、まして情の道偽



りなくて深し。なほ年月重ての契り、たがひの心ざし通じて尋常のかたらひにはあらず。あまたの侍婢、御梳みかみ又は表使おもてつかひの女腰もと、色作りたる風俗は當流たうりゆうの御所ごしょが、外にあるべき女とは思はれず、さながら階前かいはんの玉芙蓉たよわき枝に葉隠れの八重つぼみ、雨待ちて今なりと開くべき粧まけひ、滯とどの直中ちよくちゆううまき事を見ながら、人は人の花とて手折てあがたし。あるじは我物とて是を明暮めいこの遊山所ゆうざんじよ、嵯峨さあがの山陰さんいんに座敷をしつらひ、都を目の下に詠めおろし、嵐の山を庭に取、大井川おおいがわを泉水せんすいに仕かけ、彌生の三日爰こゝに噪なで、いまだ其年は桃花とうかもまだしく、けふの風情の興なきとて、北野きたのなる紙細工かみこ幾人か俄に呼寄せ、桃うづもの唐花たうかをつくらせ、行水ぎやうすいに鸚鵡ひやうにやう貝かいの盃さかづきを流し、美女左右の岸根かしのねに立ならび、詩歌しうかもふるき事なりと戀こひの冒葉ぼうはつ巧たくみにして、二人づゝ立向たつむかひひ、身上みづかみの恥をかへり見ず、随分小氣味せうきみのよき事をあらけなくいひあらそはせ、詞ことばしな少く云負いひまたる方を色道しよくだう執行しゆぎやうの足らざる女と、奥様おくさまの御目通ごめとほにて丸裸まるはだかになされ、二幅ふたはらまではづされ、廣庭ひろにわを追廻おひまるは同じ女中間なんなかまもうたてかりき。雪院ゆきいんには御心ごこころやすき出入いしゆの者、不斷ふたふた醫者いしやく樂出家らくしゆつかさじりに横手よこてを打ち働はたらけをつくつて笑ふ。いかな人も生なまで見えては取亂とれみだし、何のわけもなかりき。暮くれては小風呂こふろ呂りよに入いり、奥様おくさまより外そとに思入おもひいり目好めよ好よに自墮じだ落らく御ゆるされて、是ぞ浮世うきよ思出おもひだ、やはらか御手ごてに灸あの蓋かたしかへてもらふなど、誠まことに華清宮くわせいきゆうのたのしみ、是には有あがたき夢ゆめを見る事ぞかし。されば世間に欲ほしきは金銀きんぎんなり、此且こゝろ那殿なでんも人にかはらね共、此自由こゝろは皆小判こゝろがさす事とよく思ひ

まはして、銀ぎんの利を取とりて一生暮いしやうす程ほどよき事はなし。我内わがうちの榮華えいがたとへば御所車ごしょぐるまに乗のりても人はとがめず、烏帽子かぶとを着きて牛若丸うしわかのまね、具足ぐそくを肩かたにかけて道盛みちもりのいそがしわざを移うつし、有時あるときは碁盤いごばんの上に座ましたるもをかし。けふは首引くびひきの繪えを見合あはせてのやりくり、銘々めいめいの奥様おくさまなれど鬢はら髪かみが解とけても、高麗揚たかゝりあて啼なかしたりしても、思召おもひますまゝの御首尾ごくびび、いつの頃か和合わがはして青梅あまご好よみ給たまひ、其身そのみ惱なませられ、はや帯おビの御祝ごいわいひ、なほ日を折月せつげつを重ね、産うの間まを立たさせられ、式法しきほうのまつり事ありて、是ぞ家や繼つぎのはじめと喜悅きえつの有あつて、はるかなる腹帯はらおビの地蔵ぢざうに代かりせし女めもあり。筋目すぢめをたゞし抱かかりかゝへ、御乳ごちちを定め、御廣袖ごひろそでのゆたかなるに箔置はくおきの千年鳥ちとせとり、縫ぬひの松竹しょうちく生なれぬさきの襦じゆ袢ばんさだめ、待まちに時を得とりしきりに御腹ごはらいたみ出いで、取揚とりあり祖母そぼ玉たま禪ぜんかけて御腰ごこしを抱かかり、役人やくにん右みぎの御手ごてに子安貝こやすがひ、左ひだりの御手ごてに海馬かいばを握にぎらせ参まらせ、御次ごじには産後うぶご産前うぶまへの名人めいじん銀鍋ぎんなべに蚤はやく薬くすりを仕つかけ置おけぬ。表うらには叡山えいざん祈禱いねがひ坊ぼく稻荷いなぎの神主かみ、諸願しよゑん成就じゆじゆ就じゆ今いまや〜と待まちけるに、夢ゆめなれや眠ねれるごとくに息絶いきたえ、脉なあがりて、女中にようぢゆう泣な出し、勝手に驚おどき、さまざま心を盡つくせ共とも其甲斐そのかひなくて、つひに世の限かぎとはなりぬ。生死しんじのさかひ、愁おも歎なげの今いま、此こゝまゝ置おべきにあらねば、其夜そのよ鳥部山とりべに送りて、宵よは煙かりて今朝けさは灰塵はいじんも残のこらぬは人の身み、他人たにんのかなしむは義理ぎり一遍いっぺんの念佛ねんぶつ、泪なみだは當座たうざの形かたちの袖そで、程ほどなう忘わるゝを世よのならはし、夫婦ふうふよしみ殊更ことさらに御悔ごくみも浅あからず、萬事ばんじ棄すて、出家しゆがいの願ねがひ、身の取置とりおきを見出し、親類しんるい目前めいぜんの歎なげきに此道こゝろも思おもひとよまり給たまひぬ。百日ひゃくじつの立事たつじ

間なく精進事終りてから、人々の内證にてはじめに見増る美君を招き、長吉の御方へ遣はされけるに、
各々の心ざしをも背かず、此上臈を其まゝに置ながら兎角の私語もなく、不便や此人生ながらの若
後家なり。然れ共色はやめがたく、女はふつ／＼と飽て其後は小姓を置れける。これでも埒のあく事
にぞ。

身替りに立名も丸袖

加賀笠きたる姿や誰、金澤に若道盛の人あるが中に野崎専十郎、かくも生付く美兒世には有物かと、
女のそねむ風俗よわ／＼敷心根剛し、此沙汰物に慣れたる好色のいへり。惣じての女は、女の具はる
形氣よりしやんとしたるをよし、若衆の男らしく利なるは勿論なり、打見は豊に進まぬを上作物と
此道の本阿彌の極めし。扱は此専十郎折紙道具不破の萬作に入割まし、御物にもなるべき人を錦の袋
にも入れずして、目の利ぬ念者に見する事の口惜し。され共此子に第一の疵あり、常々命を散らぬ花
に風を厭はぬ氣色、戀の山さながら見え透きて、皆人恐れて其なりけりに十七の春を過しぬ。山吹の
あだに、藤のしぼめるを此君にたとへて歎きしに、人こそしらね谷の戸深く鶯の宿なりし竹島左膳と
いふ男と、年月の念頃世間に見とがめぬは尤なり。城下より四五里も遠山陰に在て、里々村々を勤む

る役人なり。此取結びしはじめは、其里の屋形ならびに専十郎賊たる人のましまし、梢の秋一入物さ
びしく哀なるを、月見る爲に漂行に、東の方によしなや峰の松黒み、宵の程は洩來る影を待兼、南は
さはりなく浮雲も心ありげに、晴天の思ふまゝなる詠め里、遠の礎の三つ拍子賤も打やとやさしく、
所がらの加賀絹も、蛭鈴虫の細聲、はや露霜にいたむかと、草の葉末の風をだに我袖によけて見るは
人はなき野菊も夜明なば道行人の目やとまらんと、世の有様迄心に含み、情は此美童にありぬべし。
其夜竹島左膳は里外れなる觀音堂を守りし法師と、常にも俳諧の友なれば、今宵の月いかに見給ふ、
發句も種つきて當座も脇聞かためと爰に來にけるに、庵主は戸を引たて、いかなる方へか行かれける、
灯の光幽に北の紙窓に移るに、内に覗けば歌林名所考など取ひろげて、今迄見られし跡なれや、膳
棚の端に升落しをしかけ置れしは、出家の身にも暴る鼠はうるさくや、國に盜人とはいへど鏡もおろ
さぬ入口、いづれ治まる時津風、消えかゝる灯挑の心とらせて懐硯に筆をそゝぎ、軒近き芭蕉のひ
ろ葉に書残せし、松に聲あつてあるじの行方を答へず、むなく見捨し寺前の月、罷り歸つて寢酒の
たのしみ、夢覺ての明の日は私宅にて一菜の齋まゐるべし。茂右衛門後家の跡の義いよく、勝手に相
濟、貴坊も御満足たるべし、種申請候朝貞、今朝よりして見事に咲初候、近日越前へのたよりに、墨流
し幅廣の鳥子三十枚御申遣し頼入候、一昨日は煮梅かだじけなく候、扱内々御物語り申候矢田二三郎



事若衆の心底にあらざ、子細は念友を迷惑がり、いまだ十七花なるに可惜前髪おろし、我ら方へさま
 さまの詫言をかしく、其通りにしてゆるし、夜前はいづれも打寄り大笑ひして明しけると、心に有事
 のみ取ませ、筆のとまりを定めずあらましに書置ぬ。折ふし爰に専十郎来て芭蕉に何事をか書れし、
 今宵の事なればゆか敷思はれ、立添て見しに詩歌にはあらずして心當とは違ひぬ。され共書納に衆道
 の事をかしくて、先立つ左膳が耳に入る程の聲して召連し小ものに、何と世の中の思ふまゝならぬと
 はかゝる事なるべし、執心を掛られ若衆の身としてそれをあだになす、戀をしらぬといふ物ぞかし、
 誠ある念者ならば命を惜むは無念なり、姿こそかくは隠けれ、情しる我を問人なし、神ぞ、此道に
 夜露は厭はじと菅笠ぬぎ給ふを、左膳見しより魂飛懸つて覺えず御手を颯むで、只今の御言葉に偽り
 なくば、是拜みます、人間壹人御助けの如來様と、前後辨へず歎くにぞ、つひ哀れに痛ましく、
 男振に好る所もありて、てんがうにとは云難く、立ながら二世ぞと詞をかため歸りければ、南請の里
 の屋に名月をしるもしほらし。鹽煮の芋に口欠の徳利、かをりは石流菊といへる山路酒、是を見懸け
 近付ならぬ無理所望して、盃中も宿迄を待かね、戀にせはしき兄弟契約、其後は身を左膳に任せ、夢
 にも面影を見し程になりぬ。おのづから若衆しとやかに形の花も見よげなれば、城下に隠なき此道を
 玩弄びぬる今村六之進といへる男、専十郎を思ひ初て數通を投入しに心強く取あへず、然れ共武士の

申懸しを此まゝにはやめがたく、程なく至極になつて左膳と念比を尋ね出し、念者に押て貰ふべしと心中定めし時、専十郎分別して六之進を打果すは思ひ設し事なれど、左膳跡にて堪忍なるまじ、とかくいとしき人の命永かれと思極め、ひそかに六之進屋形に尋行、此程の御心遣ひ外に聞にはあらず、しかじ申かはせし事慥ならね共、竹島左膳免れぬ難儀申かけ、口惜きひとつ、又は心ざし誠なき男、かれこれ退屈の折から願ふ所の御後立、左膳を人しれず、給はゞ我身は御方へ預け参らすといへば、六之進淺からず喜び、今夜の内にと進みける。然らば榎木原の在郷道いつとても四つの時分通ふなれば、辻堂の前にして夜の編笠を左膳がしるべに撃て給はれといへば、六之進請合ひ、其用意して野道に出しは、是非なき浮世ぞかし。専十郎私宅に歸り、行水の後色を作りて、丸袖の羽織編笠深く此事を隠し、左膳姿に成替り、申かはせし野路に出で、人を忍べる風情にさし足して、並木隠れに行を六之進待合せ、後より立懸つて打つけしに聲もせず、まして柄に手も懸けず、さりとは最後剛骸なかりき。止目もさしつれど心の急くまゝに、所を定め兼て先立退き、玉笹の茂みに入しに、たよりなき聲して、我はかくなり行ても左膳殿堅固なればと云に驚き、小者に忍び火を打たせ、二たび立添て見るにははしたり専十郎なり。しばらく此心底の程を感じて、又の世にも有まじき美道のかたまり、是ぞ懸塚のむかしを思ひ出、袖に玉を貫き男泣して甲斐なく、世上にしらねばとて長へて嬉しからずと、

命の限を極め、小者に思はくを念比に申ふくめ、専十郎が振袖に着替、頭は編笠に忍び、竹島左膳が里に行て、小者にあらけなく門をたゝかせ、注進の者と聲せはしく申すにぞ、左膳枕をあけて四五度も開濟して、其身を固め、末々の者を起し、素鎧の鞆はづし、物見より様子を吟味して、扱門を開けば、小者一腰をあらためぬさきに渡して、私は今村六之進奴僕万七と申候、主人六之進、野崎専十郎昨今衆道念比申かはし、さまざまの誓紙の上に心懸りは竹島左膳なり、是を謀にてうつべきこと内談の定り、役にも立つべき下人をすぐりて、大略を申渡さるゝ時、拙者は胸に能はざる貞つき、年月の恩をしらぬ賤奴とて諸人中にて蹴立られ、手打にせんと勇まれしうらにやう／＼かけぬけ、是に参るの上は命を御救ひ給はれ、いかに下人なればとて主命背くべきにあらず候へ共、武道に似合はざるたくみ、此方にも御侍なるに白晝名乗あひ、存念晴されんを見限り、却て此屋形へかけ込み、末を頼み奉ると申せば、左膳思案におとしかね、何事も夜明ての詮議、それ迄は其者汝等に預け置と立入るを呼かけ、近い證據には専十郎殿忍びて先に立ち、追付是へ御入あるはずと申せば、今は分別替りて我後れじと、下人数多つて木陰より道筋に出れば、小者が申ごとく、専十郎が面影に疑ひなく大振袖のしのび姿、悪やとばかり思ひ込み、物しらずめと一討に枯木が蔭に切伏、一たび兄ぶんの契約、天命免るべきかとさしとよめ、其後衛に出して見れば今村六之進なり。是はと驚き、最前の小者を引出

しことの子細を尋しに、段々始を語るにぞ泪を肌迄ひたし、專十郎が我身に替りし心の程、六之進が身を揺る心ざし、某長らへて益なしと死骸に腰懸て、今年廿八歳の秋の末、夜の紅葉を双に散し、墓なや朝は露となりぬ。前代ためしなき三人が思ひ入、世の取沙汰七十五日にもやまず、語るに涙、聞に哀れ、戀する人は云に及ばず、心なき野夫馬方迄も今に專十郎が最後の土はよけて通り、此道はしるぞかし。鐵の草鞋はきて諸國さがしても又は有まじきといへり。

待兼しは三年目の命

和歌の浦の久しきためし、いつの世の種二葉に榮えて、布引の松古今の色になほ行末の靜なる時津海、七月十日の夜に定りて毎年此所より龍燈の上る事うたがひなし。此夜は諸人遊び舟を仕立て新堀より乗浮れて、都まさりの女中御座幕の物見に面影移り、波に聲あつて小歌松に音して、琴三味線大盃も出水が酒呑掛て川下に行に、山の姿も妹背の中、蘆邊の思ひ葉分けて爰の百景詠めて餘りて、今日も入日の鳴戸浪風もなき人の心、蕙につけて疎穿撃、双物鞘に納まりししぞかし。時しも磯邊を見れば榎なし小舟に素人掉さしのべて、美童深編笠の内ゆかしきに川風吹上に立てり、菊井松三郎とて隠れなき情人、兄分のかためも深き瀬川卯兵衛と少時も離るゝ事のなかりしに、今日に限り其身ばかり、殊

更人を忍ぶ氣色、不斷の子細を知る人は見るに不思議の晴がたし。それより玉津島の入江に浮れ寄に、若衆七八人の花舟外とは替り謠鼓の音もなくて、それ／＼に念比らしき男二人づゝ片寄て、耳近く小語風情、あるひは添寝、又は一畫付の筆慰み、扱は扇引するもあり、思ひ合ての戀舟是より浦山敷はなし。其中に美兒一人はなれ物にて舳櫓に上り、柿地の團扇を手ふれてそれに書付し詩を幾度か吟じ、後には語んずる程になりぬ。松三郎小舟さし寄せ忍びて聞きしに、花質紅顔無筆口一夙縁。處契一同床、只看夜々多層夢、二六時中曾不忘、我も此詩は忘れず、兄弟契約深き卯兵衛殿に先月の十七日の夜、いつよりは首尾よく逢ての別れに即座にあそばし、手水手拭に書残されし、其人と我より外に此詩の洩べきにあらず。殊に若衆の手に渡り深く感心の有さま、是只事にあらずと俄に赤面して、藁所舟なる小者に其若衆の御名を尋ねけるに、岩橋虎吉殿と其屋形迄こまかに語るを聞届け、紀三井寺の入相つく比屋敷に歸り、すぐに卯兵衛方へ尋ねけるに、機嫌よろしからぬは同船いたさぬゆゑかと、是非もなき暇入の段々斷り申すを更に聞入ず、御自分侍にてはあらず、其子細は申しかはせし情の餘りに此身の事を御一作、又もなく嬉しかりしに御心多くて、外なる方へも其詩をつかはされしや、しかじ我らより疾に其君に奉られしもしらずと、皆まで語りもあへず口惜きと泪に沈み、其後は命も危かりしを、いかにも一通り聞届けしと、松三郎に魂をおとし付させ、さりとは若年の至りな

り、惣じて詩歌はかならず等類も有物ぞかし、李太白が古郷の妻を思ひやりての詩に、吳州如看月千里互相思と作れば、杜子美も又今宵武州月、關中唯獨看と心は同じ、土人もかくは通へる事もあり、和朝の人も、月見ばとちぎりに出し古郷の人もや今宵袖ぬらすらんとはよめり、其詩はいか成若衆の吟じ給ふぞと心靜に尋ねける。松三郎聞もあへず、其先の御方様は我ら申までもなし、御合點なるべし、思し召あはされよといへば、卯兵衛分別に能はず、兎角は其人を知せ給へといふ。よそく敷御風情、彌心外にぞんずるなり、岩崎虎吉といへる美しき御若衆様に遣されけるといひけるに、卯兵衛大笑ひして、いまだ知らずや、その虎吉は我らが姉の子なるはと、さつと機嫌を直して、よしなき事を疑ひ、今更恥かしやなどいへば、深く思ふからなりと、なほ意氣智を磨きあひて親みけるを、人もやさしく見ゆるしけるに、世には又戀しらずあり、横山清藏といひし男松三郎を執心かけ、卯兵衛近付なるに無理所望の狀を付けるこそうたてけれ。卯兵衛身にしては迷惑是に極れり、此邊千歳と思ふ松三郎事思ひも寄ずとの返事、いひ懸て引れぬ所、清藏身拵へして卯兵衛屋形に行て討果すべき願ひ申せば、思ひまうけし心底をあらはし、時節延べてはせんなし、今宵和歌の松原に出合ひ、死田の同道貳人と刻限をいひ合せて門外に出しが、清藏立還りて申しけるは、我しだらう、此事を思ふに、松三郎今年は十六歳、衆道の花とは今から未々なり、いかにしても其方が詠め棄て行事本意なかるべし、今



三年待なば前髪もおろし、其時は世に心懸りもあるまじ、三年が間は是を待つべし、武士のたがひに申合せし言葉かならず反古にはなさじ、三年過ての今月今日此胸晴すべしと申せば卯兵衛満足し、其時は何か浮世の思ひ出、かく申せし心根いさぎよく太刀先にて埒明むといへば、かた／＼約束して清藏は私宅に歸りぬ。此事外には知る人もなかりき。松三郎にも深く秘して常の念比替る事なし。其後は卯兵衛清藏ふしぎの縁となりて、朝暮語りて日敷をふり、たゞいつとなく三年も立つ事やすし。卯兵衛松三郎が元服申せば、今一年の春にも逢ふ事といふを、是非に勧めて男になし、首尾此時と喜び、十月廿七日にあたりて、過にし年申かはせし月日なりと、早天より兩人共に野寺に行つてつらく最後物語、庵主をはじめ下人共かゝる事ぞとは夢にもしらず、現といへば幻の世や、今ぞと思ふ時卯兵衛挾箱を明させ位牌を二ツ取出し、兼て二人が俗名月日まで彫付け、互にとりかはし香花を手向け、しばしが程は物をもいはず、心底を感じあひ、袖は折ふしの時雨して、偽りのなき佛の利劍をぬき持、卯兵衛は廿三、清藏は廿四、惜や花散月曇り、跡に残りし松三郎は心の闇に迷ひ、其夜半に聞付、御寺にかけ入、今年十九、出家になりて貳人を吊ひ給へと皆々勧めても聞入らず、同じ枯野の霜とは消えぬ。扱も弓馬の家にそなはりし人は御代に名譽を残し、かゝる命のすて所、こまかに書留めて世語と思ふに、情あまり義理ふかく、哀先立ち心沈み、爰にて筆捨の松は残りし。

詠めつゞけし老木の花の比

御痔の薬あり萬によし、板切に書付、壹間店に明障子、簾をかけて大橋流の賣手本、老筆なれば好人稀に世渡る便には成がたし。幽かに住なせる所は谷中の門筋に、軒端は松ねちけて凌霄花花のやさしげに咲亂れ、庭に夏菊作りなして井の水清げに、比釣瓶の立木に宿鳥のをかしく、尾羽を枯せし浪人者、若い時より奉公の望み絶えて、貯し諸道具を賣喰に一日を暮しける。朝夕の友としては同年の比なる老人、碁の相手となり、其外には斑毛狎一疋もてあそび、かりにも問來る人もなし。一日しきりに帷子の袖をひたし、風の扇も手のたゆく、暮を急ぎて行水しけるに、獨りの親仁身の汗を流しけるを、友とせし年寄後姿を見て、かくもなる物かと脊骨の節くれ立しを撫をろし、腰より下の皺を悲しみ、泪にしづみ、高歌一曲掩明鏡。昨日少年今日白頭と作りしも、此身のかはるに思ひくらべて悲し、過にしやささんさぶしを誦はせて調誦し事もと手に手を取かはし、湯の水になるまでなげくを、よき後生友達と思はれしに、子細を聞ば此人々の生國は筑前、城下にありしむかしは玉島主水とて美形に飛鳥落て、傳多小女臈かと思し人疑ふ程なり。又の獨は豊田半右衛門とて武藝おろかならぬ人なりしが、主水に沈く惱めば、又半右衛門心ざしに思ひ付、十六十九の年より若道の語らひ深く、互に海

の中道深く思ひを重ねし中に、外より主水を執心、此事やむにあらず、籠山の火櫻焼つくる人あまたありて、兩方共に申しかはし、關を幸の橋に出、首尾よく相手を助太刀残らず打すまし、其夜忍びて木の丸の關を越て、身のうき濱より舟に取乗、世間を憚る身となり今爰に隠れぬ。今年主水は六十三、判右衛門六十六まで昔に替らぬ心づかひ。貳人共に一生女の顔をも見ず、此年迄世を過しは是總道見人を好る鑑ならむ。今もまだ主水を若年の如く思ひつゞけて、黒き筋なき薄髪に花の露をそゞぎ、巻立に結なすもをかし。氣を留て見しに此人は角を入たるよしもなく、生付の丸額まるひん是ぞかし。不斷も以前を忘れずして、壺打の楊枝手ふれて齒を磨くなど、鬘ひびをぬき捨すて、しらぬ人の見てはかゝる分わけとはよもや思ふまじ。されば大名の御情の深き御物上り、妻子のある後迄も何となく若道の時を忘れさせ給はぬこそいと殊勝なれ。是を思ふに女道とは格別なる色あり。女は假なるもの、若衆の美艶みえんは此道に到らずして辨へがたし。さりとはうたてき女の風俗と、世に住ながら東隣とは火の取かはしもせず、人心とて自然の夫婦いさかひに鍋釜なべかまわるにも、おのれらの損よと爰に出合であひ亭思ひもよらば、壁越かきこに力を添そ、亭主たゞさころして小章腹おけと齒切はしきりをするもおかし。折ふしは彌生山上野の櫻大を招き、池田伊丹鴻之池いひだにのいけより諸白もろしろも此時賣切うりきりべし。天も酔り地にねだりくさき足音、内より男女ぞ聞わけ、男の時ほもしもや若衆かと走出いしり詠め、女の時は戸口をさしこめ、十日比の心になりてしづまりぬ。春も時



雨の定めなや、俄に降りくれば、萎の花もちりくりに、けふの名残を惜まれしに、女中一郡立噪ぎ、彼牢人の軒陰を便に、かゝる所に近付もがな、せんじ茶涌させて晩方まで遊びて傘を借て、様子によつて夕飯も振舞は喰て歸るべきに、此所らに心當なきとて、いき過ぎたる女、戸を少し明て内を覗ける面影を見しより、手元なる竹箒を提出、むさし、きたなし、立退けとあらけなく追立て、其跡に乾砂を踏て四五度も地を改め、鹽水を打ち清めし、是程女嫌ひ江戸廣しと申せ共又見た事もなし。

色噪ぎは遊び寺の迷惑

化競とや月の夜の雨、花盛の風、是は又見るべき春秋もある世のためしなり。人の身の義理死程つれなき物はなかりき。しれぬ後の世の事は覺束なし、長生のたのしみ、蓬が島の甘ひ物を喰て、年月暮すは何か心の罪なし。尾州熱田の宮の宿はづれに三途川の姥、木像にして立給ふが、此所往來の人しげきに、死出の旅人ならねば此姥の削事もならず、一日も浮世に住む徳ぞかし。爰に墓なき人の身の程、朝貞の種若衆の花盛に生じけるかとうたがはれし。當社西の御門に神役の家高き大中井兵部太夫一子に大藏といへるあり。同じ神職に高岡川林太夫と申せし人の子に外記とて、今年十八の角前髪、いまだ美童たゞなかなるに、其身は早念者に替り、大藏と申しかはし、二年餘りの心底、八劔に命を

懸て替紙互に偽りなく、明暮身に影の添如くしはしも獨りは見えす。或時木隠の遊び寺に若衆友達あまた集り、住寺の留守をうれ敷、けふこそしたい事して噪げとて俄に諷出して、小鷹和泉が輕業籠ぬけ、鉦鏡鉢を打鳴も、本堂客殿轟かし、佛も動き出させ給ひ、後光臺座を踏わられ、蠟燭立の鶴龜も千代萬代といはさず細かに碎かれ、作り庭をあらし、早鐘に近所を驚かし、其後は狂言替て非人物語三番續をはじめ、石塔の陰より手負のまね、興に乗じて身を忘れ、外記木刀を捨てまことの脇指拔持ち、目を塞ぎ轉懸るを大藏走寄て、是は何とあそばしたと取つく所を覺えず撃ちける程に、大藏が首ころりと落て、歎くに効はなかりき。いづれも泪に暮て前後忘じ、しばらく言葉をかくる人もなし。され共外記は胸を据え、少しもながらへてせんなし、大藏只今まるぞと死骸に寄添、切腹するを大勢取つき、時節を延しけるこそうたてけれ。折ふし長老歸り給ひ子細を聞届て、其方命にあらねば此段大藏親達にも因果語り、思ひを晴させ、自分の親にも浮世の暇を乞てすみやかに相果、名を末の世に残し給へと其理をつくして諫めければ、いかに我身ながら命はあづかり物、此上げ御僧次第に最後を待間も口惜と諸袖をしたしける。此心ざし哀れに物かなしく、其座に有し美兒いづれか命を惜むはなし。親類の末々まで此寺に來り、大藏がなりゆく有様に涙をつらぬき、寺前の松柏も枯ぬべし、兵部は我子の事は外になして外記が命の程をかなしみ、住寺を頼み、大藏がかはりにわたくしが子に



なして名跡つがせたき願ひ、いろ／＼申しあげしに、御僉議の後、御ゆるさるゝ事かたくて、切腹いたさせよとの仰に任せ、其段申渡しけるに、かく有べしと思ひ極めし身なれば今更心にかゝる事もなく、其用意をしておの／＼に申けるは、大藏相果し所なれば此寺にして最後とぞんずるなれ共、それがし願ひに任せ年比頼めし淨蓮寺にてと申しけるにぞ、心まかせに伴行き、大乗物の戸さし兩方ともに打明て、白装束に無紋の淺黄袴をゆたかに、大前髪を結せたる風情の、今日殊に麗はしく、見おくる人魂はなく、さらば／＼といふ聲も遠ざかり、道すがら硯紙に筆を常より動かせて、大藏親たちへ面目もなき言の葉かへす／＼も書残し、程なく御寺になれば心靜に臨終の一大事をさづかり、敷疊の上に座して皆々に禮義を相のべ、小脇指を取直し今ぞと見えし所へ、十四五なる美女の白き練被せしが外記に取つき、自も跡には残らじと思ひ極めし有様、外記はかつて覺えなくて、此首尾さしあつての迷惑、いかなる事ぞととがめ捨、次第を聞きしに、外記親林太夫涙を押へ、其方努々しる事にはあらず、此息女は塚原清左衛門といひし浪人衆の娘、我等共すこしのがれぬ中なれ共、連添汝が母と不合なるによつて年久しく忍びて往來をもせしなり、いかにしてもおとなしき所を幾度か見届しによつて、是非に我娘に約束し、來年の春の比は女房が手前をも申なため、目出度よび入て其方が妻にせんと思ひし事もあだになり、定めなき世の悲しやと、此斷りを聞人又あらためて涙となり、ためしなき女心、

是を命はとられじと聲／＼に惜むにぞ、大藏が親兵部太夫一命に掛て重ねて御訴訟申あげ、願ひのまま命を乞請け、外記を我子になし、則ちかの娘を貰ひて祝言の事共取急ぎ、其家をゆづり親子かたらひをなしける。

男色大鑑

本朝若風俗 第五卷

目録

涙の種は紙見世

芝居子銀壹枚になる事

都人も櫻に狼藉の事

花崎初太夫出家する事

二

命乞は三津寺の八幡

平井静馬家の外の情の事

銀ためし親仁始めて芝居見る事

堺の娘逢ての戀を捨つる事

男色大鑑 卷五

三

思ひの焼付は火打石賣

玉川千之丞内證帳の事

嵐を凌ぐ手づから爛網の事

都に新懸塚を築く事

四

江戸から尋て俄坊主

道なしの笹の庵に住事

玉川主膳心を汲む内井戸の事

里の女は姿に迷ふ事

五

面影は乗掛の繪馬

霜先の狼懸に命取る事

玉村吉彌隠もなき情知の事

前髪のなきも世の仕合になる事

泪の種は紙見世

今の京には何が時花といへば、始末して銀を溜る事ぞと語る。それは常なり、大歌舞伎御法度の後、村山又兵衛が物まね狂言づくしに仕掛、太夫子あまた集めしに、其頃迄は都にも舞臺子の遊びは稀に、花代も一歩づゝになべて極め、今の世の飛子同前に客を勤めぬ。誰かははじめし、太夫成とて惣役者を東山にして座振舞の後銀五兩になしぬ。萬心やすき世や、草履取にもこまがね貳匁とらし、茶屋へは銀貳兩ほどの集積なれば、芝居の果より夜の明る迄我物にして騒ぎぬ。其時の子供はまことの子もにて、戀を重ねてあへ共御無心云事もなく、玩具とて飛人形又は染分の手拭、砂砂、やうく四五分が物をとらすに嬉がりしに、一年妙心寺開山國師三百五十忌の時、諸國諸山の禪僧京着して、御法事の後色河原を見物しけるに、田舎には見馴れぬ兒人に思ひこがれ、萬事をやめて買出す程に前髪の有りて目鼻さへつけば一日も隙なく、是より晝夜に賣分け、花代も舞臺踏は銀壹枚に定めぬ。此法師等限ある都遊び萬の物入を構はず、今の世の嘆人の氣の毒とぞなれる。其頃村山座の花盛り藤村初太夫すぐれて何恰しく、時勢料を舞事を得たり、見し人是に惱まざるはなかりき。ある日東山の櫻に行て、盛に近き鹽籠の一枝を初太夫持て歸り、見ぬ人の爲にもと、やさしき心ざし深し。神樂岡の邊りに色



作りたる男集りて、壺からの酒事と見えて幕を疊ませ、夕日に映りて紅したる貝をあらはに人の見ることも構はず、提軍の深きにて酒肴かはし、喧嘩を肴にして有りしが、初太夫かざせし櫻を見かけ、情しらずの男達近く寄て、其花を給はれ、けふのつまり肴に酔味嗜で食べるといふ。それ花に嵐をだに人間の手にして折歸るをさへ心なきに、ましてや苛き言葉の末、さら／＼花は惜からねど、所望の仕掛氣に入らねば、進じ申すまじきといひ捨て通りしに、此分にては男たゞすと、是非にもぎ取らむといふ。遣れば初太夫も若衆すたり、一代の身の大事愛なり。京にもかゝる横に車と牛引留め、駕籠を立て、往來の人更にまた山をなして此濟口を見るは危かりし。金剛の火神鳴の久蔵も之命はすてけれ共、太夫を思へば無念ながら胸をおさへ、相識の人あらば預け置て大勢相手思ふ折ふし、物やはらかに美しげなる男の、下には紫縮緬の引かへし、上に黒羽二重の両面芥子人形の加賀紋、宗傳から茶の疊帯、二つさご珠の色よく、ぬき鮫の大鰐差、素足に薬草履はきて、跡より髭なし奴にかへ雪踏、櫻の木角杖持せて静に有りしが、此様子を聞きて、爰は某が扱ふべし、お若衆へ貰ひ懸られし花、後は何にならふとも遣はされたがよいとさま／＼申せば、初太夫少しせき心なれ共、此詞を背かず、あたら櫻を渡しける。あば丸男酔味嗜の櫻と持て行を風流男袖を引とめ、其櫻すぐに此方へもらかし給へといふ。只今の事未だぬくもりも覺ぬに無理なる申事と、少し氣色をなる程騒がず、今の都にかや

うの無理がはやる、おのれ其櫻を首にかゆるかといへば、恐れて渡しぬ。はじめと違ひ見苦しかりき。櫻は初太夫へ還して彼男捉へ、申分あれ共、酔たる風情も見えつれば、重ねての日酒機嫌になき時、我を尋ねて此意趣を晴せよと、懐より石筆取出し所書たしかに、いろはの十郎右衛門と名まで記して渡しぬ。去りては落つきたる仕方なりと、見とめし諸人之を譽ざるはなし。假初の事ながら初太夫身にして嬉さ忘れず、其夜より客の勤めも棄て、十郎右衛門宿は東洞院迄忍びて、もしも最後の男達共切込まば我先に立て身を捨て、人に難儀は掛じと思ひ定めし心ざし、自然と十郎右衛門に通じてなほ見捨てざり。彼馬鹿者も其後はとがむる事なし。今は心もゆりて、是より衆道の縁となりて互に思ひを盡し、二年あまりの契りの中に人のなるまじき調書、かず／＼の契約、外なる色狂ひをやめて初太夫に氣を運び、一門の嫉妬深く身の置所も定めかね、纏付なれば、一通りの恨みを書宛して行方も知れずなりにき。初太夫是を嘆き、色々神を禱り尋ねけれ共、御行衛の知れざれば思ひ煩ひ、中々舞臺身に染まずして引籠て有しが、後は美形も變りぬ。此理を親方に申わけて首尾よく隙をもらひて、難波のうち町に住所をもとめければ、次第に氣分もよろしくなりて、世間向の見世つきとて、紙を商賣させて其年はおくりぬ。その身出家にもならず、河原の勤めをもやめけるは、いかなる思ひ入ぞと昔よしみの有る役者尋ねけるに、わが黒髪は何ゆゑに惜かるべき、世に思ひ人ましくて、もしも此

姿を見たくも思召さば、見せましてからの上に紙をも斷箱むと思ふ効なく、今迄は待ぬれ共、人に聞
れて口惜やと、其座にして、響を拂ひ、惜や十九、出家の望み、それより高野山に隠れて都の人の間
ふにもあはず、朝は谷より水を掬ひあげ、ゆふべは落葉を集めて行ひすましけるが、一歳餘過て焦れ
し人は丹後國天の橋立といふ所に行暮て、哀れは松より外にしらぬ島崎にて、はかなくなりし身の事、
はるかに過ぎて聞しより、其所に尋ね下りて一七日の吊ひなして、其後その身は愛世を捨て、二度人
にも逢はざりき。

命乞は三津寺の八幡

是はいかになりぬる世の姿、難波のむかし、太夫藏人お國が女歌舞伎も絶て若衆をあまた抱へ、是で
世界の花踊、鹽屋九郎右衛門座に見し岩井歌之介平井静馬など申せしは、末代にも有まじき美兒なり。
此外四十五人舞子ありしが、いづれかいや形氣なるはひとりもなかりき。其比までは晝の藝して夜の
勤めといふ事もなく、招けばたよりて酒事にて暮し、執心かくれば世間むきの若道の如く、其人に念
比すれ共誰尤むる事もなし。太夫元にも欲をしらず、物にもならぬ客をうか／＼もてなし、其年の暮
に丹後國壹本に、塗樽に入し酒三升、盆前になれば三輪素麩十把もらひて、是にも禮狀を遣はしける。

また子供に始めて近附になるも、芝居歸りを濱の水茶屋の口鼻に呼込せ、かりそめの盃して、薛の有
子には小歌所留して思ふまゝの遊興、其後あそび中間より算て銀壹兩贈れば、釣髭のある男が太夫殿
より禮にきて、只今は千萬かたじけなき仕合と、三指突て長口上申したりけりと大笑ひして暮せしに、
今時の金剛に貳角づゝ取らしても、さのみうれしがる貞つきをもせず、少し露うつ間が遅ければ、長
き秋の夜を四つまへから呼立、明日の舞臺献るなどいふ、戀の最中に氣の毒聞く事ぞかし。兼角は今
の世間に野ら犬の子と金銀の澤山なる故に、萬事奢りて物をつかひ侍る。それ迄は舞臺衣裳も唐木綿
に更紗の置形、地衣裳は加賀絹に中紅の裏をつけ、淺草島にむらさき付れば見る人おどろき、此上又
も有まじきと沙汰する程の事なりしに、近年の唐織金入毛類を着る事、いかに役者なればとて身上知
らぬぞかし、大分の金銀取ながら、つまる所は借錢の淵とは此堀のならひなり。給分のやすきむかし
は藝者も世を暮しかぬると云事なし、其時は面白からず、物毎をかしきは今なり。され共欲なしに子
供の本情は、平井しづまなど末の世語にもすべし。ある時堺の大道筋に長崎商して家榮えたる人
の有しが、此主人時代男にて七十餘歳迄風をも引かず薬も飲まず、屋賃銀の利の算用ばかりして、生
れて以來色なる町をも見ず、庭はたらきの下女も姿に構はず、布さへ織ば壹匁でもやすきを好み、戀
などする事思ひもよらず、門より外に出ず、世間向のかけたる男、はじめて芝居を見られしに人も不

思議を立にける。然も其日雨降て見物は立喋げ共、此親仁一人少しも驚かず、三番目の櫻川の狂言に
しづまが出るや、是を見ずには歸らじと、聲のつゞく程は東西々々いふて、袖は濡ながら櫻川果る
迄見とめて、樂屋口にまはりて歸りを待に、軒の玉だれも袂によけず、さしかけ傘下行御風情、是は
今の世の人ごろし、墓の寺の前迄跡より付添て、いはで物思ふ有様を見しよりしづま心に掛け、親仁
殿はこの有所衆と問へど答へず、戀といふ事いつの時に誰か爲初てかゝる物うき事ぞと獨言いふ。
しづま鼻紙の間より定札六七枚もつゞきしを取出し、又近き程に見物し給へといへば、此親仁嬉さ餘
りて、兼て思ひし御執心の一言いひも出さず、たゞに過ぬ。暮やすき冬日の虹うつろひて太左衛門橋
を渡れば、川風心もなく吹てしはは爰に立すくみしが、君も太夫本へ入せ給へば所爲かたなくて、
其邊の茶屋に便りて其とはしらせず、雨の晴間待とばかりに、鹽屋の内を見入て物案じの良げせ、亭
主見とがめて尋ねけるに、語らねばならぬ首尾になりて、しづまに思ひ入て命せまる身の程を申せば、
あるじ聞に哀深く、此事しづまに耳語しに、はや情かけて、我を思ふ其人いかに老いたる身なればと
て、それ見捨がたしと俄に衣裳好みして、肌にも暮といへる名香を焼しめ、彼茶屋に行てみるに、鬢
は黒き筋なき男の蒲島の着物に、梅かへしの袷羽織に胸高に紐付て、割胡桃のはなち目貫の小脇指に、
むかし印籠になめし草の巾着に胸引の根付を下げ、此いやなる風俗、そもや若衆に心を寄る事思はく

外なり。二間ある座敷の奥に通りて、此親仁近う呼びて、亭主の挨拶迄もなし、こなた様には私に御
執心のよし、最前芝居を歸る折からより見請、心懸り有しに縁はをかしやと、盃事して酔を戀の種と
して身に添臥を仕かけ、嬉しがる事共に氣を盡しけるに、此親仁かたじけなともいはずして、口の
中にて念佛を唱へて居る。しづまが上手に問はれて此男語りけるは、扱も／＼やさしき御心入忘れが
たし。其方様に思ひ入しは私の一人ある作子なり、はや此程は御身の事ばかり申し暮し、命も迫るを
不便に、子思ふ親の身にてかく申すを、とても御情にしばしが程まみへて給はれと申せば、しづま
なほ哀まさりて、今となつて否とは申さじ、我身は預置と申せば、親仁喜び、然らば今宵更てからは
へ伴ひ申すべし、かまへて／＼沙汰なしに頼むなり、長町の借屋敷迄連來てあるよしを申して歸る。
しづまは待詫しく袖を枕に夢見かゝる時、病人乗物しづかに昇入ける。此足音にしづま目覺て見し、
十四五なる美女の肌小袖白く、中に薄花の櫻色なるに、淺黄鹿子の両面に切付の色紙歌模様の紋所
帯は二重菱の柿地をつひ引廻し結びもせず、髪はさばきながら中程より下を引裂紙にて結び、此美し
さ皆いふ迄もなし。人を恥らはずひた／＼と寄て、思ひ嬉しやと聲をあげて、少し笑ふて良見合せし
は、ぞつとして浮世の人共思はれず、しばらく物をもいはずありしが、靜馬驚き、我は衆道の約束せ
しに是れは思ひよらず、人のいふべき事も悲しく物思ふこそ誠なれ。今時の若衆ならば後家にても只



は通さじ、しづまとやかく分別して、身を立る理り強顔申さば、あの上にもまたもや病氣もと思ひ、心に染まぬ亂れ姿となり、我事今よりまかせたる身なれば、御心よくならせ給ひてから、いつにても又の世懸けてたがひに忘れじと、假初ながら淺からぬ詞かはして別れしに、露より脆き命、其夜明て惜きは十六、眠れるごとく世を去りける。生死はのがれぬ事なれど一しほ哀さもまさりぬ。七日たちて後此娘の母親、せめては焦れ果たる其若衆を見て憂を舞すべしと、大阪にたづねて形見の品々しづまに渡せば、更にまた涙に沈み、それよりうか／＼となりて、思はざる事に人の取けるよと、我も佛神に祈りて命乞しけるに、世のためし、世の不思議、ある日三津寺に参りて下向に、静馬は常の着物なりしに、白衣の袖薄く面影たよりなしと見し人取沙汰して、いかなる事、もしも亂氣なるかといふ、其暮方に難波の夢とはなりぬ。いまだ春待つ雪の梅あたら雷を散して、月やむかしの物語とはなりぬ。

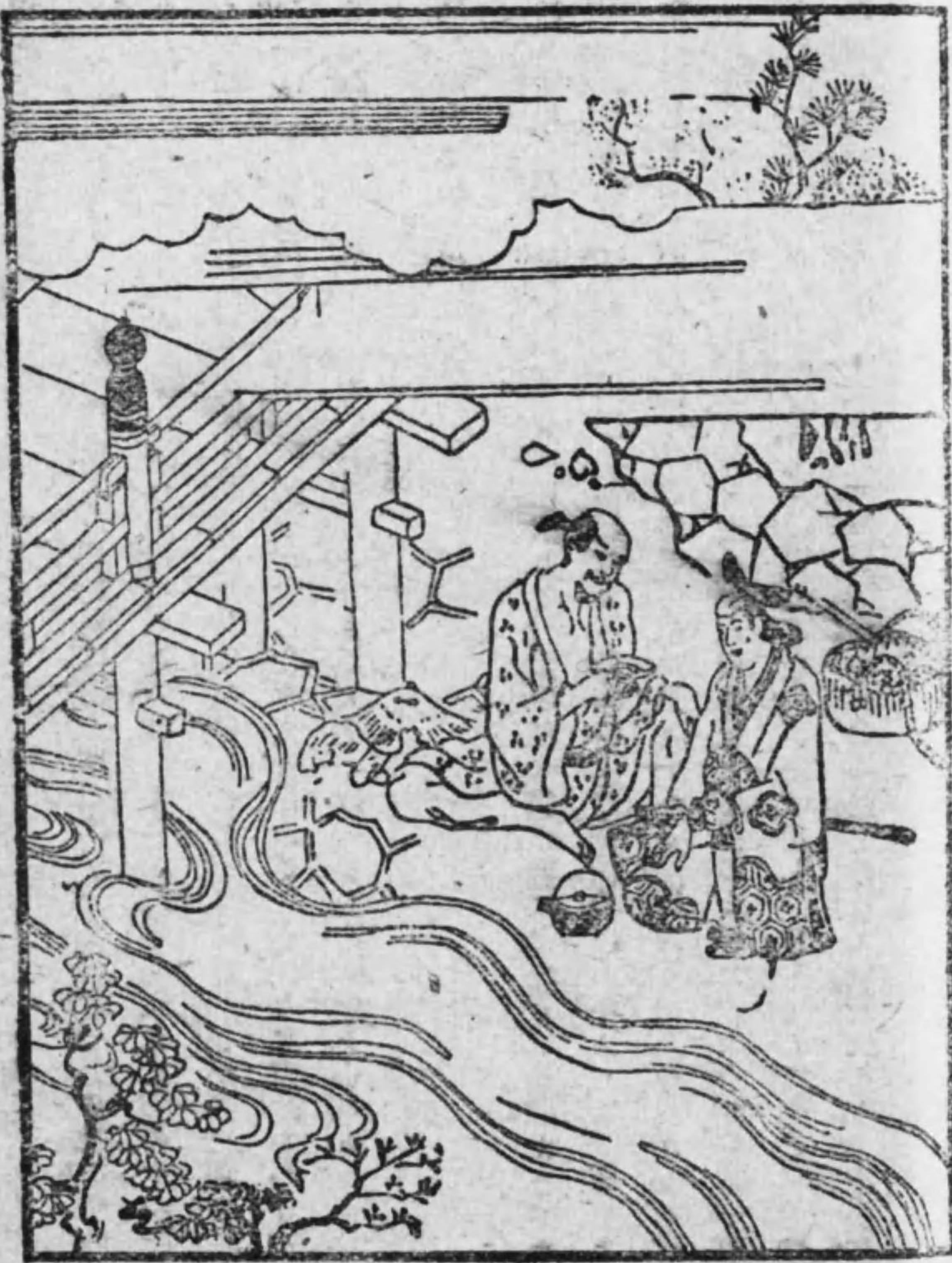
思ひの焼付は火打石

七玉川の外に小歌の名所に千之丞がむかし、風吹けば興津しら聲にてうたひ出して、家體の御簾を明ての面影、まことの女井筒も何として是には立ならぶべし。十四の春よりも都の舞臺を踏初め、四十二の大厄まで振袖をきて一日も見物に飽かれぬ事、末の世の若女形是にあやかるべし。河内通ひの狂

言ばかり三年が間江戸の人を離かせ、なほほめ草野郎虫にも此身の事あだには書ず、承應元年秋の夜の曇影を失ひ、物の淋しき折ふし、ある御所方の南おもてに、宵の程は篋を吹かせられけるが、更て御慰かはりぬ。其比長崎より一平次といへる男来て四竹と云事を初て、手拍子犬うつ童子迄世に是を時花かし、貴人の御手にふれらるゝ物にはあらず、鳴習しづめてひとりの仰せられけるは、川原の野郎若衆聞きしばかりにて見ぬ事ぞかし、せめては其姿ありのまゝ寫せよと、浮世繪の名人花田内匠といへる者美筆を盡しける。かりの事ながら太夫子共我を争ひ、繪師に伽羅をとらし、又は差古びし小柄、着なれし羽織をとらせば、是に目の見えぬ世の中、花に風月に村雲の障をのけて、思ふ人の銚鼻をなほし、思はぬ人の出額をも見よげに書けばいづれか悪からず、千之丞はしれて形自慢なれば、身上頼むべき事にもあらねば、中には此人其様いやすく、腰などを舐めて齧けり。是を思ふに唐國の王昭君が書師に賄賂せざりしに同じ。其後品定めの時、玉川末に撰出されて是には狂歌をあそばす、かたもなく可惜名を埋むこそ惜しけれ。其秋のはじめより京都に筋骨をいためる時花病、千之丞疾更に憤みて自然と腰付ふつゝかに、思ひもよらぬ出尻となる事、最前の筆繪を思ひ合せてをかし。されども此人萬能に極まれればこそ、夜の勤めをかゝず、客は前後を争ひ、十日も前より御來駕を待事なり、俄には盃も及びがたし。すこし酔ての座配、紅葉の浅き腰見しに戀をもとめて、高尾南禅寺東福寺

に限らず、諸山のうき坊主代々の筆の物を愛拂ひ、又は山林竹木迄を撰絶し、皆此君の御爲となし、後はひらきて傘に身をかくしぬ。或は商人の手代其親方をだしぬき、限もなく金銀をつひやし、假なる御情に家を喪ふ人其數を知らず。有時千之丞内證の文庫を開けし事有て見るに、假綴にして手日記此止書に初枕とする等り。いかさまにもをかしく思はれて見るに、あのごとく元日より其年の暮迄參會せし人の首尾をあらまし讀に、たけき武士のつきあひ、鬼の様なる伊達を和げ、百姓に逢へば土氣をおとさせ、神主には厚氣をおろさせ、長老に袴を着せ、一座切に興をあらせ、客を自由に手に入れ、我なぐさみになせり。奥程ゆかしきを其まゝに讀捨ぬ。是迄心のつく事何かあしかるべし、執心掛し末々の者には人知れぬ情深く、數重りて世に顯るゝを厭はず、瀬々の敷浪名の立やむ事なし。風のはげしき夕ぐれ、然も雪日和にして、はや北山は松の葉白く見わたし、物の噪しき道橋の下、五條の川原を、夜の風所として渡世夢のやうに極て、まことに石火の光り、朝に鞍馬川の火打石を拾ひ、洛中賣廻りて残れば夕に捨て、其日暮しの思ひ出、是を都の今賢人といへり。此身も美道にやめがたく、玉川心淵集とて全部四巻に千之丞四季の身持を作れり。衆道の心掛ある人は、死るべき書物なり。身に灸の數、蚤の喰所迄する事のかし。此人のわかしを聞けば尾州に隠もなき風流男なり、千之丞太夫なりの時分より深く申かはして逢ひぬ。身を懸し給ひて久しく御行方の知れざる事を歎きしに、

有^レ人傳へて五條の河原に淺ましき形にてましますと語れば、太夫泪ぐみて、人の行末程定めがたき物はなし、とくにも知らせ給はらば、都の中にて人に指はさすまじ、知らねば何事も是非なき世なり、つひ此處に在せし事は思ひも寄らず、御國方へは便の文して幾度か訪ひまのらせしに、返事^{かへりごと}のなきは我を見限り給ふかと、まゝならぬ身を恨みて過にし事ぞ、惣じて勤ける中には是に限らずかゝる事ありまたあり、それからそれ迄とつれなく申して、其夜のお客を大事に機嫌とりて、床もしめやかに、思ひを殘さぬほどに起別れて、明ぼの霜夜身に徹へて、嵐もはげしき河原を思ひやりて、袂に盃を入れ、燗鍋を提て人をもつれず、岸根の小石を踏越て水鳥の浪の瀬枕を騒がし、はるかたる橋の下に行て、尾張の三木様とむかしの名を呼べ共知れず。頃は霜月廿四日の曙前、いまだ人貝も見えわかず、淺ま敷寝姿のあまたあれば、いづれか其人様と尋ねけるに、過にし事を思ひ出しに、左の鬘先に切疵ありしと、ひとりくの野原の身をさぐりて見しに、案のごとくさがして、最前より膝を針しに名乗せ給はぬはさりとは深く恨み參らすと、泪又川かと思はれ、しばし述にし事を語りて、手つがら臨りし酒に明方の風を凌ぎ、東の空も白みて御有様を見るに、風俗の残りし所は一つもなし。かくも又替る物ぞと御足を摩れば、離より紅亂してなほ傷ましきを、ひとつひとついたはりて流臥して有りしが、旅立人も橋跡ならし、芝居の太鼓打つ程近づければ、忍ぶ身の悲しさは、別れけふの夕暮をまたせ給へ、



御むかひにといふ跡を跡なくなりぬ。此世捨人は是を更に嬉くは思はず、よしなき人の尋來て我樂みの妨害なりとうたて、爰をも亦去りて何國へか行給へり。其後千之丞此事を嘆きて都の中を尋ねしに其甲斐もなく、残れる火打石を取集て東山新熊野の片陰に運ばせて、枯葉の小笹が奥に塚を築き、其御方の定紋なれば、しるしに桐の一木を植置き、世になき人を吊ふごとく邊りに草庵をむすび、日蓮の口まねをせられし法師を居ゑて爰を守らせける。ある人名づけて是を新塚といへり。

江戸から尋ねて俄坊主

佛法僧の鳥は高野松の尾、河内の國高貴寺に限りて、夏中然も眞の闇に鳴なり。此譯たまさかに聞人心を清まし、殊勝さも爰弘法大師の開基の靈地なり。此山つゞき御法のはし年ふりて、玉手といふ里に念佛の老和尚ましまし、あまたの御弟子のある中に可見といへる美僧あり、人のむかしを尋ねけるに江戸の芝居太夫玉村主膳と一枚看板に名を廣め、人の命をとる程の女がた、よろづの拍子事またの世にも出來まじき名人、ことに若道のたしなみ深く心を掛ざるはなし、日を重ねて姿の花も惜まれ、月は廿日餘の空と詠めし年の比、愚入し山に隠れ、雪を拂ひ、形をかへて諸國修行して今此所に来て草庵を結び、萩垣のまばらなるに蔭の枯葉の纏ひ、窓は南に月を友とし、朝夕の勤め隙なく、かく

て三年が程は身の在所も知らせず、古里の事をも忘れけるに、世に在し時かゝえ置たる子に淺之丞と申せしは、優れて麗しく情も深く、諸人の戀種となりぬ。主膳の時是を懸けて、外の勤めはおのづからやめて、互にかはるまじきとの約束せしに、墨染にかへ姿を知らせ給はぬを恨み嘆き、はるくくの武藏野に道をつけて今爰に尋ね寄て見るに、むかしの面影は水の泡に消て、埋れ井を手づからはね釣瓶のいとなみ、泪は桶にあまりて、此御有様はと衣にすがりて、人日も取す袖を浸しけるこそ至極の心ざしなれ。され共我出家して世にある共定めぬ身なれば、かさねて逢事稀なるべし、年月のよしみとて此度尋ね給ひし心底なほ忘るまじ。そのかたはいまだ盛といへば、江戸櫻の人も詠めに惜む程なり。殊更熊谷にまします二親の歎き、彼是思ふに間なく東に歸り給へ、名残も今平にかりのもたしに、木の葉の煙を立て、茶釜のぬくもるとけしなく、天目二つの外器とてもなく、しのべ竹ならべたる佛棚に表具なしに六字を掛け、欠徳利に夏菊を生て風を樂みの口とし、夜をしのぐ蚊屋もなければ、團扇なく枕驚かして、過し事語るに涙に音ありて口に聲絶て、夢に現を見る心地して、鴨の鐘一番鶏の鳴かば關の東へおもむき給へ、是より後は無事をしらする文もむつかし、便あり共其事なかれ、せめては是を形見と持馴し海土敷敷を渡せば、又泪玉を繋ぎとめたる風情ぞかし。やうく明方の雲晴て夏山もあらはに見ゆる時、とかくは御心にまかし歸ると、立行姿しばし見送りて、山は茂り木の陰には



や見えずなりにき。今は思ひを晴し笹戸さし籠、うきを忘るゝばかり念佛に氣を移しける折ふし、又戸を敲くは怪しく立出てみれば、淺之丞うさへしきもゆひを拂ひ、御言葉に従ひ東に還りて又参りたると申す。あたら形かたちを悔め共甲斐なく、此事和尚に申せば、夢をしる世の思出何か残らじと、同じ衣ころもの褌まぶらに染て、後の世の事のみ誠ある道心是なるべし。朝あしたに山の井を掘ひ、ゆふべに柴木を運び、修行の身の樂み有がたくぞ見えける。この山里つゞき古市ふるいちといふ所に、野人の娘には其様やさしかりけるが、淺之丞旅姿を見しより魂飛出で、大かたは狂亂になつて跡より御寺に行くを、召仕の女共取つき諫めて宿に歸りしに、此戀やるせなく其夜忍びて通ひ、松火まつび幽かなる庵室を窓より覗けば、思ひし人は法師となつて有ける。悲しき聲をあけて、あの若衆を何とて出家にはなす事よと絶入たえいばかり歎きぬ。かつて思ひ寄ざれば取あへざりしが、女のあらけなき放言のうちに一山の坊主驚き、立集りて是を見し人もあまた有ける。はしたなき仕業しわざと色々いへるも聞入きこいれず、只此人を誰髪たれかみをおろしけるぞ、其人恨みなると、狂人うたがひなし。親里いぢりに云遣いぢりて親しき人の來つて、さりと世のそしりも有、出家の身なれば思ふにまゝならず、重ねて逢あひみる事の時節も有なんと、心を靜にせさせけるに、今迄は淺ましき心ざし、我こそ迷へ、人は何共思ひ給ふまじ。よし、かゝる無路も定まる種たねなり、みづから十四歳迄わづかに散るをも惜みし黒髪、今日より道の掃草はらひと手づから切拂へば、せんかたなく是も出家になして、西のかた

の山陰にひとつ庵を結び、明暮証の音ばかりにして、其後は形を見たる人もなし。戀より思ひ初めて戀をふつと忘れけるとなり。又二人の法師も浮世者にて浮世の事を棄て、今にこの山を離れず勤めすまして住ける。さかんの時江戸にて相馴れし人の、昔ゆかしくて、尋ぬる方もあまたなりしに、つひに戸をあげず、門はすいかつらの鎖で根柢はおのれと埋れ、道筋もなかりき。其後山本勘太郎といへる美兒人、龍田の紅葉見にまかりて色ばかり好めるかへさに、爰に便りて哀に殊勝に思ひ初めて、まことに夢と是も憂心の身となりぬ。よくくゝの思ひ入、惜や前髪盛に。

面影は乗掛の繪馬

いづれの工が削りなして野郎紋楊枝といへるを始めて、世にも時花かしぬるうき世の世の字は、ならべてなき一つ紋、夷の抱え玉村吉彌とて、其頃都の男はいふにたらず、人の女または娘にかなはぬ思ひをさせ、限もなく舟岡、鳥部山の煙とはなしぬ。殊更楊貴妃の狂言に、弄の貞つき、それはくゝ唐土を見ねばこそなれ、繪巻などの及ぶ事にもあらず。いつ迄も此まゝの兒人ならば目出たかるべし、若衆と庭木と大きにならぬ物ならばと、物數寄のよき遠州も申されしとなり。何事も歎くまじきは世の有様ぞかし、一とせ難波の芝居にて戀の如のあはれしより、歌舞伎といふ事法度になり、太夫残らず

前髪おろして野郎になりし時は、開かぬ花の散心増して太天元を始め、千共の親方深く歎きしに、今思へば是程仕合せなる事はなし。いかに情なればとて廿歳迄るまで前髪留て勤めはなるまじきに、野郎なればこそ三十四五迄も若衆只して、人の懐の中へもはいる事ぞと、をかしき色の道の思はれけれ。外へは年をかくし、節分の大豆も餅讀にしてくらがりにて内證は濟せ共、物覚えの強き見物目が、同じ時の若衆方は敵役になり、女がたは祖母方になりしを思ひ合せて驚きぬ。藝見るばかりは、たとひ七十になる若衆が振袖をきるとても、少しも構ひにならぬ事ぞかし、とかく合點する夜の客さへあれば、質はおかずに年はとるなり。春の初狂言の仕組に玉村吉彌行くとて四條のくづれ橋渡る時、看板うたぬばかり北國者に隠もなき男、其様をかしげに割着て、ほくそ頭巾に山刀さして、肩にれんじやく掛て、都の霜先をかながへ、狼のくる焼賣に上りしが、此面影のまたなきしきに目をとめて佇立しに、吉彌を心をつけて手にふれし楊枝を彼男が袖口に投入て、何心もなく悦ばせて通りけるに、此男狂亂の心になりて、商物を喜内が浮瑠璃芝居の前にうち投、本國佐渡が島へ歸り、明暮貞子をためける。金銀さへあれば此戀はかなふと思ひつくこそをかしけれ。念力岩を見立金山にかゝりて、思ひの外なる伊大臣となりて、五年あまりも過て都にのぼり、馬乗物を直に川原に立させ、玉村吉彌を尋ねけるに、其人は役者のならひにて江戸へ抱えられ、四年あとに下られけると語る。是を聞くより



京には一夜も留まらず、又東路の心ざし、逢坂山にも我をとめぬる戀の關守もなく、したい事して行道に、それ迄は御油赤坂金川などに色しかけたる女の人を留けるが、耳にも聞かれず、品川より江戸入を急ぎ、境町にて吉彌を尋ねけるに、此所の芝居にて都の花を咲せて後、人より早く若衆姿をやめて男になりしと、むかしを語ればなほ又なつかしく、手引を頼み坂東又九郎樂屋に入て見るに、いまだ身拵へする太夫子の風情、白粉をぬらぬ素貝にても美しからぬはなし。すぐれて吉田伊織、野川吉十郎、加川右近、いづれも名をあげし美兒なれ共、我おもふ都の吉彌にくらべては續くは一人もなかりき。過にし面影の思はれ詠めやるに、見分がたくて心煩ふ時、大男なるを是ぞ玉村がかはれる姿といへば驚き、つくづく見る程に一目なれ共むかしの形、首すぢ美しきを思ひ出し、今でも戀はやめがたくて其後人知れず京の事共を語れば、吉彌も二たび都なつかしく、其時ならば其心入あだにはなさじと、誠ある心中申せば此男嬉さかぎりなく、勤めの身にはやさしくおもひ、我仕合を殘さず咄して、よき物一代の世を暮す程取らせて、又生國佐波に歸りける。そも、楊枝一本よりのなづみなり。總じて舞臺子は人に言葉をかけ、あとの減らぬ手などは誰にもにぎらすべし。玉村吉彌が情にて命捨し人数をしらず、江戸中寺社の繪馬に、吉彌面影を乗掛に坊主小兵衛が馬子の所、是を見てさへ戀に沈み、今に世語とはなりぬ。

男色大鑑

本朝若風俗 第六卷

目録

一

情の大盃潰膽丸

伊藤小太夫さながらの女

衆道中立賣の内儀

きのふの小袖けふは形見

二

姿は連理の小櫻

願狀にしるゝ千之助が心ざし

文章はいもせの階がより

人のしらぬ情一夜の籠籠屋

三

言葉とがめは耳にかゝる人様

胸を煙らす仕出したばこ入

口ゆゑに切られ損切たり窄人

山三郎思ひみだるゝ瀧の糸

四

忍びは男女床違ひ

人の良見世おもしろの出見世

近代の風俗お山吉彌が眞似

おもひもよらぬ兄様の仕合

五

京へ見せいで残り多いもの

今古出来まじき物平八が若衆方

酒ゆゑ夢太郎と我名を呼事

女の執心三十日目に借命

情の大盃に潰丸

淨土といへど法師程世に氣さんじなる物はなし。したい事してあそび寺、それらの宗旨に學びおきたる經を讀て、諸檀那に衣を着て途より外勤める事もなく、包み銀のたまるを化につかふもよしなしとて、戀のはじまり芝居子狂ひ、是ぞ出家に備はりし遊興、色座敷にも身の一大事を忘れず、精進かたく焼鉄柳茸のにしめ物、水栗酢味噌に天木蓼、あまのりに梅干の吸物、是にて夜もすがらの長酒、よくも呑るゝ事ぞと、此眞言ある心ざし殊勝千萬にぞ見えける。いかに佛の觀面にしるしみせ給はぬとて、長老様の相焼も出来はせぬ事ぞかし。看を心まかせに、女濡世間憚らずは、出家にならぬが損なるべし。さる上人の物好にて、伊藤小太夫に舞臺衣裳を着せて、靈も其まゝ女にかはらず風流なる面影、一座の興ともなし給ふは、誠に女珍しき心に偽りなくて、諸人は是をよきと沙汰し侍る。折ふしこの亂れ座敷に交はりし狹々の源兵衛といへる男の語りぬ。伊藤は古今の色酒、同じ手組の客にして所もかはらざるに、此太夫一人の仕掛にて萬輪別世界の詠め、東山の月の貝も紫の帽子かけたるやうに思はれ、祇園林の鳥の羽色も宗傳唐茶に見なし、時めく美君に浮かされ、我に限らずいづれも明方を惜み、秋夜の夢ばかりなる手杖になど、古歌を取違へて前後を覺すなりにき。されば一人の心

は千萬人の心なりと、杜牧之が阿房宮の賦にも書残せしが、伊藤が心の淵に沈められずと云事なし。
 歴々の帥中間も泳がされて、熱に無遺補て騰身ける。いづれはあれど此少人氣分は寛張にぞ生れ付
 て、物靜に自からの若女がた、采舞今風の仕出し、爪端ゆたかに白ごししとやかに、舞事すぐれて萬
 の拍子きよて、舞川林之助が舞袖し二つ綱を一筋にしてわたり、都人の目をも驚しける。是人間身と
 ほ思はれず、殊更吉野身請の狂言に此大夫が道中移せしに、誠の吉野は藤に色を帯はれ、あだなる櫻
 と見くらべていへり。今また評判するもくどし、よきに極りたる證據をしらずや、若狂狂ひの悦とま
 らぬ者の申出して、此若家を藤原といへるは、一夜の情代銀三枚あげし替言葉なり。和日こま成京
 の人が世の夢に百二十九奴かけしや、情なればとて思切ては出せし事ぞ。想じて高い物の思き事なし。
 此大夫は若中の女世賤にかぎりもなく思ひを含みて、いひもやらず命をとられける人数をしらず、分
 の文共便を求めて通せしを、假にも取あげざるは難面心にはあらず、其身美江の意氣をおろそかに
 思はぬ故ぞかし。今時い野郎勤めの内は是非もなく、脇助の大袖を着て隙の夜は丸袖になりて、祇園
 町石垣上八軒穴八坂清水の茶屋をさがし行き、土手町の素人女に忍び通ひ、宿にては物隠女を晝居
 隠らせ、そのみ思所のさかりは面影にあらはれ、衆道の形に外になりて、心から花の盛を見がきら
 るよこそ羨ましけれ。想じての勤子慎むべきは此ひとつ、五三年其程過れば晝夜をかぎらず釣ものし



ても人はとがめず、およそ唐人の若衆にしてから鰯のしれた事、是は笑へどいづれも浮氣の大座敷、やう／＼腕をやめて汗は又元の水になして、手前風呂立さわぎて入ける。春の日も暮になりて板屋も知らぬばかりの雨ふり、明日見る梢の爲にはよしや、岸根蛙の聲せはしきもゆたかに聞なして、笹垣の外を覗けば女はさかり三十一二の美形、額際より自然と麗はしき黒髪なるを、何日すき櫛のわかちもなく、油のかをり絶てはしたなく折曲て、古層の引裂紙にてつひ結び捨て、薄染の小袖に山盡しの畫紋、其景色も幽に成迄着古し、眉先の吉野山をむかしになして淺黄の木綿ぎれを當、裾に末の松山の所には横島の纏をして、小倉の男帯に細目布のはし纏ぎ、左の脇腹に結びとめ、ひぢりめんの下紐色はかはれど石流残りて、いかなる人の果ぞと心を移させける。髪置頃の子に紙子の廣袖を着せて、川原におのれ咲の菜種の花を二もと三もと手折て、むす子が泣を賺して、我が阿爺様の惱み給ひて、迪も及ばざる若衆様に命をとられ給ふ、それはあの藤の丸の内に伊の字の紋所を、花紫の大振袖に付ておはしける、朝紫といへど夕になほ美しさ見よとて、肩車に乗て青葉の立木隠れよりさしあぐれば、彼伴子いたいけしたる手をあはして、あれはのゝ様かと目もふらず拜みける社をかしけれ。各々垣ごしに聞に堪へかね、杉の組戸をあけ過れば、此女胸轟かし漂行を引留めて子細を尋ねけるに、おそろしやとばかり云消てさしうつむきし風情、氣を付て見るに瞬き程の個人なり。いかにして恥かはし是ま

で忍び寄られしぞと、否といはせず問つめられ、玉つなぎたる涙を諸袖に傳はせ、戀の始を語り出るより、隨分大膽なる者共想泣、是ぞ至極なりける。今は耻ぬべき事にも非ず、問はせ給ふこそ嬉しけれ、我つれあひは都にしろての衆の道に溺れ、世に有時は難波津や梅に松本才三郎に相馴れ、むさしのゝ月をもそねむ花井才三郎に戯れ、此河原にて村山久米之介に氣を失ひ、牛房庄左衛門方に夢に暮て現に明し、過にし紙渡町の躍の場の喧嘩にても、此君に危き命を惜まず男を達られしに、さりとは世程定めがたきはなし、今は室町の本宅に住兼、あるに甲斐なき北野の末、廿五日ならでは人の面影を見ざりし片陰に引込、うき事ばかり聞明す卯木の耳搔を細工して、一日を暮す片手にも若戀を忘れもやらず、いつの頃よりうか／＼と其事をいはずして打惱み、けふを限りと枕の哀なる聲にて、見ずに果ぬべし伊藤小太夫様をと男泣、女の身にして悲しく、世もまづしければ一入いたましく、せめては太夫殿に通じて書捨の物なり共申請て、最後を心よくいたさせ参らせたと、あらましに語り絶て涙より外はなし。情をしる人々少時女の心ざしを感じて、太夫にはしらせずして肌になれたる定紋の緋無垢を遣はし、是を見せ給ひて後其人臉氣をえし時思ひを晴させ申べしといへば、此女なほ涙に沈み、扱も有難し、早く此事を聞せと立歸し跡にて伊藤に語りければ、それは何方へか、其女はと、取あへず道の程二三町も慕ひしが、行方の知ざる事を歎き、我故命のせまるとや、其人に逢まして其思ひをと、

狂亂の如く成ぬ、漸々其日も明の日に人良の薄く濃く見えし時、きのふの小袖を歸して、慕なや其人は曙に烟となしける。此きる物を見つる嬉しや、相見る心地是迄と身をふるはし、詞も終り、我計悲しきと泣に、其座に心玉の有人はなかりき。細に尋ねて跡をも吊てなど、思ふ所へ男女餘多懸付、とかくの事をもいはず、彼女房を乗物に取のせ、是は由なし親御様の御外聞、月夜に灯挑、晝共と辨へず、どつさくさして歸りける。

姿は連理の小櫻

天竺の荷葉、大唐の牡丹、和朝の小櫻、是を花の隨一と定め、詩歌遊興の基なり。されば諸木物いはずして然も手なく歩まず、吉野の嵐、初瀬の雨、春の名残に人を驚かし、かへつて無常のはじめとなるのみ。あかず詠めは姿の花、若道の盛り千本の中にあらはれ、千之助が藝振ながら女に女のまばゆく、しら／＼と良見とむる人もあらぬ程にして近代の稀者、口も動さずして言葉のあやきれて、聞に情含み、いやといはれぬ笑ひ、諸見物たばこの吸がらに袖の煙をしらざるは、放火の笑ひ后をなぞらへて猶思はれける。不斷の身持殊更にかためて、勤めの外夜の道筋を踏ず、朝に寢良を同じ内なる末々に假にも見せたる事なく、逢ねばしれぬやさしき事多かりき。いづれの人にも愛敬そなはりて有

ける。是ぞよしや難波の太寺に立せ給ふ愛染明王、役者おろかならず祈りて紋燈挑に和光の陰間子はしらず、桐の頭松本小太夫、二木爪袖岡今政之助、重ね柏に巴鈴木平七、是に心を掛奉る、御寶前拂ひ清める法師の内陣をあらためけるに、一つの願狀補置ぬ。しかじ世に鼠程うるさき物はなし、封じこめしをおのが心まゝ喰裂しに、其筆跡をみれば願主小櫻千之助として、自存する子細有によつて五年我ながらならぬ事のみ、大願成就の内かたく此身を清め畢ぬ、所々きれ／＼よみて各かいやり捨ける。折ふし參詣して是を聞しに、誠ある心からにやといと殊勝に思はれける。然も其日は二月朔日、夫より此若衆に移り氣になりて、直に荒木與次兵衛が芝居見物せしに、けふより初狂言のかはり、三番つゞきの口上に松本文左衛門龍出、書付を持って外題を讀で後、役人付ためらはず扱も申したりと讚ける詞の下より、色香の深き櫻は良にあらはるゝ若女方、幕切て見へそむるより、いよふ／＼千様、千之助様、萬人の中にもまたと御ざるまい、今の世の人殺しめ、生ながら墓へやらるゝはと、舞臺裏まで響渡り、諸人の聲、漸に雌方片扇をあげて静めければ、仕出し舞臺半近く鳥足の高木履、其身は紙子に様々の切接憎からぬ模様、此子なればこそ着もすれ、末々の女方の着て似合まじきと、はや西二軒目の棧敷より物馴共沙汰し侍る。首に懸たる叩鐘の音迄もしほらしく、正面に少し笑て一しづめ色含ませて、うるはしき口よりして調諷、爰が聞所ぢや、だまれ〇只今爰元をすゝめて通る自は好色中興の世捨



者、夫婦妹背の修行者也、されば足柄箱根玉津島貴布禰や三輪の明神は、夫婦男女のかたらひを守らせ給ふ御神なるゆゑ、我心中に大願あつて隔夜に通夜をいたす、其心ざしは我身に深い思はくが御ざりましたれ共、月には雲のさはりとかや、かなはねばこそうき世の中、あきもあかれぬ中なれ共、引わかれせし悲しさは命も絶るばかりでござりました、しかじ我身こそ前世の宿業によつて、かやうの憂目にあひます共、せめては世に戀ある人の守護共ならんと、身命をなげうつて、世々の戀ある人の爲に此五社大明神を祈りしに、神も納授ましくてあらたなる告を蒙りて、此連理の枝を授かり、餘多の戀をすゝめ、千人に及ば、供養を遂げよ、其縁を結びとめたる者は男女子によらず、見めよく品よく形よく、しかも心中は猶よく、一生口舌事なく、此世も後の世も又其後の後の世も、御守護なされうとの御託宣で御ざる、皆様心中によいおかさまや殿子を持ちたいと思はしやれまするならば、此の連理の枝に結び付さしやりませい、いかやうな戀でもかなはぬといふ事はござりませぬ。扱もく長事をさはりなく申了へば、浮氣男ども思ひくゝに結び付し中に、年の頃廿四五と打見えたる人、富士おろしと云大編笠をぬけば、紫の手細にて頬冠して良は見せざりき。何とはしらず思ひ此内にありと、書たる立文一通しとやかにむすび付、姿を見こみし有様、常の人とは思入も深かり。千之助樂屋に入ればおのゝ立かゝり、むすびし文を見るに、大方はれました、命々などと書て別の事なし。件の文

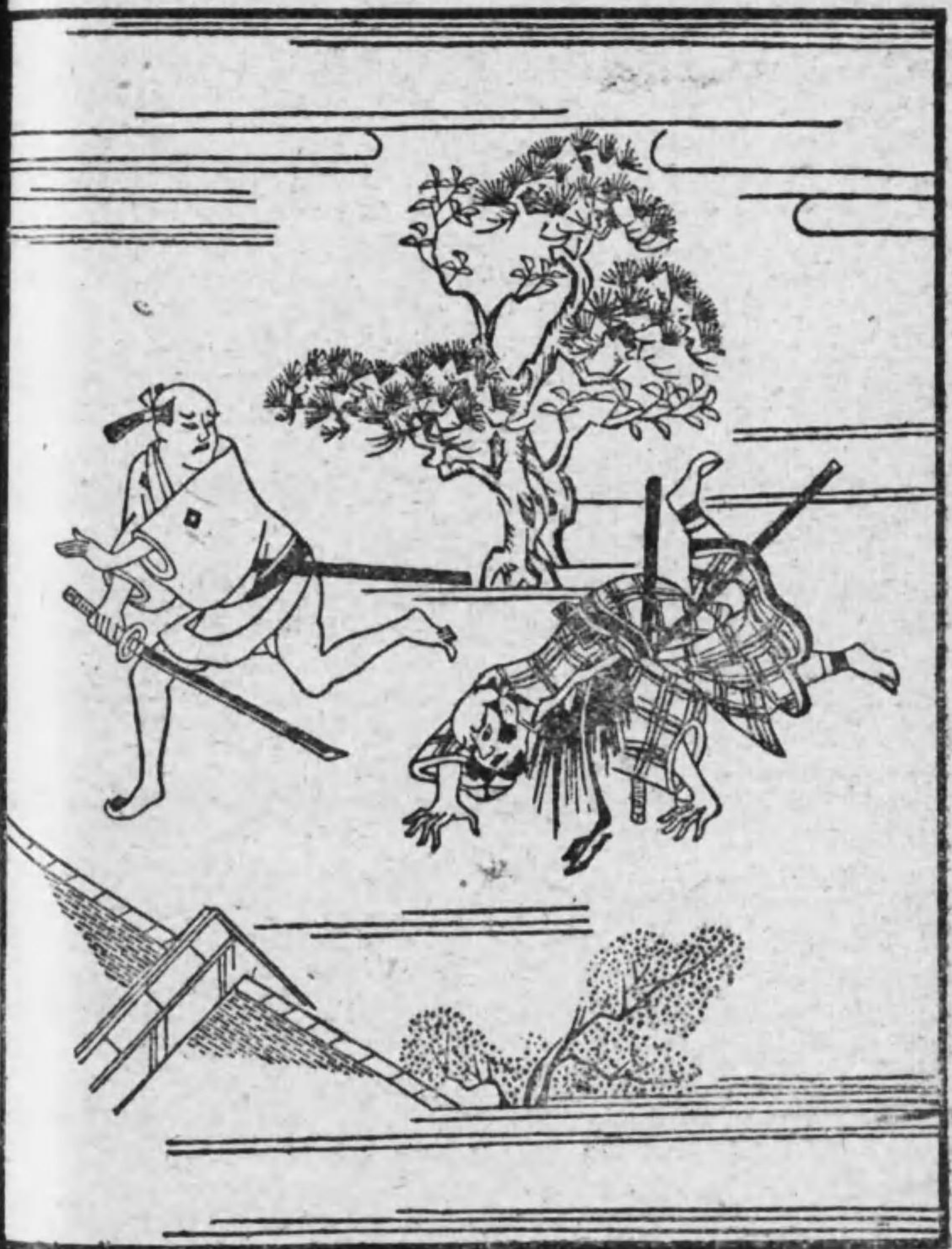
をあけそむるより、さりとて笑はれず行成流に筆をうごかせ、先はその文から、色は則是空、空は則是色、いざなぎいざなみの御事なん猶いふにたらず、都て和國の姿心なき草木も色なる良ばせ、時しもあれ今の月今の日めぐみ又しかり、此心を含む人わくらはなり、心にあらねばもろわざうつる事かたし。諸人の目をよろこばしめんたはれのみと、見む人もあらむなれと賤はさと見ず、おのづから色を心に染て連理の小櫻、外に盛を顯はし給ふぞや、されば高きいやしきに隔なき其修行の道なれば、など願ひて叶はぬ事のあらん、只一筋に願ひけるをいき如來の捨おかんせぬめりと、人の山崩れて笑ふべらなればと、君ゆるゑの耻はなんのいの、つたなき口していふがくだ、實の色を顯はして羽翼なきを連理にやどらせ、比翼の思ひをなさせて下され候はゞ七世迄の厚情、さなくば七生の恨みつき申まじく候、此月の十日にこの所に此姿して此御返事をうけとり申べく候儘、かならずくくや、人々寄りて談けるを哀に心深く思はれし折ふし、北方角の九郎助といふ人、我も亦ありて此文袂に入しに、千之助立かゝり、我を戀ての文仇にはと、眞良になりて取かへしけるは本意なく、せめてはと硯はやめてかきうつし歸りぬ。其後千之助は此男の有かを尋ねければ、上町の笹籠屋を宿として、備前より分ありて身を匿せし人、むかしはいやしからず、子細聞までもなくひそかに我方に乞請て、春の夜の闇は嬉しからじ、晝見る櫻よりは寝道具の散ざくら、數々わけのよき事させて、明がたの鳥め

憎しと云時千之助送出で、是にかぎらず又もと心を残しける物を手にわたしぬ。彼男嬉さのまゝに、此道に古けれ共せめてはと、脇指ぬきもあへず腕二つ三つ引拵、時ならぬ紅葉を見せて立歸りける。夫より尋ねしにさだめがたくなりぬ。此事人に語らず、深き情しりなり。ある時田中屋治右方にて九郎助まじりに宵より酒事募りしに、小櫻が金剛駕籠の作といへる男來るを幸に、酔せての上にていつぞやの文の終りはとたづねしに、はじめを殘さずかたりぬ。聞人はと驚き、扱も若衆の根ざし深く、是ぞ戀の山櫻、今に盛ちるを惜まぬ人は。

言葉とがめ耳にかゝる人様

紫野の法師は扇に繪かけるを妄語の誠一つといへど、紙をはなれて鳥飛び、足を十付れば水邊に潤る蟹あり、宅磨が牛、東坂が竹、雪中の芭蕉は嘘を誠にす。いつはりのなき野郎の花の姿を櫻木に彫て一冊とせしを、居ながら美形を翫ぶ事重寶にながめくらす。牡丹芙蓉の色を争ふいづれ愚ならず。是程美しう筆を盡せし中に惱たゞならぬと、けや戀風は筑波根の嶺より落る瀧井山三郎、吾斗の色を誂へはせまじ。昭君も黄金不買、漢宮貞とこそ、嗟不言不笑、それよ扇をかさせし女を見て戀沈み、糺のもどりに撥音を怪しみ、誰すむ宿はしらざりし築地の内をみれば、餘所にはふらぬ時雨とながめし

主の風骸、柳の朶の夕の氣色、ねんもない繪などは見劣りてむかしにあらね思ひとなれり。色こそかはれなほ成易さうな戀に思はれぬれど、牽人の身の悲しさは朝の風夕の雨さへ凌ぎがたく、纒の借棚窓より見れば今日思ひの山、胸は富士の煙をこがし、涙は深川の浪に滴る、干がたき袖を絞りのたばこ入仕出し、是を渡世として命をつなぐ舟つきを賣めぐりて毎日木戸錢出し、此狂言に瀧井山三郎か出ますると云時に入て正面のシテ柱の方に身をよせ、これ一番と詠めし時、童戲坂東又次郎か輕口、萬能丸五郎兵衛が答話、其日は思ひの外仕組違ひて調議入亂れければ、山三郎纒の所に言葉の綾きれざりき。南の方の棧敷の下より置をれと云、彼牽人聞もあへずだまれと云、いやだまるまい山三郎引込せと云、大事の時邪魔なして座中、是を悪みける。其男は色黒く髯自慢、目を世間にひけらかし、仁王團助とや關東にかくれなきもてあまし者なり。人怖るゝに勝に乗て猶いふ事をやまず、藝の中山三郎も少し赤面して其男をまなごしにかけぬ。此子一代におけとはいはれし是がはじめなり。程なく果て見物出しに、浪人彼男を跡より忍て、濱町のすこし透を見合はせ、むかふに廻り、山三郎におけといふたる頼術は爰かと一尺九寸ぬき打に、柄に手も懸けさせず早業、刃物おそるゝ町人百姓も荷付馬を引のけ、さてもゝと力を添へ、退道をあけゝる。是ぞ縁なるべし。思はずも山三郎が金剛の住けるうら棚にかけ込し、爰はとかくして命にかけて置しも至極也。夜に入て山三郎忍びて來り、心ざしの程嬉しき



盡されずと、あらためもやらず衆道の念頃して、其後は末々の頼みに色を含み、人しれず申かはせしに、さりとは其人はいとほしく、後には勝手動もおもしろからず、是に外を忘れける。人の身程定めがたきはなし、此牟人生國石見の濱田の人なりしが、獨りの母親こがれて世の限りとしらせて、代筆の文見しより此事山三郎に語れば斷に責られ、外の事にあらねば涙に別れて後、又も音信の絶にし事を歎き、いつとなく思ひ沈みて朝にこがれ夕にたへ、面瘦形かはりて程なふ床につきけるが、うらめしの浮世のならひ、盛れる花の村雨桂光の雲霧十九の名残、平生の面色は病中に衰へ、芳體眠るがごとし。新死の姿美靡暗變落花の風、見るもの袖をしぼり、聞もの袂をうるほさずと云事なし。木挽草滋鶴林の患、彌宜町臥猪の床とならんと歎くのみなりしか。

忍びは男女の床違ひ

上上吉彌白粉かけねなし、四條通り高瀬川の橋詰に新見世出しに、京女一子細あるは爰に立重なりもとめて歸りし。いかなる事や、聲なうして美女を呼けると尋ねしに、是はお山の元祖大吉彌が下宿なるが相應なる商賈せしといへり。一切の女紅粉の翠黛は只白皮を揉てこそ見よげになりぬ。女方もむかし右近左近が時は面影のまぎらはしく、頭は置手拭にして大かたに色作りしに、諸見物もそのなり

けりに講取、仕組も今に見くらべて河にし事をかしかりき。當代諸國の風俗都の女をまねてやさしくゆたかに、采躰にうまれ付の耻をかくすを、明暮遣ひなれたる鏡より外にしつた人なし。吉彌はすぐれて美形を藝子にして、金玉を金子にて豚きける程におのづから太夫にそなはり、肌より銀一枚の光りさして四條河原の獵もきかず、磯なる色遊びは目緩て皆此美少に逢ひぬ。猶姿に氣をつくし、櫻咲十八日に祇園町さる方に簾を掛させ、まことの都女の風俗をみて、よき事もあらばそれと思ひしに、心憎きは女駕籠の窓より鹿子下髪のもちりと透うつりて魂飛入ばかりぞかし。皆々よきにはかざるまじけれど悪女と思はれず、貴賤の損徳爰にあり。銘々の楊貴妃おしるい有がたし、遠目に色をかづかせ、氣を留て見るに世間の袍顏を獨りしてあづかり、いやといふてから少しも取柄のなき貞なりしに、其後つき帯結びたる品物、又あるまじき風儀、いかなる女と尋わしに、洛外まで足をのべ、小家をさがす鹽賣の男是を見覚えて、あれは東の洞院の浮世紺屋の娘、姿のお春といへる名とりとかたりぬ。吉彌是をうつして壹丈貳尺のナ幅帯、くけめの角に鉛のしづをかけ、世に吉彌むすびと始めて今にはやらしぬ。有時貴なる御方より舞臺姿其まゝにまれのよし、夜に入ての忍び乗物、勤の身とて行に、御門近くなりて定紋の挑灯閣になして、厳しき番所見えしに、戀はむかしになりし女迎ひに出で、吉彌手を取りて案内して行、心もとなき事ながら此道は首尾さまさまなりと、其御方に身をまかせ入る



に、番の者寢聲にて、女壺人と答へて帳に付おくよし、そこ過て並木の眞砂地百間ばかり行て、又中門左の方の蒔石いろく、木の間く釣灯籠に影移りて玉なす濱かと、やり水の流に添ふ庭籠の諸鳥夜鳴もありて氣をつけしに、白鷗枯木の陰に宿し、鼻梢に身を動かし、鷓鴣口眞似もせず。靜に階をあげれば宮城野を爰に眞木の二枚戸をあけて、長廊下さし足して行に、女の笑ひ、双六の音、琴はしめやかに横笛はるかに、うき／＼と心を定めがたく、灯もなき大書院歩て又板敷の縁に出、垂むしの數くぐりて絹ばりの障子引あけて、紅の房つきし綱うごかせば玉の鈴音なして大勢の足音しどけなく、屏風をこかし伽羅宮蹴立て、どれお山の吉彌はと男めづらしく詠め、俄に亂人のごとし。上氣は青ざめて扱もく見ぐるし。局らしき人制して、奥に其御ひとり宮女の御有様、位とられて皆まで言葉につくしがたし。金銀のかはらけ出、御うれしげに酒事はじめ給ふに女のかけ出、それ御かへりと蠟燭吹消てくろめける。吉彌かくせる方もなく女あまたにおくり出しを、見付給ひてそれはと仰せけるに、歌舞の女と申す、地下には稀成物とおぬしものにあそばしける。遠慮なく御たはふれ、いやはならず此時の迷惑さ、せひに叶はず女かづらをとりて御目に掛ぬれば、是なほよしとかわゆがらせ給ひける。おもはぬ方の床のあけぼの、最前の妹君のさぞ本意なかるべし。

京へ見せいで残りおほいもの

花の咲山はあらうが戀の海見せばや、衆道の藝振生てはたらく鈴木平八、本朝は見めぐりに又つゞきていふべからず、此風俗唐にも有べきか。されば蘇子瞻赤壁の下に遊んで、薄暮に置網をあげて魚をとりての樂、松江の鱸を思ひ合てうまふもない酒に明せしとや、此鈴木を見せて酒相手にせば、また東方の既に明なんとするは扱おいて、晝を月夜と歌はせたと思へば、唐にも見せいで残多いもの、この人品形の諸色に勝れ、賢愚貴賤共に一度睥れば、手の舞足の踏事を忘れなやませ、なほ枕かはせしは、馴し子持か中をも違はず程のしれものなり。くどうは人の見聞てしる通りのごとし。想じて藝は萬にうつる事奇妙なり、武道は名におふ藤代の庄司がゆかりなればしかなり。さる程にことし貞享の春、他力本願記の仕組ことに面しろく、人の山崩て戀の淵を埋み、責ては御手の糸にすがりて來迎の姿を拜み奉り、譎諷を梵音金口に聞なしける。此頃日本橋の駕籠かき共八時さがりよりは一人もなかりし、いかにと問へば大和河内和泉の片里よりの見物歸りにぞ有ける。あるは麥藥筋の少さき袖をつらね、箔の帯の光るを自慢に結びさげし山姥女も、廻通ひに身をやつし手業を忘れ、少し品やるとて尻振うはさして往還る、ちかき里はいふにおよばず群をなす事、何年已來なしと沙汰しけるは市木關り

の色に惑へるなり。都て戀記惱て夕の露をあやまる者、男女の敷指を折に暇あらず。殊に三月三日は
鏡の槌打二藏迄も天王寺清水沙干などいひて遊日なり、まして其上つ方一てうらを取出して思ひ／＼
に立出、性吉かこつけて皆此芝居に入、涎は堀の水嵩をまし、鼻毛はいかのぼりをあげ、狂言の纏控
を湯になして首の骨の折るゝもしらず、いよう平八様など口々やかましく讃立ぬる。男は男共思ふに
所せく中に女も女、きのふ髪切よい年頃なる一年たらぬ九十九髪さへ、根から剃おとしたる墨染まで
心の中外にあらはしけるも興さめてをかし。あるが中に東三軒めの棧敷いみじく圍せ、身持たる者の
娘と思しき、あげ巻程過ぎ美目姿うるはしき我と心に知り初て、戀をば人にならひたき最中、たゞし
下地あるもしらぬが、續き狂言のはじめより目がれもせず平八を詠め、うれしさにかた頬に糸み含み
たるあり様、思ひ入のふかさうな事、人目なくばはしり出てといはぬばかりに見えける。をかしくも
哀に思ひ居るに時移り、そろそろ果口になれば此女うれたき顔色になるは、平八が樂屋入を名残をし
くあらん氣色、藝も畢り平八入んとするに、階がより迄念比に見送りけるが、あまりて思ひ沈み、其
まゝ廻入ける。芝居は追出しの太鼓を敲立、どや／＼とするにつき／＼の奴僕は水よ薬よと噪ぐ。此
道すきものゝ我なれば、最前よりとくと目きゝはして置く、心根ふびんさに其まゝ醫者分になつて、
巾着さぐりながら棧敷に飛あがり、年玉にもらひし延命丹をのませければ、漸々として息出、乗物に



入て歸りける。所きゝたれど爰に遠慮す。扱も其女はひとり娘にて日比月花と寵愛せしに、えしれぬ病に起臥苦しく、醫術盡せ共芝居のあたりたるに療治なく、次第により形も思ひ崩れ、目もあてられず、なまなかかうくといひたらば、世間にはかへぬ命なるべき事に、なま心にて獨ぐちくと胸にかためてとかず、つひに三月八日に開かぬ花散て兩親の歎き悲む事かぎりなし。平八其日は坂田銀右衛門方に遊びて、竹本義太夫伊織などに一二段かたらせて聞所とて、靜に暮がたより我宿に歸りぬ。春ながら秋ふく風かと身にこたへてうちなやみける。明ればよわり暮に身をもだえ、次第に世のかぎりとおもひさだめし枕にちかく聞よる人の中にも、すぐれて年月の念比忘れず、諸共に命ちらばと櫻山林之助が心ざし深かりき。上村吉彌も京より折ふし下りて浮世の暇乞、衰へたる身、通ひ兼たる息遣ひ、それも正敷言葉を重ね、盃をかはして別れの涙の外なし。人社しらね執心かけし方には身をまかせし事其敷をしらず、腕突股切もかぎりなし、いつの頃か里人指切て舞臺に抛しも色の首尾残所なく、不斷の心持天晴役者には惜き者ぞかし。其身一代に情の咄多かりき。若年の時五人の名書して、此中の御方にはいつによらず一度づゝは御心に隨ひ申すべきとの誓紙ありける。悪口中間に何事を見付られける、是をかし。萬氣に障なき若衆、又の世にも有まじ。古今武道美道の詰開き、日本若道の鑑りつして其身作りて違なし、惜や日敷ふりて自から便なく、身冷魂去荒原棄との古詩、今

此身に思ひ合せ、哀さも一しほに増れり。生薬も叶はずして今はと見えし時、現世後生とて百萬遍の敷ある珠を繰り、千卷陀羅尼を誦せても、定業亦能轉の經力も此戀力には叶はず、唯幻に最艶なる女の見え侍るとかたりて、閏三月八日に息絶えぬ。一念五百生と聞し思ひ入の魂の取付たるよとしらぬ。廿三歳いまだ東の山の端の月、西へ入事惜まれける。

男色大鑑

本朝若風俗 第七卷

目録

一

螢も夜は勤めの尻

吉田伊織藤村半太夫都の月花

雨夜の竹の小笠問へどこたへず

佛前の花誰かはさし替へて

二

女方もすなる土佐日記

その年の噂指切てけれ

茶白山松茸狩の十番機嫌

半彌が仕出し扇は風の外

男色大鑑 卷七

三

袖も通さぬ形見の衣

子安こやすの地蔵ぢざうは偽いつはりりなし

思おもはくの紋楊枝もんやうじは口くちに入物

正月二日の曙あけぼのの灰はいよせと

四

恨うらみみの數かずをうつたり年竹としたけ

文腰張ふみこしはりはたよならぬ隠れ家かくれが

想おもじて年としぜんさく殊更ことさら若衆わかしゅ

ねだり男鬚おとこひげはむかしになりぬ

五

素人繪しらひとえに悪にくや釘付くわづけ

京きやうは山難波やまがたなば地引ぢひきの沖鱈おきづら

筑前ちくぜんの浮名境うきなまがひの浦うらに流る

岡田おかだ左馬之助さまたけのすけ人も悪にくます

螢も夜は勤めの尻

身過程世に悲しき物はなし、萬につけておろかなる事もなく見えわたりたる中も、殊更色道の太鼓も、心永り物毎堪忍強きがもと手なるべし。有時石垣町の大鶴屋の座敷に、村山又兵衛座の太夫子吉田伊織藤村半太夫、此二人をならべて見しに、先今の世界にまたあるべき野郎共思はれず、さながら風情は繪に残せしむかし名をしる美女めきて、時勢粧の舞ふり、見し人是に腦ぬはなし。殊更一座客のこなし、調誦しめやかに情深く、たよ／＼として弱からず、うちまかせ身にも心を置ぞかし。伊織は床に入てから其敵の好事のみ申盡して、はや枕の上にて命も算用も構はず、客噪ぎ出て興を催せり。又半太夫は床入してより言葉數なく近寄ず、其客に氣を惱ませ、身をもだえさせ、少しはせく心の時一生忘れぬ程の嬉しがる事を、唯一つ小語く首尾の仕掛、さりとは外の子供にまた教へてもならぬ事、此二人が帥ごかし皆嘘にして偽りとは思はれず。今の都に太夫子三十一人、同じ直打なるに、是に逢ぬは無分別なるべし。金銀の貯へあらば此色遊につかふたがよいは。何か世に残して子に譲り、自然其子目始末を思ふ白痴にて、一代歌舞伎若衆を買事もしらずして暮し、内藏の片隅に積重ねられ、幾年か此金世間のおもしろき事もをしらず、其まゝに朽果るを銀も口惜かるべし。諸事分のよき人には

無くて扱もまゝならぬ世の中と、祇園町の末社ども是をなげきぬ。さる程に夜神樂の庄左衛門口筋に、もろくの太鼓おもひの藝渡して役者まさりの身振、後には笑はれもせず、腹抱えてをかしさも今なり。此座に村岡丹入とてむかしは何がしの二男、萬に賢く其身持賤からず、大氣にして人の憎まぬ生付なりしが、世につれて先祖の名を埋み、下立賣堀川の邊りに大橋流の賣手本もはかどらず、針立の張紙しても呼人なく、世渡りの悲しさに大臣の慰者と成て、今日も此席に連なり、膳おそく居るさへ無念重なりしに、脱捨の小袖を疊めと足で押出さるゝ、是もいやとはいはず疊みおきしに、灰吹を捨てやらるゝ、是非なくかしこまつて居所を、大勢立かゝつて早繩を掛られ、鳴瀧の盗人と引れしは座興にしても胸しづまり兼、繩解たらば二三人もさし殺し、物の見事に死べしと、一筋に思極めしに、鼻紙人より長徳寺四五つ蔭散して、先程よりのなぶり賃に是紅のぼつと給はりけるにぞ其儘心かはりて、さても且那大分見事なはずみと、慾より身の程を忘れて知恵も才覺もかくして、萬事を愚鈍に見せかけて、生れつきから疎き人に廻されて、輕薄の有程云盡して、我心ながら恥かしき事にぞ有ける。折ふし買ふてもらふ陰子にさへ高を括られ、帶とかすまでの詫事、人こそしらね拜まぬばかりなり。又供連れぬ身の氣のどきは、草履預けしもそこゝにせられて、歸るさにかたしゝ取集めて、卸かはや駕籠に付て御供を申、都に住るにも渡世さまゝに有けるこそをかしけれ。品はかはれ

ど猶勤子の悲しきは限りもなし。きのふは田舎侍のかたむくろなる人に、其氣に入相頃より夜更る迄無理酒に傷み、今日はまた七八人の伊勢講中間として買はれ、床入はひそかに圖どりしらるゝなど、其中に好る客もあるに、圖のならひとていや風なる萩仁めに取當られ、かしらからしなだれ、髪損ぬるをも構はず、爪の長き手を打懸られ、楊枝つかはぬ口を近く寄られ、櫛の單なる肌着身にさはりて恐しきに、革踏皮の匂ひ糲りて鼻ふさげば、衆道の分もしらずしてふんどし解掛る。銀が敵と是非もなく自由させながら、秘密の素脰を持って参り、夜更起別るゝまでいかばかり年を寄しぬ。是皆わが身の徳にはならず、親方の爲ばかりにして一大うたてかりき。され共此勤めの切なき事を忘れけるは、萬人男女共に氣を移し、現なき風情に姿の自慢、宿に歸れば太夫様ゝと、あまた人のそだてつるに身碎くる事をも知らざりき。是を思ふに薄命の身に替らず、品こそ違へ遊女に同じ。有夜五月雨のふるかふらぬか程に板屋音も幽かなる明方まで、いつもの手組の客まじりに、大鶴屋の二階座敷に冷酒の限もなく、今の鐘は八つか七つのせんぎして、ざつと立ぬかといふ時、虫籠の隙間より螢二つ三つ飛入しに、又興になりて見しに、此螢人馴れて光を燈と争ひ、半太夫が袖に宿れば、螢も同じ身上と平安城の道行を語れば、座中しらせてどつと笑ひ、誠に此螢も勤めに尻を照しけるよと悪口いふて、され共是は夜計にして晝際の浦山し、我はかくありて晝また舞臺の勤めやるせなきにと、うその



なき心の程をいふに、次第盤亂れしを不思議と人遣はし見しに、闇に紛れて面影は竹の小笠をきたる法師の、墨染の袖より薄葉包みし盤をひとつ、人の慰になれるやうに放ちやりぬ。むかし車の内へ投入し事の思はれ、何とやら戀の仕懸めきてやさし。此有縁を歸り語りけるに、半太夫聞くに涙をうるほし、さの事こそあれ、夜毎に太夫もとに忍べる道心者有けるとや、若衆いづれかと思ひしにさては我かよ嬉し、ゆるし給へ、せめては盃してといふ聲聞捨に、足早に立のきしが、下踏の音けはしく石垣踏外づし、あらけなく痛むと見えしが、降續きし雨の高浪常の淺瀬に替りて、哀や其身を沈め、おのおのかけつくるまに影も形もなくなりて、行水に數の思ひをさせて大方ならず悔みける。それより半太夫心地打惱みて、見ぬ人を思やりてうか／＼暮しぬ。其後さる御方様の情深くなりて役者の身請をあそばし、大佛の邊り紙漉町に住しうちにも、彼法師が心入哀れに忘れず、櫛の尾にとり籠りて出家となりける、殊勝さ限もなく、朝暮念佛怠らず心をすまし、床も定めず、おのづから眠の中に彼法師夜毎に現はれ、しみ／＼と語るこそ嬉しけれ。目覺れば影消て、寢入ば夢ながらたゞしく見えぬ。其印には山路に咲る四季折々の草花を手折持來て、佛前にさし捨て心も慰めける。此事人に語れど疑ひて、同じ枕に庵室に假寝せしに、其法師こそ見えぬ、生花は毎日かはりたる事ぞと申しき。

女方も爲なる土佐日記

道頓堀疊屋町の西北角に、井筒屋といへる新見世の扇屋あり。冷しさは生の松島半彌が面影七左衛門と名をかへ、惜や花は盛、月は廿日餘を、若衆の最中と見しに無分別なる元服、これを金剛中間になげきぬ。此兒人は美道二葉の時より、松島や小島の蟹の淵にやさしく情深く、一座氣高く酒すぐれて呑こなし、文などは是につゞきて眞似する子もなし。水仙の早咲に壺入の客には雪むかしの口を切、春を櫻の名残をうつし繪に、自筆を染て古歌の姿なるを詠じける。五月雨のしめやかなる夜は初音焼かけ、杜鳥今にもと待人様の氣に入、秋は月をも宵から見捨ずして書物に心をうつし、ひとつ／＼能事を見習ひ、萬につけていやしからず、殊には其身生れ付て、ならべ枕に打解てより人の命をとる程の事ありて、稀に逢ぬる客も忘れがたくて、跡引て明暮戀に責められ、借錢の堀へはまりし人限りしられず。若紫の帽子は世上の野郎定まつての飾りを替、淺黄ちりめんの仕出し更に又美形なり。不斷衣裳はさのみ色を好まず、肌付は白無垢に黒きひつかへしの重ね小袖、外の芝居子のかくはなるまじき事ぞかし。第一大氣者にして、人の欲しがる黄色にて重き物をも手には持たず、さもしき事のなきに、又ある太夫子方へ盆節季に見舞けるに、刺繍の代銀を手づから掛て渡されしに、秤目せ、程こ

そあれ、四匁の内に貳分五リ軽いとて、肴賣との口論見ぐるし。それさへ可厭なるに、人が見ねばとて勝間の里にて織し下帯、それも晝に垂は汚れて、せめて夜ならばと思ひし。是等に引あはせては勤め子にも扱々違ひあるものぞ、せはしさゆたかさ大晦日と元日程に替れり。世に住ばいやな年越と、柘兵四郎と語りて是を笑ひける。或時道古といへるをもてなしに、半彌物好みにして難波の茶臼山へまかりけるに、櫻狩せし春にかはりて秋も又物の哀なるこそ、萬の虫鳴音に知られけれ。南の池近く幕打せて、那古の海の夕日上戸の良をあらそひ、酒論さまざまの肴つくして、是でも呑ぬといふ時、ちかき里童子四五人、手毎に目籠を提て見えわたりしに、何事か仕業尋ねけるに松茸を狩といへり。山浅くして有物かと思しに、露草分けて色なる朽葉さがせば、笠を傾け爰かしこに有程取りて、松煙せて當座焼に柚酢のかかり、是は／＼と求喚けるに、それよ一年小松半太夫つれて天野の茸狩の御酒宴に、鬘の半右衛門おたけさんさの一節、今もやはり歌山春之丞も立噪ぎ、いつに替りておもしろし。是皆亭主半彌が心ざし深し、松茸限りもなく肴より人造はして植置けるとなり。萬事おとなしき仕かたぞかし。諸藝も思ひ入深うして、いや申しと云言葉つきまでも憎からず、古今の女がたと申しても若しかるまじ。荒木座へ抱えし卯月の初つかた、半彌大振袖の桶かをりて、見物思ひを懸たかの鳥の聲珍しき狂言の中程に、諸人の座せる片隅より田舎めきたる男の舞臺にあがり、是半彌様我敷ならすし



て戀たてまつりしは恐れなれども、心中は是ぞと脇指ぬきて、左の小指板敷に推當て、なる程心靜に五引六引に切落し、紙に包て投出しける。半彌騒がず、我思召しての御心ざしあだには存ぜじ、狂言半なれば菟角は樂屋へ御入と申すうちに、彼男は見えずなりにき。我宿へ是非に御尋ね給はれといひ捨て、彼指人手にかけず、血の出る程は洗ひ流して、念比に包て懐中せしは、さながら情らしく見えて、人皆悪からぬ取沙汰にあへり。前代芝居にては例もなき事なり。半彌宿に歸りて寢間あらためて袖に焼しめ、其夜詫て、鐵眼の鐘のなる時少し夢結びける。程なく明渡り、人良のほのかに見ゆる時きのふの男友とせし人と二人通て尋ね來りしに、かざし詞を重ね、たんと嬉しがる事のみ申せど、其身をふるはし、かたじけなしとばかり一言、其後はさしうつむきていと物哀に見えける。心程はあらまし外の人申せし、半彌泪忍びて身をまかせ、たふれの種を仕掛、手を取れ共用意の小座敷にもゆかず。盃事過てから留ても留らず、立歸るにぞ戀は残り、又あふ迄の形見なりと、淺黄じゆすの袷に兼光の中脇指の御物裝へなるを貽りにける。ひそかに國里を問けるに語る。土佐の者なるが御名残も只今出舟と、聲帆にあけて、川口一の洲より涙は浪の白玉に數まさりてん。其日は蘆の浦風かはりて三軒屋といふ所にかゝりぬ。けふの夕の淋しさに、硯の海深く思ひつゞけて書事こそあれ、四月五日の宵月さながら瞥へて、男もすなる半彌様のさし櫛かと疑ひも晴ぬに、村雨帳に思はぬ袖を濡のはじ

め、水鶏のたゞくは矢藏太鼓かとぞ、爰に難波島心は道頓堀を離れず、螢も飛子かと思はれ、をかしや尻なし川に影うつしぬ。明れば六日の朝嵐、錨を上てとり楫の音、磯つたひを行に尼が崎なるをの沖より、又風かはして廣田の社を見かけ、夢の浮橋渡るかと、やう／＼和田の御崎に寄てしばし難義忘れし。され共武庫山の氣色雲にかくして半彌も見えず、次第にうたてくおのづから胸を燃して、火宅の車舟も噪がしく執心の角の松原須佐の入口近く、暮つかた兵庫の湊にあがりて、風呂焼せて洗髪に、半彌様よりは是も形見の移香、初瀬といへる名の木留けるに、猶また其人、花ぞむかしのかほど迄はゆかしき、七日夜走りけはしく、假宿に旅煙管など忘れて本意なし。煙絶て鹽屋さびしく、須磨の上野も推量に詠めて、ほの／＼のあけに人丸の社を拜みつけて、明石にかゝれば俄にむら雨のして苦難義、され共杜宇聞べき便りの雨とて嬉しく、もし又若衆様の初音もやと心は空になりて、同じく八日も所を替す思ひつゞけて、九月十日の朝備前の國唐琴の泊り、虫明の瀬戸越ゆる折ふし、彼飛鳥姫の都戀しきと書殘されし扇も、半彌が仕出しの古歌模様かと思はれ、浪もたゞめば風なくて十一日の晝ばしり、備後の鞆の浦に入て同船おの／＼あがれば、我も獨りは暮し兼て跡を慕ひ行に、爰の分里とて女の風俗も素人女よりは見よげに、上方ははや謠うて仕舞ぬる、春の山道はさんさなど、今になりてから引て踊ぶりをかしく、是は座にたまられず、さても淫婦の姿にさへふつ／＼と飽き果てぬ

れば、常なるものは事欠にも身の毛立て又舟に乗移り、くだり日和をうれしく風早の浦、十二日の暮方より此男の心地うか／＼と打惱みて前後を忘れ、只松島が面子のみ思ひ出して、身をもたえ亂人となれば、舟子共怪しく沙汰して磯邊にあげ、濱庇のあるじを頼み、友とせし人一人二人つき添て、さまざまにいたはりし甲斐なく、次第に憔悴なつて我と身燃して、悲しや今思へば形もよしなや、難波を首途の時半彌が送りし脇指にして、自命を捨て、血は草芥を染なし、尸は路徑に横たはり、戀よりかくはなり行人の心ざし、日記にしるして残る物とて其名ばかり、土佐は硯の海浅き事にはあらず。

袖も通さぬ形見の衣

猿に袴を着て看板出し、夷橋筋に根本浮世楊枝とて芝居の若衆の定紋をうちつけ置しに、それ／＼の思はく其子の枕の語らひ及びがたき人、せめては心晴しに此紋楊枝を手に觸れて口中啄ける時は、戀の君が美舌をくはゆる心地のして、哀や氣を惱ましぬ。是程の思ひなれば身に替てなるものならば、命は夜の霜朝を待て消ゆべきが、勤め子の習ひとていづれにても花といふ一字にて、自由に詠めらるる事なればこそ人死のなけれ。かゝる面影を江戸京大坂三ヶ津に生れあはして、明暮見るさへ飽ざりし、遠國の人稀に見て生て歸るは不思議なり。狂言の番組役付を求めて其名をあらましに覺えて、我

國方の夜話の種となるも上方にのぼりし徳ぞかし。世に又世を渡る業程悲しきはなし、道頓堀の眞窟橋に人形屋の新六といへる人、手細工に獅子笛或ひは張貫の虎、またはふんどしなしの赤鬼、太鼓もたぬ安神鳴、これみな童子だらしの様々拵へて、年中丹波通ひして、そのもどりに、竹の皮荒布に肩替てしづかなる心なく、元日より大晦日まで夫婦の口過ばかりに、さりとせはしく、橋一つ南へ渡れば常芝居のあるに、つひに見た事もなし。灯臺本油の耗をなげき、始末心より是なり。此人ある時道に行暮て、里遠く、村雲山も時雨もよほして、風は松を噪がせて次第に淋しくなれば、やう／＼子安の地藏堂に立寄て寒き一夜を明しぬ。既に夜半と思ふ時、駒の鈴音、けはしく耳驚かし、旅人かと立聞せしに、形は見えずして御聲あらたに、お地藏／＼と呼給ひて、今夜の産所へ見舞給はずや、丹後の切戸の文殊ちやとの給へば、戸帳の内より、今宵は思ひよらざるとまり客あり、役々の諸神諸佛によきに心え給へといひ別れ給ひ、其夜の曉方に又文殊の聲し給ひて、今宵五畿内ばかりの平産壹萬貳千百拾六人、此内八千七拾三人娘なり。中にも攝津國三津寺八幡の氏子道頓堀の楊枝屋に、願ひのまゝなる男子平産せし、母嬉ぶ事淺からず、大きな貝して味噌汁の餅喰など、人間行末の身の程知らぬは淺まし、此子美形に育ちて後には藝子になりて、諸見物に思ひつかれ、是さかんの時至りて十八歳の正月二日の曙の夢と、かぎりの命、世間の義理ゆゑに捨る若衆ぞと、先を見開きての御物語、ありあ